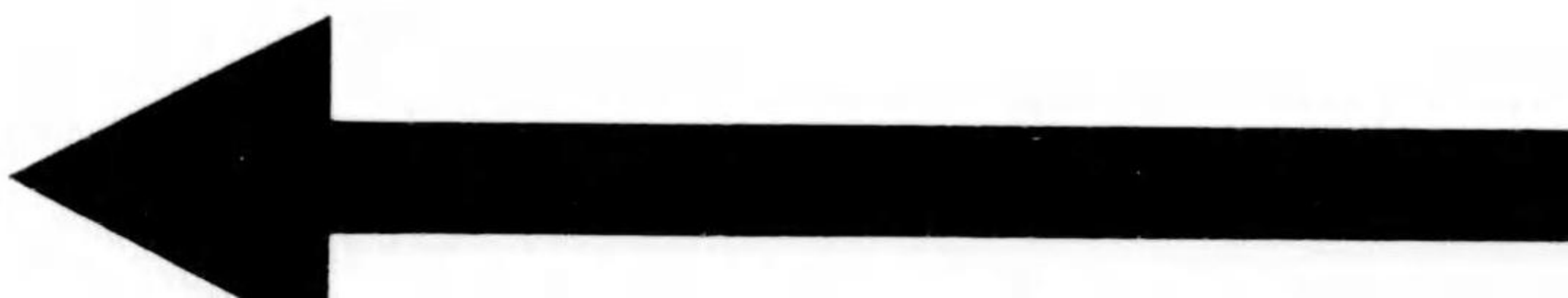


始



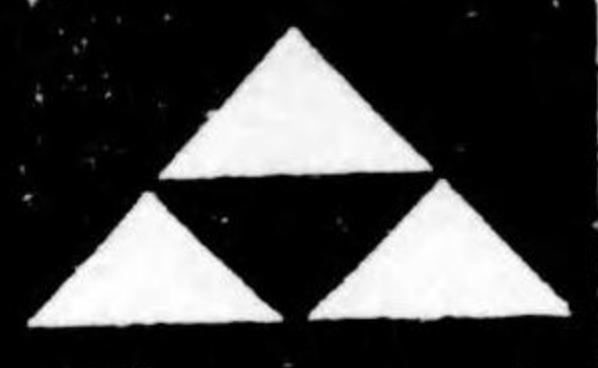
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹/_m 1 2 3 4 5

特



史談文庫
第二十二編
東海道
藤原
果毛

新



文



新



文



新



談



庫



談



庫



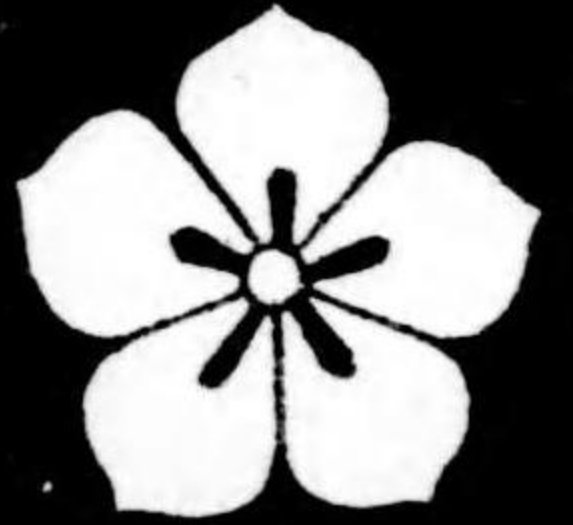
新



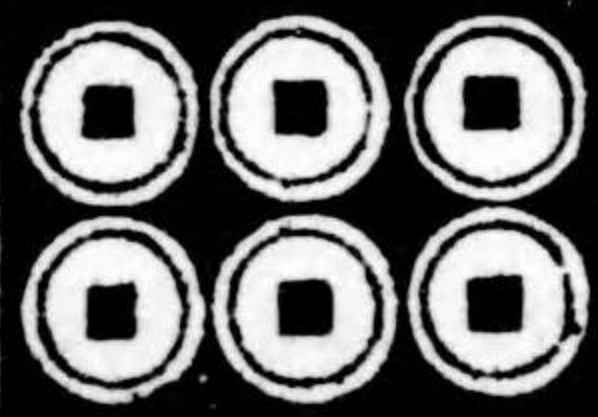
文



新



文



新

特100
646

八北衛兵郎次彌
毛栗膝道海東

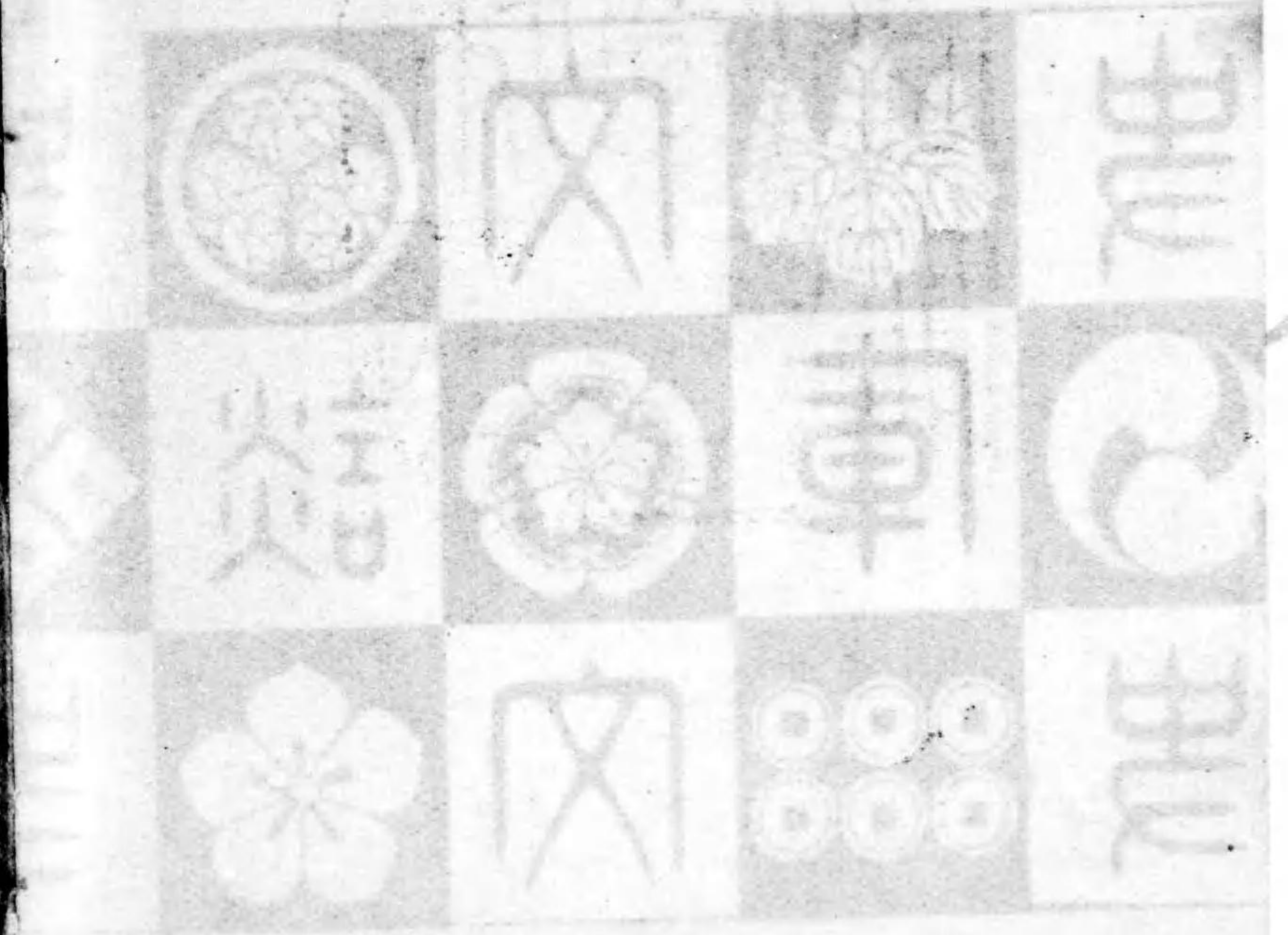
緒言

上下三千歳、發しては萬朶の櫻、凝ては百練の鐵さなる大和魂、熱烈火の如く、日東民族の精華と稱へらるゝ武士道、之れぞ我國の歴史を飾る誇りである。史談文庫は此の武士道に依て、人道を標榜し、武士道を鼓吹し、世道人心を裨益せん事を期す。此の書を讀んで振はざる怯夫ありや、此の書を讀んで起たざる懦夫ありや

發行者

天正
3. 5. 20

内交





目次

一 乃公は親子の縁が切りたくなつた……………一

二 コ、此の風呂は生命取りだ……………一五

三 此奴スツボンと離れさうなものだ……………二五

四 乃公は今夜一番槍の功名だ……………三七

五 身共は三保野屋四郎俊國の末孫だ……………四六

六 お前は冥途へ行く處であつたぜ……………五八

七 豆盗人が入りかけたのだ……………六八

八 大方此の犬等は無筆だらう……………七八

九 ヤイツ悪く巫山戯アがるな……………八八

十 ソリヤ最ふ頭が出掛けた……………九八

十一	之リア酒じやアれへ小便だ……………	一〇八
十二	人の顔の店卸をしやアがる……………	一一九
十三	盲目が物を云ひ啞の耳が聞へる……………	一三〇
十四	春中の横町に大きな紋所があらア……………	一四〇
十五	女のない國で生れた人であらう……………	一五〇
十六	私の女房を何故喰つたのじや……………	一六〇
十七	明日は久し振で百兩に對面……………	一七一
十八	醫者が清盛様の脈を見に行くやうに……………	一八九
十九	ヒヤー目が出る……………	二〇三
二十	お前男妾云ふ面じやアれへ……………	二一九
廿一	物云へば唇寒し春の風……………	二三七

彌次 東海道膝栗毛

蒼川生著

一 乃公は親子の縁が切りたくなつた

曲亭馬琴の八犬傳と相並んで、人口に膾炙して居るものは十返舎一九の道中膝栗毛であらう、滑稽小説家の白眉はさ問はば、何人も十返舎一九と答へるに躊躇しないであらう、其の一九が心血を注いだ一代の傑作と云はれたる道中膝栗毛は、首尾悉く之れ滑稽ならざるはなく、彌次郎兵衛北八の名は、滑稽の代名詞として珍重され、恐らく天下誰れ知らぬものもあるまい、然るに惜しいかな、原本は甚だ濫濫讀み悪く、爲に折角の名著も、讀者をして倦怠の情を起

さしめるのは遺憾である、著者茲に見る處あり、滑稽なる彌次北の本領を失はす、成べく猥褻を避け、誰れでも読み易く、分りよく綴つたのであるから、讀者諸君に於ても、之れ迄有り來りの道中膝栗毛と同一視すること勿れ……樂屋より口上仍つて如件。

X
X
X
X
X
X
X
X

武藏野の尾花が末にかゝる白雲と詠みしは、昔々浦の苦屋、鳴立澤の夕暮に愛で、仲の町の夕景色を知らぬ時の事である。今は井の内に鮎を汲む水道のみづこしな水長へにして、土藏造りの白壁建ち續き、香の物桶、空俵、破れ傘の置どころまで、地主唯は通さぬ大江戸の繁昌、他國の目よりは大道に金銀でも蒔散しあるやうに思はれ、何でも一稼ぎと志して、出掛けて來るもの幾千萬と數限りもなき其の中に、生國は駿州府中で、枋面屋彌次郎兵衛と云ふものがあつた。

親の代より相應の商人であつて、百二百の小判には何時でも困らぬ程の身代であつたが、安部川町の色酒にはまり込み、其の上旅役者鼻水多羅四郎が抱への鼻之助と云ふに打ち込み、斯の道に掛けては孝行者の彌次郎兵衛、黄金の釜を掘り出した心地して喜び、戯氣の有ツ丈けを盡した果は、身代に迄途方もなき穴を掘り明け、留度もなき尻の仕舞は、若衆と二人、尻に帆掛けて、府中の町を駈落するまで

借金に富士の山ほどあるゆへに

其處で夜逃を駿河ものかな

人を茶にしたことを吐き散し、聽て江戸に來て、神田八丁堀の新道小借家に住居して、少しの貯へあるに任せ、江戸前の魚の美味に、豊島屋の劍菱明樽は、幾個もなく長屋の手洗桶に配り、終に有金呑み盡し、之れは濟まぬ鼻之助に元服させて北八と名乗らせ、相應の商人の店に奉公にやつたが、元來北八才智

もの者さて、主人の氣に入り、忽ち小金の立ち廻る身分となり、又彌次郎兵衛は、
 國元にて習い覺へし油繪等を書いて、其の日暮しに、春米の當座買い、打き納
 豆や、蛸の剥身を、居ながら呼び込んで喰つて仕舞へば、銀錢一文も残らぬ身
 代、田舎より着續けの布子の袖から綿が出て、洗濯の氣をつけるものもなく
 これでは餘りの生活と、近處の呑み友達に打ち寄つて相談の末、……屋敷に奉公
 して居た年増女を媒介して、彌次郎兵衛に當行つた、破鍋に縋蓋が出来てから
 は、狼の口、開けたやうな衣物の縫も縫つてやり、諸事忠實しく仕度
 て、彌次郎兵衛を大事にする女房の奇特な志に、彌次郎兵衛も随分機嫌を取
 り、迂潤く暮して居るうち、早や十年計りの年月は経つたが、格別山の芋
 も鰻にならず、相變らずの貧乏世帯、成れど屈托せぬ彌次郎兵衛、朝から晩迄
 殻洒落に洒落散し、近處の放蕩者の遊び所となり、五合徳利の寢姿は何日も臺
 所の隅に轉がり、破れ三味線の音は絶へず、義太のドラ聲は、味噌桶の蓋を

あ明ける間さてはなかりける、彌次郎兵衛に仕込まれた北八も、最初の中こそ神
 妙に奉公して、親方の信用も次第に厚くなるにつれ、何時しか女の味を覺へ、
 おなじ店に奉公する女中を手に入れ、色男氣取りで居た天罰觀面、猪喰た報いは
 次第に女中の腹がセリ出し、最早臨月と云ふに周章て出し、彌次郎兵衛に金の
 才覺頼んだ爲め、狂言仕組んで、彌次郎兵衛は女房を叩き出す、ドサクサの
 大騒ぎの末が、北八も遂には親方の店を放り出され、又もや彌次郎兵衛の食客
 さはなつたりける北八、彌次さん、乃公は折角辛抱した親方の宅を放り出さ
 れ、斯うしてお前の宅で食客となつて居るが、一向満られへ、何うだい一つ満
 直しに、二人連れて伊勢參宮と洒落れやうじやアねへか……彌ウム、伊勢參
 宮さば暢氣で面白い、ダガ北八、裸體で道中は出来ねへぞ、昔からチャンと相
 場が……、○は……北オット、皆迄曰うな、軍師北八罷りある以上は、其
 の心配無用……彌無用と云つたつて、手前乃公の宅の食客じやアねへか、夫

れに何うして算段が……北へ、ン素破戰場と云ふ時には、一番槍は遁されへ
北八様だ、安心あつて然るべし彌「アハ、ハ、ハ、其の一番槍で失策つた手前が
……北「ナアニ、大丈夫だよ、チヨツト行つて来るよ……」北八「プラー飛び出
したが、友達の宅を小口より訪ね廻つて、何うやら路金は拵へて来た北「彌次
さん、此の通りだ、乃公の腕前には驚いたらう彌「イヨ、出来した北八、賞
めて置くぞ……北「アハ、ハ、ハ、お前に賞めて貰つたつて一文にもならねへ……
……サア彌次さん出掛けやう彌「オヤツ、餘り急じやアねへか北「ナアニ、思
い立つたが吉日だよ……彌「ウム、シヤア仕度しやう」彌次「郎兵衛一首の狂歌
を口吟む。

難波江のよしあし、さも旅なれば

思ひ立つ日を吉日とせん

ふたりともどくしんものきらく、神田八丁堀の裏棚を立ち出で、脚絆甲掛け草

おば 鞋穿き、時候は丁度更衣月の、對の裕衣に足許軽く、持前の性分をさらけ出し
太「平樂を並べつ、プラー、日本橋より品川も早や過ぎて、川崎、大森
も尻眼にかけ、何なく六郷の渡を越へた、向うを見るに萬年屋と云ふ茶店があ
る彌「イヨ、北八、萬年屋さば氣に入つた、仕度しやうか北「宜からう……」
ふたり 二人は床几に腰かける、女はイソ、女「お早ようございます彌「オイ姐さん
二膳頼むよ」北八「ジロ、女の腰付に目をつけて居たが北「彌次さん、見ねへ
ア「女の尻は去年迄は柳腰と云ふ奴であつたが、最う白腰になつてゐるぜ、何
でも杵に小突かれると見へる彌「アハ、ハ、ハ、手前氣にかゝるだらう、見惚れ
て居ないで早く喰いねへ、汁が冷めるよ……北「オヤツ、何時の間持つて來
た、少とも知らなかつた」二人は冗談口を叩きながら漸々食事を済して其處を
立ち出で、一二丁行くに、大名の行列が来る先「下アに、冠り物を取りま
せうぞ」先拂の制止の聲北「オヤツ、駈落者は下座をしねへでも宜いと見へる

彌「何故……北「何故つて、冠り物は通りませうぞ云つてるじやアねへか」
 スルト又先拂が先「馬士、馬の口を取りませうぞ……」北八聞いて北「ハ、
 ア、馬の口も取り外しが出来るさ見へる……彌「ハツハ、ハ、ハ、ハ、冗談じやアね
 へ、静にしる……」行列を見送つた二人は、馬方の勤める馬に乗つて、何なく
 神奈川の驛へ来た、二人は馬から降りて、一杯遣らうと茶屋に入り込む、彌次
 郎兵衛は早くも女中に目をつけ彌「北八、見ねへ、美しい代物だ北「ウム、此奴
 は素敵だ、時に姐さん何かある、酒さ肴の美味いのを出してくんな……女「ハ
 イ、畏まりました」聽て酒肴を持つて来る女「ハイ、お待遠様……彌「イヨ
 お前の焼た鱈なら美味いだらう」娘はフンと笑いながら往來の客に向い女「
 お休みなさい、奥が廣ふございます北「アハ、ハ、ハ、ハ、廣い筈だよ、裏手は海だ
 から安房上總迄續いて居る彌「オイ、餘計な事を云ふな……ダガ北八、此の肴
 はチト變だぜ……、御座つた目元だよ、處で一つ

「ござつたさ見ゆる目元のお肴は
 儲は娘が焼きくさつたか
 北「アハ、ハ、ハ、乃公も一つ遣らう
 味さうに見ゆる娘に油斷すな
 奴が焼いたる鱈の悪さに
 北「サア行かうく」二人は洒落口叩き、笑い興じて程ヶ谷も過ぎ、戸塚の手
 前に来るさ、何うやら日は西山に傾き初めた北「オイ彌次さん早く戸塚の驛に
 行つて泊らう彌「ウム、夫れも宜いが北八待て、チヨツト話がある北「何だい
 彌次さん……彌「他じやアねへが、此の道中は飯盛が勧めて五月蠅いから、一
 つ計略があるんだ北「フン、何ういふ計略……彌「乃公が親父になつて、手前
 は二十才代だから忤になるんだ、之から泊りくで親子と見せかけるのだ、面
 白いだらう北「ウム、此奴は妙だ、シヤア左様云ふ事にしやう、オイ親父さん

……彌「ウム、夫れで宜い、悴になり澄して居るのだぞ北「合點だ、併し好い女でもあつたら、此の悴を出し抜いて、一番乗をし兼ねないなア……彌「アハ、ハ、ハ、心配すな……オ、最う戸塚だ、笹屋にしゃうか、悴や……北「オイ阿父さん、此處では根つからお泊りなさいと云つて引張つてくれねへなア彌「なるほどちが成程、違くない……ハ、ア何方か豪い人がお泊りさ見へて、皆な宿屋に札が掲げてあるわい……北「ケド、泊らせるだらう、向ふの宿屋が意氣だぜ」二人は夫れへ来て彌「姐さん、泊めてくれる氣はねへかい女「ハイ、折角でございませが、今晚は合宿はなりません……彌「南無三寶、困つた……、ジャア向ふを尋ねて見やう」二人はダン／＼宿屋を小口から尋ねたが、一向泊めてくれない彌「悴、困るじやアないか
 さめざるは宿を痴氣と知られたり
 おほきんだまな
 大金玉の名ある戸塚に

彌「何うだ、巧いだらう北「阿父さん、狂歌ごころの騒ぎじやアねへよ……オ、此處にある、一つ尋ねて見やう、一向泊り客もねへやうだ」二人はズイさ入り込み彌「オイ、乃公等を泊めてくれないかい亭「ヤア、お二人さん、サアお泊り、私の宅は明いて居ます彌「奇體だなア、斯んな奇麗な家が流行られへこは……亭「イエ、私の宅は近頃建築しましたので、未だお客様が少うございますので……オイお鍋、お湯は何うだい」二人は安心してソロ／＼草鞋を脱ぎ始める北「コオ彌次さん……じやアねへ阿父さん、お前の草鞋も一緒にして置こう彌「ウム、ソシテ乃公の脚絆も洗つて置け……北「ナニ、脚絆を……彌「し、知れた事だ、悴は夫れ位いの事をして宜い、孝行だ北「ホイ／＼……女「お客様、お湯に召しませ……彌「北八……オット悴、湯に入れ北「イヤ、飲んでから入らう彌「意地の汚い事を云ふな、入つて来い、親の云ふ事を背くかつ北「オヤ／＼飛んだ處で親の威光を振り廻すものだ、北八不承無承に湯へ入る

ところへ亭主は立ち出で亭「お客様、ヨクお泊り下さいました、手前方は宿屋は
 今日が店開きでございます、貴公方は初めてのお泊り客でございますから、祝
 に一つ差上げますので、別に酒代を頂くのではございませぬ、御安心なまつて
 お飲み下さいませ彌「ハ、ア、ジャア私ち等が店開きソモ〜最初の客だな、
 先づお目出度い、斯んなに馳走になつては氣の毒だが、折角だから頂戴しやう
 亭「サア何うぞ、御遠慮な〜……今に吸物も出来ませぬ彌「イヤ、最う結構、介
 意つて貰つては困る……亭「何うぞ御寛くり……」亭主は挨拶して立つて行く
 北八は湯から上つて、居間へ戻つて来た北「エツへ、様子に残らすアレに
 て聞いた、ロハさは有難へ……彌「ヤイツ、洒落るな、最一度湯に入つて来い
 ……北「アハ、ハ、大抵左様な事だらうと思つて、湯にオチ〜入つて居る
 氣がしなかつた……オヤ〜足には未だ土が附いて居やアがる……サア阿父さ
 ん……始めやう……彌「乃公は、先刻から始めて居るわい、サア飲め……北「

オツト待ちられへ、ロハさ聞いちやア、之れで遣る彌「オヤ〜茶碗か……、呆
 れた奴だ」北八茶碗でグイ〜呑む北「ア、美味しいツ、良い酒だ、五臟六腑に
 染み渡り、何さも云へね〜……肴は何んだ……ハ、ア蒲鉾も白板だ、漬生薑
 に車海老か、ウム阿父さん、此の紫蘇の實が一番味い、お前は之れきり喰つた
 ら宜い彌「馬鹿云へ、夫れは後へ残すものだ、時に最う吸物が出さうなもんだ、
 處へ女中が吸物を持つて来る北「イヤ忝ない、サア姐さん、チトお合いをし
 てくん女「イエ、妾は一向無調法で……北「ソ、左様な事云はずにさ……
 今夜お前さ之が堅めの杯だよ……ノオ阿父さん……彌「オヤ〜、悴は早や酔
 つて居るの……北「ナニ、酔つたも氣が強い……アハ、ハ、阿父さん妙な面
 をして居やアがる」女は驚き杯を彌次郎兵衛に差す、北八之れを見て北「エ
 、畜生ツ、阿父奴思ひ獻に預つて居やアがる、オイ姐さん……宜いかい……、
 エツへ、」寄りかゝる女は逃げ出す、跡に彌次郎兵衛は彌「ヤイツ〜北八

てまへかんが
手前は考へのねへ奴だ、女の前で彼んな事を云ふない 北何故だい、悪きやア
云はれへが、お前が變な目附をするから、乃公は親子の縁が切りたくなつた、
彌「ウム、乃公も其の通りだ、親子で居るさ、女が何を云つても取り上げれへ
よ、糞思々しい……」二人は酔つた加減で、床の中へ藻潜り込んだが、獨り寢
の枕淋しく、經小僧を抱き寝して、ブツ／＼小言を云つて居る 彌「オイ北八寢
たかい…… 北何が睡られるもんかい、最う親子の縁は之れきりだよ 彌「アハ
、女に振られて怒つて行やアがる、マア北八聞け、一首詠んだぞ
一筋に親子と思ふ女より

只二筋の錢儲けせう

彌「マア怒るな、口ハで酒を飲んだ上に、女を抱寝しやうなんて、餘り虫が好
さ過るわい」と、云つて居る内、二人は何うやら睡込んで仕舞つた。

二、此の風呂は命取りだ

のんきものやじろべあきた
暢氣者の彌次郎兵衛北八は、時には馬子の唄ふ小室節に江戸前の意氣な咽喉を
あわせながら、長閑な日永を倦きもせず、草鞋の爪先から、パツパツ砂埃を蹴
上げながら、東海道は小田原の入口へ着いた、道側に待ち受けて居る宿引は、

宿「貴公、お泊りでございますか 彌「ウム、泊るのは分つてゐるが、乃公等は小
清水か白子屋に泊る積りだ 宿「ケドお客様、今晚は兩家もお泊りが澤山ござ
いますから、何うか私の方へお泊り下さいませ、精々勉強いたします 彌「ウム
貴様の處は奇麗か 宿「へい、此の間新築いたしましたして……何も蚊も新らしい
でございます、彌「座敷は、幾間ある 宿「ハイ、十疊さ八疊さ店が六疊でございます
ます 彌「ウム、据風呂は幾個ある 宿「お上と下と二つづゝ四ツございます 彌「
其方は、亭主か…… 宿「へい、左様で…… 彌「宗旨は、何んだ、アーンー北

オイく彌次さん、役人の宿調べじヤアあるまいし、飛んだ茶番だ……彌ア
 ハ、ツイ口が通つた、シヤアお前の宅へ泊らう」宿引は先に立つて二人を
 案内する亭、サア、お泊りだよ、お三、お湯を取つて上げる……彌
 オイ北八、乃公は腹が北山だが今飯を焚く様子だよ、埒の明かれへ北「オイ彌
 次さん、お前餘程無學文盲だれ彌「ナゼ……飯を焚きたア何うだい、飯を焚
 いたら粥になるよ彌「馬鹿ツ、揚足取るない北「ケド、理窟だよ、オイ姐さん
 湯が沸いたら入らうぜ彌「ヤイ北八、手前人の事を吐して、餘程無學文盲だ
 北「ナゼく、彌湯が沸いたら熱過て入れられへ、水が沸いたら入らうと何故
 云はれへ北「エツへ、此奴はシツペイ返しだ、恐れ入り屋の鬼子母神だ、
 アハ、女「モシ、お湯が沸きました彌「ナニ水が沸いたかい、ドレ入いら
 う」彌次郎兵衛手拭片手に風呂場へ来た彌「ハ、ア、此の宿の亭主は上方者だ
 な、之れが五右衛門風呂さ云ふんだらう、マア何んでも宜い……」彌次郎兵衛

五右衛門風呂の勝手を知らないから、湯の中に底の浮いて居るのを蓋と思つて
 何心なく取りのけ、グイと片足突込むと、下の釜が焼けて居る奴を直に踏ん
 だから堪らない彌「アツ、痛い、ヤ、焼傷をした……此奴は飛んだ
 恐ろしい据風呂だ」彌次郎兵衛膽を潰し彌「待てよ、一體之れは何んなにして
 入るのだらう、江戸ッ兒が斯んな事を尋れちやア外聞が悪い……さ云つて入る
 事は出来ないし……一體何うして……オ、左様だ、アノ雪隠の下駄、アレ
 を穿いて……占め……此奴はおも黒い……」と、彌次郎兵衛下駄を穿い
 て何なく風呂の中へズボリと入つた彌「ア、宜い氣持ちだ……併し足の裏が
 ヒリヒリする」一人り言を言ひながら洗つて居る、北八は待ち兼ねて北「オヤ
 ツ、彌次さんは何うしたんだらう、餘り遅いや……」ノコく風呂場へ来て視
 いて見ると、彌次郎兵衛暢氣に唸つて居る彌「お中は涙の露チリ程も……チン
 ツンシヤン……北「オヤく、呆れて物が云はれれへ、道理で遅い筈だ、

淨瑠璃は驚いた……オイ彌次さん、宜い加減に上つてくんれへ彌「イヨ一北八か、迎いさば太儀く……北「ジヨ冗談じやアねへ、餘り長湯だよ……彌「マア北八、乃公の手を一寸摘んで見てくれ北「ナニ……彌「最う、煮つたか知ら……北「何んだ、馬鹿くしい、サア上つたく」彌次郎兵衛湯から上り、下駄を密さ隠して彌「サア、手前入れ北「オツま合點ツ」早々素裸體さなり、急ぎ風呂場へ飛び込んだ、彌次郎兵衛べロリ舌を出して、知らぬ顔、ノコく居間へ立ち去る、北八何にも知らないから、ズボリ片足突込んで北「アツ、ツ、ワアー大變く、痛い、ヤ、彌次さん助けてくれ……彌「オイ、北八何うしたんだ、騒々しい北「コ、此の風呂は生命取りだ、お前何うして入つた彌「ウム……、何うして入ると云つて、何が何うしたのだ北「お前、足の裏は……彌「アハ、ハ、ハ、手前も江戸ツ兒の癖に、風呂へ入る術も知らねへのか、何も難かしい事はねへ、足からズイこ入つて、最初は少々熱いが辛抱して居る

き、宜い氣持ちになるよ北「ケド、辛抱して居るうちに、足が黒焦げにならア……彌「ジヤア、勝手にしろ」ま云ひ捨て、サツサま引取る、北八は小首傾け北「ハテ面妖な……、一體彌次さんは何うして入つたのだらう……」四方を見廻して居たが、不圖濡れて居る雪隠の下駄に目をつけ北「ウム、之れだく、讀めたく」北八打ち點頭さ、下駄を穿いて風呂の中へズボリこ入り込み北「アハツハ、ハ、ハ、宜い氣持ちだ、オーイ彌次さん……彌「何んだツ、又呼ぶのか、何うした北「成程、お前の云ふ通り、我慢して入ると少さも熱くねへ、ア、宜い氣持ちだ……、哀れなるかな石童丸は……ウン……エツ、ツンノ、テンコリヤく……」夢中になつて、手拍子足拍子面白く、義太を唸つて居る、餘り調子に乗つて、下駄で釜の底をトン／＼踏んで居る途端、思い掛けない釜の底は抜けて仕舞つた、ザア／＼シウ／＼湯が流れる、北八ペツタリ尻持搦いて北「アツ、ハ、ハ、助け船く……」聲聞きつけて彌次郎兵衛は飛んで來た彌

何うしたく、アハ、ハ、ハ、底を踏み抜いて居るアがる……」宿の亭主も騒を聞きつけ歩つて来る亭「モシ、貴公何うなさいました北「ウワー痛い、イヤ最う生命には別状ないが、釜の底が抜けて……、アイタ……、亭「オヤ、一體之れは何うして底が……北「ツイ、下駄でバタ／＼……」亭主北八の足を見て亭「ウワー、お前さん途方もない人だ、据風呂へ入るに下駄なんか穿いて……併も雪隠の下駄を……北「ケド、熱くて……亭「熱い筈ですよ、底敷の板を取り除けて入れるものですか……北「ダカラ、下駄を穿いたのだ、マア亭主、怒つたつて始まれへ、乃公が悪かつた、許してくれ」イロ／＼詫をして風呂の修繕料一兩出して、ヤツミ事済みになつた彌「アハ、ハ、ハ、之こそ茶番だ……」處で北八。

水風呂の釜を抜きたる科ゆゑに

宿屋の亭主尻をよこした

さは何うだい北「思々しい、何處の世界に一兩の風呂賃があるものかい」北八鬱ぎ込んで、洒落處の騒じやない、茫然として居るから彌「アハ、ハ、ハ、北八手前何も鬱には當らないよ、大きい徳をして居るじやアねへか北「冗談じやアねへ、何が徳だい彌「釜を抜いて二朱では安いよ、葭町へ行つて見る、夫れ位いの事じやアねへ北「エツ、人の心も知らねへで……彌「イヤ、手前が鬱ぎ込んで居るよ、乃公は氣の毒で堪らないよ北「何が……彌「何が云つて……、先刻の女が後に忍んで来る約束だが、側でお前が氣を悪くするよ尙のこゝ氣の毒で……乃公はポロ／＼涙が……北「オヤツ、お前何時の間に約束した、彌「知れた事を云へ、手前の湯に行つて居る間に、チト握らせて……最ふチャンと情約が成立つて居るんだよ……へツへ、色男は之れに困る……最ふ寝やう／＼……」彌次郎兵衛ニコ／＼笑つて、嬉しさに小便に行く、其の後へ女中が床を敷きに來た、北八見るより北「オイ姐さん、お前連の男さ何か約束

れも寝た、何なく夜が明ける、二人は小田原を立つて、箱根八里は爪先上り、何なく湯本の驛に着く、此處は兩側に店建ち並び、縹緞の美しい女が二三人づゝ、店先に出で、名物の挽物細工を商つて居る、北八軒／＼覗き込み、北「オヤ、洗粉の看板を見るやうに、顔と手先ばかり白い女が居らア彌、何か買つてやらうか……女「お入りなさいませ、お召しなさいませ、お土産を買つて下さいませ」彌次郎兵衛一軒の店に飛び込み彌「オイ姐さん、其の品を見せてくれ女「ハイ、ハイ、阿母さんお客様ですよ……」娘は往來の客を呼んで居る、奥より一人の婆立ち出で婆「ハイ、ハイ、之れでございませいかいな……彌「イ、イヤお前じやねへ、姐さん其の手に持つて居るのを見せな……女「ハイ、ハイ、お煙草入れてございませるか彌「ウム、之れ、之れは幾等だ女「ハイ、三百でございませす彌「三百……高いや、百にしれへ女「お前さんも、餘りな……、貴公方のお蔭で暮して居る店でございませすぞへ、左様なに懸直は申しません……」

さ、ジロリ横目で覗む、彌次郎兵衛グニヤ／＼彌「ソ、左様なら三百……女「最少し張込んで……、ねへ貴公……」又睨まれて彌「エ、面倒な、シヤア四百……女「大きに有難ふ……」女はニツコリ彌次郎兵衛の顔を見る彌次郎兵衛氣前を見せる積りか、財布から威勢よく四百投げ出し、煙草入を買ひ取つて彌「サア北八、行こふ……北「アハ、ハ、ハ、三百のものを四百に買ひさば、餘程彌次さん何うかして居るよ……彌「ダツテ、乃公は惜しくねへ、アノ娘は乃公に氣あり名古屋だよ……北「アハ、ハ、ハ、彌「何が可笑しい、夫でも乃公の顔ばかりかして居るよ……北「ハツハ、ハ、ハ、彌次さんアノ娘はお前やぶにら藪覗みだよ……彌「エツ、道理で變だと思つた……」二人は關所も無事に通り越し、何なく箱根の宿に着いた。

三 此奴スツボンと離れさうなものだ

彌「斯様に候ものは、お江戸の神田八丁堀邊に住居せし、彌次郎兵衛北八さま申す忘れ者にて候、サテモ我々伊勢へ七度熊野へ三度愛宕様へ月詣りの大願を起し、ブラリシヤラリと出掛け、根つから急がす候程に、エイヤツと箱根の宿に着いて候北「ヤア、彌次さん狂言は巧いや、乃公は一つ謠を遣らう、エヘン……、玉串け箱根の山の九折く……、實にや久方の甘酒屋、山椒魚の名所多き山路哉……何うだい彌次さん……彌「ウム、一寸話せる……」處へ甘酒屋の親爺爺名物甘酒でござい彌「北八、一つ休まうか北「ウム、宜からう……オイ一杯くん……」二人は甘酒を呑んでブラく出掛ける北「彌次さん、お前知つてるかい、白い手拭を被ると、顔の色が白くなつて、頓だ意氣な男に見へると云ふじやアねへか、眞實だらうか彌「ウム、眞實だ、違いない……北「ヨシく、シヤア一つ被つて歩こう」北八早速袂から手拭を出して被る北「エヘン……」鼻蓋かし澄して歩く、往來の女小供は、北八の顔を見てクツク笑つ

て行く北「何うだい彌次さん、眞實だよ、乃公の顔色が白く見へるから、女は嬉しさうに乃公の顔を見て惚々して居るよ、ヘン、色男には誰が成る……彌「アハハハハ、馬鹿ツ、笑つてる筈だよ……北「ナゼ……彌「手前の被つて手拭を見る、木綿眞田の紐がブラ下つてるじやアねへか……北「エツ……ヤツ失策つた、此奴は大失敗だ、之りやア手拭じやアねへ、越中禪だツ彌「アハハハ、手前夜前風呂へ行つた時、禪を袂へ入れて、夫れなり忘れて居たのだな……、大方今朝其の禪で顔も拭いたんだらう、穢い男だ北「道理で、否に變な悪臭い手拭だと思つた、處で彌次さん聞いておくれ

手拭いと思つて冠る禪は
さてこそ耻を晒すなりけり
彌「アハハハハ、ヨク出来て居るよ」二人はブラく歩いて居ると、後より来る、一人の旅人が旅「モシお前さん方如何にも氣樂さうだが、何處でございま

す彌「私等は江戸さ旅へエ、私も江戸ですよ、お前さん江戸は何處で……、彌「神田さ旅へーン、神田に私も永らく居たが、何うやら見たやうなお顔じや、シテ神田は何處で……彌「神田八丁堀で、私しの家は枋面屋彌次郎兵衛さ云つて、間口が二十五間、奥行が四十間、角屋敷の土藏造りで誰知らねへものはねへよ旅へーン、其の裏で……彌「飛んだ事を云ふ、裏店じやアねへ、一軒さ旅へーン、其の地面屋敷を人が持つてるさ云ふので……彌「何を云ふ、憚りながら私し等一寸出るにも供の五人や十人は連れて歩く身分だが、夫じやア面白くれへから、此の男一人を連れて伊勢詣りだよ旅へ成程、何うも左様いふ御人品に見へますな、貴公の母上なぞは好く知つて居ますが、何日か浅草の門跡様の前でお目にかゝりました彌「ハ、ア、大方寺参りに行つたのだらう旅「イエ、私を見るさ、一文遣つてさ……北「ハア、ハ、ハ、彌次さんお薦の母親を持つてるのだな彌「ヤイ、お前は乃公を馬鹿にしてるな……北「アハ、ハ、

、ハ、怒らなくつても宜いよ、及ばずさ雖も遠からずさ云ふ事があるぜ、マア似たり焼いたりだ彌「エ、イ、手前迄が何を云つてやアがる北「アハ、ハ、ハ、お前面白い男だ、今夜一緒に泊つては何うだい旅「へエ、泊りませう」三人は互いに笑い興じ、市の山に来るさ、小供が二三人、泥龜を玩弄にして遊んで居る、北八早くも見付け北「イヨ、彌次さん、好いものがあるよ、アノ泥龜を買つて、今晚宿へ着いたら、料理つて食らうじやアねへか、一杯餘計に飲めるぜ彌「ウム、宜からう」さ、小供に二十四文遣つて買い取り北「此奴は、好下物だ」靈に包んで北八は提げ北「サア、急ごう何うやら日が暮れさうだ」三人はドシ、山路を降る、入相の鐘はゴーン、幽かに響いて、鳥も塙に歸る頃、漸々三島の驛に着いた女、お泊りなさい……北「ウム、お前は別嬪だ……シヤア此處に泊らう女「サア、お入りなさいませ亭」之れはお早いお着で……お連様はお幾人……彌「ウム、蔭共は六人だよ……亭「エツへ、ハ、ハ、三太郎お

洗水を……」三人は足を洗つて奥へ通る女「サア、お湯にお召しなさいませ、
 彌「シヤア、お先へ……」彌次郎兵衛裸體になつて駆け出す彌「オヤツ、臭い
 ……」女「ホ、其處は雪隠でございます……」彌「ホイ失策つた……」跡に北八さ
 連の男は旅「時に北八さんアノ泥龜は……」北「ウム、床の間に置いてあるよ、
 寢酒の肴に料理しやう旅「夫れが、宜うございます」連の男も湯に行つた、北
 八は只一人何か考へて居たが北「オイ姐さん、此處にはレコは居ないかい……」
 小指を出して見せる女「ハイ、木曾の追分から参りました女郎衆が二人居りま
 す、お呼びなさいませ北「縹緞は何うだい、女「マア、十人並で……」北「面白
 い、呼んでくれ……」女「ハイ、畏まりました……」彌「ヤア、聞いたぞ、乃
 公も一ツ頼むよ……」北「オツト合點だ、チヤンと頼んである、姐さんリヤンコ
 だよ……」女「畏まりました」女は立つて行く、處へ連の男も湯から上つた男「
 エツへ、、意氣な話して……」彌「イヨ、お前さん何うだい男「私はマア後

の事にしやう」さ、話して居る處へ飯盛女が来る、膳が出る、酒が出る、三
 人はグイ／＼飲み始める、大分酔つて来る彌「サア、最ふ廢さう……」女「お竹
 さん、お爪さん、衣物を着代へて……」女「アイ、合點でござんす……」北「エツ
 へ、、アイ合點……洒落てるわい、お前さん何處へ寝る男「私は、次の間へ
 ……」彌「ナアニ、此處へ寝たら宜からう……」屏風で仕切つて置けば宜い……」
 彌次郎兵衛と北八は相手と枕を並べて寝る、件の男は仕切りの向うへ獨り寝
 る彌「オイ姐さん、お前幾才だア……」女「妾、お月様の年ですよ彌「ウム、十
 三……七ツで二十才云ふ事か、大分洒落てるわい」話聲も何時しか杜絶へて
 夜は次第に更け渡る、遙に聞ゆるは遠寺の鐘と犬の遠吠へのみ、行燈の油も盡
 きて、居間の中は何時の間にか眞暗闇、萬籟寂として聲なき丑満頃、床の間
 がガサ／＼ゴソ／＼と、異様の物音がすると思ふ間もなく、一匹の泥龜、藁包
 みを噛み破り、ノソリ／＼と這い出した、泥龜何ぞ思つたか、北八の夜着の中

へつづく、這い込む、北八目を覺して「北、オヤツ何だらう……」思つて居るうち、頭へッロロ、這い上る、果ては胸の處へ這い込んで来る、北八キヤツと叫んで掴んで投げ出すと、彌次郎兵衛の顔の上にパツタリ落ちる彌、ウワツ、大變だツ……」跳ねのけんとする途端、指先へガツシリ噛みつかれた彌「アイタ、……、助けてくれツ……」飯盛お竹は吃驚して「竹、ウワツ……、お前さん何うしたの……彌、何うも斯うもねへ、ハ、早く火を點けてくれツ……痛い……」北「オイ、彌次さん、何うした、真闇では一向分られへ……彌、イタイ、早く火を點けて……」騒いで居る其の隙目掛け、連の男は密に彌次郎兵衛の側に這いより、蒲團の下に財布を盗み出し、用意の石ころを入れ置き男「エツへ、馬鹿よツ……」ペロリ舌を出し、跡白浪と逃げ失せる、左様な事さば知らない彌次郎兵衛と北八は、慌て騒いで彌「イタイ、……、早く燈火を……」叫んで居る處へ、宿の女房は漸々燈火を持って来る女「貴公方

騒々しい何うなさいました彌、何うも斯うもねへ、ハ、早く来てくれ……オヤ、北八泥龜だよ……、イタ……イ……女「ウワー……、此處へ何うして泥龜……彌、イタイ、振つても何うしても離れれへ……北「アハハ、書間の泥龜奴、藁包みを抜け出したな、此奴スツポンと離れさうなものだ……彌「エ、イ、洒落れ處じやアねへ、アツ血が出た……イタ……イ……女「ソレハ、指を水の中へ入れると、直に離れて逃げ出しますよ、女「ホニ、左様だつた、貴公早く……」雨戸を開けて、彌次郎兵衛手洗鉢へ手を突つ込むと、泥龜は果して離れて泳ぐ彌「ヤレ、飛んだ目に遭はしやがつた北「アハハ、イヤハヤ奇妙奇手烈言語同断な奴だ、彌次さん聞きねへ、よれたちと寝たる側には泥龜も、耻かしいやら指を咬へる、北「何うだい彌次さん……彌「ウム、乃公も一つ……」

泥龜に咬へられたる苦しさに

此方や石龜の地團太を踏む

彌次郎兵衛痛さを堪へてウン／＼云つて居る、何なく夜が明ける、膳が出る、女「オヤツ、お一人さんば……北「ウム、気がつかなくつたが、アノ男は何うした彌「大方、雪隠だらう、マアお先に御免蒙むらう」飯は済んだが一向戻つて来ない北「彌次さん、雪隠で寝て居るのかも知れんよ彌「ウム、可笑しいなア……、オヤツ、風呂敷包みも笠もねへぞ北「オヤ／＼／＼彌次さん、財布はあるかい彌「ウム、財布は此の通り……」胴巻を引出して振つて見るさ、バツタリ落ちた紙包み……北「オヤツ、金の音と違うやうだぜ……」開いて見るさ石ころだ彌「ウワー、金が石になつた北「此奴は大變……、金が蛙になるさ云ふ話は聞いたが、石になるさは見初めだ……彌「ク、悔しいツ……、ア、彼の野郎がスリ替へたのだ、ゴ、胡麻の蠅に違いない……テ、亭主を呼んでくれ……

……」亭主は慌て、飛んで来る亭「何うも、飛んだ事で……彌「ヤイ亭主、手前胡麻の蠅に宿を貸すからにやア、上前を取つてらんだらう、何故沙汰なしで先へ立たした亭「之れは怪しからぬ、手前の方はお連様じやと思へばこそお泊め申しました、今朝立つたのも少さも知りませぬ、大方裏道から……彌「裏道も提灯もあるかい、サア胡麻の蠅を出せツ、乃公を見損なつたか、お江戸は神田の八丁堀で、枋面屋の彌次郎兵衛様と云つたら、誰れ知られへものもれへのだ、悪く出やアがるさ、屋臺骨をへシ折つて仕舞ふぞツ、サア承知が出来れへ胡麻の蠅を之れへ出せ、手前は大方共謀だらう……彌「彌次郎兵衛目の色變へて怒鳴り立てる北「オイ彌次さん、可愛想に亭主の知つた事じやアねへ、道伴にして来たのが此方が悪い、何うも仕様がねへ、諦めるが宜い、幾等お前が力味でも駄目だよ」云はれて見れば其の通りだから、彌次郎兵衛も泣寝入り彌「ア、満られへ、北八、府中へ行きやア路金の算段は附くのだ、一文なしで出掛け

やう遣い残りの錢で漸々勘定拂つて、悄悄宿を立ち出でたか、彌次郎兵衛は鬱ぎ込んで青菜に鹽だ、彌「ア、ア、口惜しい、北八乃公は泣きたくなるよ。」
ことわざ 枯木に花は咲きもせて
諺の枯木に花は咲きもせて

目をこすらする胡麻の蠅かな

北「彌次さん、左様なに力を落すものじゃアねへよ。」

浮き沈みある世は次第不動尊

祈れる甲斐もなき護麻の灰

北「此の通りだよ彌次さん……彌「北八、泥龜には噛まれる金は盗られる……」
乃公は最ふ坊主になりたい、泣面に熊蜂さは此の事だ、ア、情けない……」漸
やく沼津へ着き、夫より原、吉原、富士川も何なく渡つて蒲原の驛に入り込ん
で来た。

四 乃公は今夜一番槍の功名だ

世の中を何の絲瓜と茶にして居た彌次郎兵衛も、胡麻の蠅に金を盗られて元氣
更になく彌「ア、北八、空腹い、乃公は最ふ歩かれない……北「オイ彌次
さん、意氣地のねへ事を云つては困るよ」北八は彌次郎兵衛を慰めながら、蒲
原の驛に入り込み、彼方此方を見て居るさ、何うやら此の宿の本陣には、大名
の到着と見へ、勝手は今膳の出る最中だ、北八表より呢と覗き込み、何か考へ
て居たが、北「オイ彌次さん、チヨツト此の風呂敷包みを持って居てくんな彌、
何うする北「イヤ、少しの間だ……」彌次郎兵衛に包みを渡した北八は、其の
儘本陣の勝手元に入り込み、大勢の女中が膳を出して居るドサクサ紛れに乗
じて、片隅に座り澄し返つて北「オイ姐さん、此處へも一膳……女「ハイ、
……」女中は本陣の客だと思つて膳を出す北「イヨ、大分馳走がある、有難

い……」ムシヤ／＼ガサ／＼、食うこの早いこと、鱧腹詰め込んだ上、ソツ
と袂から、手拭を出し、夫れへドツサリ飯を包み、懷裡に入れて狐鼠／＼逃げ
出し北彌次さん、お待遠ふ……彌「手前、何處へ行つた北何處と云つて、
本陣で馳走になつて来た彌エツ……北本陣のドサクサ紛れに……十五六杯
……彌「テ、手前も實のれへ野郎だ、何故乃公も連れて行かない、ヒ、空腹じ
うて……北「オツト、皆迄曰ふな、お前には土産を持つて来た、之れ此の通
り……深切な男だらう、食ひれへ彌「何んだ……飯か……此奴は有難い、イ
ヤチカ／＼、手前氣が利いて居る、ア、美味い／＼北「アハ、ハ、ハ、時に宿端
れに行つて木賃へ泊らう彌「ウム、成べく別嬪のある家に泊りてへのふ北「ア
ハ、ハ、ハ、木賃で泊るほどだのに、別嬪も瓢箪もあるものかい、ソレ向ふに木賃
宿がある、イヨ一彌次さん見れへ、好い順禮が泊つてるよ彌「ホンニ、此奴只
は置かれれへ……北「アハ、ハ、ハ、腹が太るよボツ／＼謀叛氣が出るじやア

へか……」二人は木賃宿に泊つた、北八は順禮の側に座り込む、六部は順禮
彌次郎兵衛北八の四人で、四方八方の話をして居る、スルト宿の婆は「婆」サア
皆さんお寢み、御覽の通り狭いから、妾は順禮のお娘は二階へ上つて寝ませう」
婆は順禮を連れて、階子をかけ二階へ上る、六部は亭主と並んで轉り寝る、
北八は彌次郎兵衛と顔見合し北乃公は、小便に行つて来やう彌「ウム、乃公
も一處に行こう……」二人は裏口へ出た彌「オイ北八、アノ順禮奴を覗つて居
たら、婆が二階へ連れて行つた、忌々しいなア北「ハツハ、ハ、ハ、ダガ彌次さ
ん、最前から話して居るうち、乃公がソツと順禮の手を握つたり、尻を抓つた
りして居たが、お前知るめへ彌「嘘吐け……北「イヤ、嘘じやアねへ、乃公は
今夜娘の處へ一番槍の功名だ……彌「オヤ／＼、早い男だ……」二人は小便
済して内へ入り、脇を枕にコロリと寝る、夜は次第に更けて、壁を洩る風の音
陰に響く鐘の音に不圖目を覺した北八は、ムツクリ頭を擡げて見るさ、皆々晝

の疲れて、グウ〜と高駈、時分はヨシと北八起き上り、暗の中を手探りに、
 漸々二階へ上つて来た、二階は名ばかり、竹の斯の子で敷きつめてあるのだ
 から、歩く度にギイ〜と音がする、北八四ツ這いになり、寢息を窺い北ウ
 ム、此方が娘らしい……占た〜ツ……」娘と思つて婆の寢床へ這い込んだ、
 婆は不圖目を覺し婆、オヤツ、誰だい……アラ嫌らしい……泥棒ツ……」叫ぶ
 聲に婆と知つて北八は、吃驚仰天北「此奴は失策つた」と、慌て、逃げ出す途
 端に、斯の子を踏み抜いて、アツと云ふ間もあらばこそ、ガラ〜ドスーン、
 此の物音に一同はアツと目を覺し亭「何んだ〜、酷い音がした、婆泥棒だ
 〜」六「エツ、泥棒……恐ろしい音がした、早く燈火を點ける……」ワア〜
 と騒いで居る、此方北八は二階を踏み抜いて、下へドシンと落ち、腰を健か打
 つたが痛いとも云へず、我慢をして手探りに探つて見る、何うやら佛壇の中
 らしい北「オヤ〜佛壇の中は驚いた」北八苦しくもあり、可笑しくもあり

逃げ出さうとして居る折しも亭「婆ア、泥棒は何處だ〜……オヤツ何だか佛
 壇の中がゴソ〜音がして居るよ……此畜生、佛様の中へ落ちたんだな……
 ……」突然戸を引開ける、北八は面目なげにソロ〜這い出す亭「オヤ〜、
 お前は……北、モシ、身延様へは何う参ります……亭「馬鹿云はつしやい、一
 體何うしたんだ北「イエ御亭主、私は小便に立つた處が、ツイ戸迷いをして、
 ……」亭「ナニ戸迷い……此の人は佛壇の中へ小便をしたんじやアねへか……」
 佛壇の中を覗き込みながら亭「何故、二階から落ちたのだ、ワザ〜二階へ小
 便を放りに行く奴があるものか……北「イエ、ツイ猫に追はれて……婆「お前
 嘘を吐いては不可んよ、妾の床の中へ這い込んだじやアないか、妾は最ふ六十
 六だよ……ハ、ア順禮の娘さんの處へ来て間違へたのだな……北「イヤ最ふ、
 面目次第もないが……實は禪を鼠に引かれて……夫れを取りに二階へ……」
 北八は苦しい辯解をして居る、散々詫言をした上、夜が明けると、浴衣一枚賣り

拂い、其の金を二階の修繕料に渡し置き、這々の體で二人は宿を飛び出したが、北八鬱ぎ込んで青息吐息で居る彌「アハハハハ、手前はヨク失策る奴だ、小田原では据風呂の底を抜いて二朱取られ、夜前は二階を踏み破つて三百取られるとは智慧がねへなア北「イヤ、面目次第もれへ、忌々しいが一首浮んだ。
じゆんれいむすめ おもしの
順禮の娘さ思い忍びしは

儲こそ高野六十の婆

彌「アハハハハ、戸迷いの云ひ譯も可笑しかつたが、鼠が禪を引いたは苦しむ、辯解だつたぜ」二人は何なく由井へ来た、夫より興津、江尻、府中へ来るも早や過ぎて、漸々藤枝の驛へ歩つて来た、丁度宿の入口になるさ、馬子の牽いた駄馬が何に驚いたか、ヒーン、一聲の嘶と共に跳れ上つた、途端に一人の田舎老爺、吃驚して横に飛び退こうとする機會に、北八にドンと突き當つ

た、北八不意を喰つて、仰向け様に打つ倒れた、生憎倒れた處が水溜りで衣物はズク／＼になる、掛けがへのない顔も泥水だらけ北「ウワー、此奴は堪られへ……」ムク／＼と起き上がるが早いか、恐ろしい權幕で、老爺の首玉引つ掴み北「ヤイ老惚れツ、手前目はねへのか、寒鳥の黒焼でも喰やアがれツ老「ハイ、之れは何うも失禮を……御免なさい……北「ヤイ、御免なさいじやア濟まれへぞ、ヤイ見損つたが、小粒でもギヤツと生れてから、金の鯨銚を睨んで、産湯から水道の水を浴びた男だぞ」啖呵交りに怒鳴り付ける、老爺は夫れほごに驚かない老「イエ、水を浴びたなら宜うございませうが、お前さんの轉じた處は、馬の小便溜りだ……北「エツ、道理で變な臭いがすると思つた、イヨ勘辨出来ねへツ」老爺の顔をポカーン、ニツ三ツ打ん殴る彌「オイ／＼北八、大人氣ねへ廢しねへ」引止める、老爺は面膨らして立ち去る彌「アハハハ、北八大層力味で居たなア、一つ出来たよ

頭につて北八に今叩かれし

薬罐頭の老爺へこんだ

北「アハハハ、違われへ……」打ら笑いつゝ瀬戸川を越へ、町端れの茶店の前に来るさ、先刻の老爺が休んで居る、二人を見るさ聲をかけ「老ヤアお二人さん、先刻は何うも失禮をいたしました、私も一杯呑んで居た元氣で飛んだ事を云ひました、お前さんが了簡してくれたから、無事に村へ歸れるさ云ふもの其のお禮に一つ酒を進ぜたい、マア此處へ掛けて下され」云はれて彌次郎兵衛彌「チアニ、私等は最う酒は飲んで来たよ」口では立派に云つて居るが、元來が酒には目のない二人、無理矢理勸められ、之れ幸いさ奥の座敷へ通つた老「サア、お女中酒だ、肴も美味いものを宜いかい……」間もなく酒肴が出る老「私が毒見しませう……」オツトツト、イヨー良い酒だ、サアお若いの……」三人は差しつ献されつ飲み始める、彌次郎兵衛と北八はシタリ顔

北「オイ爺さん、乃公も先刻虫の居處が悪かつたのだ、眞平御免だよ彌「チアニ、老爺さんはザツクブランだよ……」野暮じやアねへ」二人はグイグイ飲む、酒肴はドシグ出る、折柄老爺は小便に立つた、跡に北八「北「オイ彌次さん老爺の來ないうちに飲んだ」二人は飲む食ふの大元氣彌「オヤツ、老爺何うしたんだらう、筥棒に小便が永いよ北「ウム、痲病かも知れねへ北「痲病だつて長過ぎるよ……」オイ姐さん、此處に居た老爺は何處へ行つた女「へエ、最うお歸りに……」彌「ハテナ、變だぜ……」二人は間毎ぐを探す、雪隠も調べたが、影も形も見へない北「オイ姐さん、今の男は此處の拂をして歸つたらしれへ女「イ、エ未だ頂きませぬ北「エ、ツ、ジャア野郎乃公に興味返しをしたのだな、思々しい彌「アハハハ、怒つたつて仕様がねへ、北八、手前の顔で一首浮んだ。

御馳走と思いの外の始末にて

腹も膨れた面も膨れた

北「アハ、ハ、ハ、乃公は此の通りだ、聞いてくれ」

有がたい忝ないさ禮云ふて

一ばい食へし酒の御馳走

ふたりは逃々勘定済して其處を立ち出で、大井川の手前島田の驛に乗り込んで来た。

五 身共は三保野屋四郎俊國の末孫だ

川越 人足共は二人の姿を見るさバラ／＼走つて来た川「旦那、川を頼みます

彌「ウム、二人を幾等で越す川「今朝開いた川だから肩じやア浮雲いですよ、

蓮臺でやるさ二人で八百は貰はないさ……彌「ウワー、途方もれへ……越後新

潟じやアあるまいし、八百遣せも恐ろしい川「ジャア、幾等下さる彌「マア廢

さう、乃公等は直に渡る川「冗談じやアねへ、此の急流に……川流れが出来ま

すぜ……」云ふを聞き流して彌次郎兵衛は彌「ナント北八、彼奴等は方外な事

を云やアがるから、寧その事問屋へ掛つて越さう、手前の脇差を貸せ北「何う

する彌「何うするつて、武士になるんだ、マア貸せ……」北八の脇差を取つて

腰に差し、自分の脇差を後の方へ延ばし、大小刀を帯して居るやうに見せかけ

彌「アハ、ハ、ハ、出来合の武士だ、北八ヨク似合つてるだらう、サア風呂敷包

を手前持て……可笑しな顔をするな……供になつて尾いて来るのだ……北「ア

ハ、ハ、ハ、此奴は大笑いだ、彌次さん頭が變だぜ……、チト反身になつて歩か

なくちやア……彌「ヨシ／＼、サア来い」彌次郎兵衛大手を振つて肩で風切

り、ノソ／＼問屋場へ歩つて来た、澄し返つて武士の音聲を使い彌「コリヤ、

問屋共、大切な主用で罷通る、川越人足を頼むぞツ問「ハイ／＼、畏れりまし

た、御同勢は……彌「ナニ、同勢……問「左様で……、旦那はお駕かお馬か……

……お荷物に幾駄ございます彌「ウム、本馬が三疋、駄荷が都合十五駄程ある
 然し道中邪覺だから江戸へ置いて来た、其の代り身共 駕陸尺が八人……夫れ
 へ記せ問「ハイ、お侍衆は……彌「侍共は十二人、槍持 鉄箱、草履
 取、竹馬都合三十人餘りじや問「ハイ、其の御同勢は何處に居られまする
 彌「ウム……夫れは其の……何じや、江戸 表出立の際に召連れたが途中で追
 々病氣にかゝり、宿々へ残し置いた、夫れゆへ只今越さうと云ふものは、正味
 タツタ二人じや、臺越しにしやう幾等だ、アームー問「ハイ蓮臺で四百八十文
 で……彌「ソレは高いぞ、チト負ける問「エツへ、川越賃錢を直切る奴
 があるかい、愚圖く云はすま行けく、俄に風向が變つて来た、彌次郎兵
 衛向も武士氣取りで、彌「ヤイツ、無禮者奴がツ、武士に向つて……、コ、腰
 の大小刀が見へぬかつ問「アハ、何うも變な武士じや彌「何が變だ、不
 届至極……ウヌ其の分には……問「オイ、宜い加減にしれへ、お前さん

の刀の小尻は何うだい、折れてるじやアないか……」云はれて彌次郎兵衛ヒヨ
 イと見ると、刀の鐺が二つに折れて居る、流石の彌次郎兵衛彌「オヤ、
 問「オヤ、もれへもんだ、刀の折れたものを差す武士が何處にある、大方問
 屋場を瞞着しに來たのじやな、其の分には濟さぬぞツ彌「ア、コリヤ待て、身
 共は三保野屋四郎俊國の末孫だから、夫れで折れた刀を差して居る問「エ、イ
 何を云つてやアがる、打ン縛るぞツ」北八は青くなり北「オイ彌次さん、大變
 た……行こうく」手を取つて引張る、彌次郎兵衛狐鼠く逃げ出す」問屋場
 の若いものはドツと冷笑ふ彌「ホイ、遣り損なつて忌々しい……、北八聞
 いてくれ。

出來合のなまくら武士のしるしさて

刀の先の折てはづかし

北「アハ、サア越さうく」漸々直段取り極め、蓮臺に乗つて渡つた、

互ひに笑い興じて、金谷より日坂、掛川、袋井も過ぎて、鹽井川さ云ふ川に差しかゝるさ、昨日の大雨で橋が流れ、往來のものは裾を捲つてザブ／＼川を渡つて居る北「オヤツ彌次さん、橋がねへぞ、ザブ／＼を遣らうか彌、ウム、仕方かれへ……」二人は手を引合つて渉る仕度に取りかゝつて居る折柄、京上りの座頭が二人歩つて来た座「モシ、川は深うございますかな、膝位いばありますかい北「左様だ、併し水が早いよ、お前方危いぜ、用心して渉るが宜い座「ハ、ア、成程……」一人は石を拾つて投げ込み、水音を考へながら、座「ヤア、此の邊が浅いやうだ、コリヤ猿市、二人ながら脚絆を取るも面倒だ貴様若役に乃公を負つて渉れ猿「アハ、ハ、横着な事を云つてゐるわい、シヤア、犬市拳で来い、負けた方が負つて渉るのじや犬「コリヤ面白いサア来い……」二人は拳をやる犬「サア、乃公が勝つたぞ……」猿「エツ、忌々しいなア……、シヤア此の風呂敷包を貴様持つて居てくれ……ソレ来い……」一人

の座頭は脊を向ける、彌次郎兵衛北八之れを見て北「オヤ／＼、座頭が拳を遣るさば奇體だ、アレで見へるんだらうか彌「ナアニ、見へねへから手を握り合つて探つてるじやアないか北「違いいねへ……オヤ／＼脊を向けた……ソレ彌次さん……」北八は彌次郎兵衛に目配せするさ、彌次郎兵衛は素早く猿市の脊に負はれる、猿市は犬市と心得て、ザブ／＼川へ這入る、何なく向ふ岸へ渉る、取り残された犬市は小首傾け犬「コリヤ猿市、何うしたのだ早く川を渡さぬかい、之れを聞いて猿市腹を立て猿「ヤイ、巫山戯るな、今渡してやつたのに、又向ふへ行つて乃公を弄るんだな犬「馬鹿云へ、貴様ばかり渡つて太い奴だ猿「太いさば貴様の事じや犬「ナニイ、兄弟子に口答へするかツ、早く来ぬかツ」怒鳴りつけられ猿市不承無承に引返して猿「何うも分らない、今渡したのだが……マア宜い……サア確り負さつて……」脊中を出す、途端、待ち構へて居た北八奴、横合より蝗の如く脊に負はれた、猿市サツサ川へ入る、ザブ

へ置く、北八密と手を出して、猪口を横奪りしてグイさ呑み、元の處へ置いて知らぬ顔、二人の座頭は頻りに北八の悪口をしながら、猪口に酒を一杯注ぎ一口呑んで下へ置く、北八チヨイ／＼横奪りして呑む、二合の酒は早くも無くなつた犬、オヤツ、猿市、手前は獨りでグイ／＼飲んでるな、乃公は未だ一二杯しか飲まないのだぞ猿、イヤ、乃公も二口呑んだばかりだ、ハ、ア亭主奴、盲目だと思つて馬鹿にして居やアがる……ヤイ亭主、宜い加減に馬鹿にしるいふたり、二人は亭主に喰つてかゝる、スルト側に遊んで居る小供が、小、ワ、イ、座頭さんの酒は、皆なアノ人が横奪りして呑んだのじや」と、北八を指さして笑ふ、亭主は怒つて北八に談判する、北八強情にも北、イヤ、乃公は茶を呑んだばかりだ、亭主「ジャア、茶代を貰いませう、二合で六十四文……北、ヤツ、茶を二合飲んだと……、途方もねへ……」等つて居る彌次郎兵衛は彌「オイ／＼北八面倒だ拂つてやれ、手前のする事は何でも納まらねへ、足元の明るいうちに拂

つて仕舞へ」と、目顔で知らず、北八泣々六十四文拂つて北「忌々しい、今日は何事な事碌な事はねへ、錢を出して酒を飲んで糞粕のやうに云はれては堪られへ彌「アハ、ハ、ハ、乃公よりは餘程智恵のねへ男だ、其處で北八出来たよ。

する事や爲す事も皆芦窪や

お茶にしられた人のしがなさ

北「アハ、ハ、ハ、違くない……」打ち笑つて、袋井の驛より見附も過ぎ、濱松へ着いた、二人は一軒の宿へ入り込む亭「お早うございます、ソレお茶とお湯だよ……彌「北八、先へ這入れ……女「サア、御案内いたしませう」北八は湯に這入る、彌次郎兵衛は奥の居間に通る、聽て膳が出る、二人は食事も済み、彌次郎兵衛も湯に入つて後、按摩を呼び彌「サア按摩さん、遣つて貰はうか……時に今湯殿から見たが、此處のお内儀さんらしいが、病人と見へて取り亂

して居たよ、ナカ〜美しい代物だ按「アリヤ貴公、氣狂いで……北「ナニ狂氣……、狂氣でもアレ位いの繚繚なら我慢するよ按「ハツハ、今に念佛の鐘が鳴りますよ……」云つて居るうちに、勝手の方で百萬遍の念佛講が始まる按「ソレ御覽なさい、實はアノ氣違いは此處の女中でございましてが、旦那が手を出して摘みますこれ、お内儀さんが大層のチン〜で、打つやら蹴るやらの夫婦喧嘩の末、到頭お内儀さんは首を縊つて、死んだんです、處が旦那は結句夫れを宜い事にして、其の晩から女中を後妻に直す云ふ始末、スルトお内儀さんの怨靈が女中に乗り移つて、アノ通り氣狂になつて仕舞いました、夫れで毎晩百萬遍を唱へて居ります」之れを聞いて臆病者の彌次郎兵衛北八は妙な顔して北「何だ、幽霊が出るのか……按「出ますよ彌、嘘吐け、幽霊なんか……按「イエ、嘘じやアありません、此の屋根に白いものが立つて居るのを見たものがございませす北「ウワー、飛んだ處に泊り合せた按「夫れが而も

ソレお前さんの後ろの椽で首を縊つたので……北「ウワー、此奴は堪らぬ、首筋許がゾク〜する……、南無阿彌陀佛〜……彌「オヤ〜、生憎、シヨボ〜雨が降り出したぜ、氣味の悪い……北「オ、乃公は、最ふ寝るぜ……」按「摩を返へす、女の床を延べに来る、女好の二人も青くなつて洒落も出ない、小さくなつて床へ藻溜り込んだが、何うしても睡られない彌「北八、一層今から立とうか北「ト、飛んだ事を云ふ、今の話を聞いて何んで夜道が歩かれるものか……桑原〜……」北八目ばかりパチ〜させて居る、天井で鼠がチウ〜〜……北「ウワツ、鼠迄が驚かしやアがる、オヤツ小便迄放りかけた……、彌「乃公は、其の鼠が羨しい、先刻から小便が催うして居るんだが……、我慢して居る……オヤツ、何だか柔かいものが足へ……北「エツ、柔かい……何んだ〜……」ニヤ〜……彌「エツ、此ン畜生奴ツ、猫迄が……シツ〜ツ北八乃公は最ふ堪らね〜……北「乃公も、其の通りだ、怖いと思つて、洩りさ

うになつた彌「ジャア、思い切つて一處に行こうか北彌次さん、雨戸を開けて飛ばさうじやねへか彌ウム、宜からう……、手前先にやれ北「マア、彌次さん先に……、一番乗なら乃公は遁さぬへが、小便の一番乗りは……餘り彌「マア宜い、先へ遣れ……」北八は恐る／＼雨戸をガラリ。

六 お前は冥途へ行く處であつたぜ

幽霊の正體見たり枯尾花、北八ヒヨイと向ふを見るとき、何だか白いものが、フワ／＼して居る北「キヤツ……」悲鳴を上げて尻餅つく彌「オヤツ何うしたか北八何うした處か、アレを見れへ、白いものが立つて……腰から下がポーツと見へぬ……彌「エツ、足がねへか……ドレ……」彌次郎兵衛も怖いもの見たし、恐る／＼覗いて見て彌「キヤツ」之れも倒れる、「ウーン」、倒れた途端に氣絶する、北八吃驚北「ヤア、大變／＼オーイ彌次さん／＼、彌次さんヤ

イ、此の聲に勝手より亭主が走つて来る、彌次郎兵衛を引起して水を吞ますこと正氣がつく亭「何うなさいました北「イヤ、小便に行つたと思われへ、處が彼處に白いものがフワリ／＼……ア、怖……亭「ヘーン、其奴は妙だ……」亭主庭に出て見ると、白い襦袢が竿に差して干してある亭「アハ、ハ、ハ、お客さん之りやア襦袢が干してあるのを忘れて居るんですよ北「エツ、襦袢、道理で足がないと思つた、アハ、ハ、ハ、二人も始めて大笑い、亭主は引取る彌「エ、忌々しい飛んだ膽を潰した、サア北八寝やう、小便なんか何處かへ行つて仕舞つた、夜着引被つた。

幽霊と思ひの外に洗濯の

襦袢の糊がこわく覺へた

北「アハ、ハ、ハ、狂歌處じやアねへ、お前は冥途へ行く處であつたぜ」漸やく寢る、夜が明けて宿を立ち、舞坂より海上二里の間を乗合船にのり、船は順風に

帆を揚げて出る、スルト一人の老爺が頼りに何か探し始め、老「ヤア、見へぬ
 く……」大騒をやつて居る彌「オイ老爺さん、何が見へない老「へい、蛇が
 一匹……北ウワー、蛇が居ない……考生た蛇でございます」之れを聞いて
 乗合客は騒ぎ出す彌「お前も、頼だものを持つて来るものだ蛇を何うするの
 だ北「氣味の悪い……此處等に居らぬか……△「ヤア、此の板子の下にどぐ
 ろを巻いて居るわ……ソレ向ふへ逃げた」親爺は何なく引捕へて懷裡に入れ
 る北「オイ、懷裡へ入れちやア、又這い出すよ、海へ放つて仕舞つたら何
 うだい親「イヤ、私は蛇使いじやもの……商買道具じや彌「幾等商買道具で
 も人が迷惑すらア、ヤイ船頭ナゼ斯んなものを乗せた船「私は、蛇を持つて居
 るさは知られへですよ……北「オイ親爺さん、皆ながアンなに云つてるのだけ
 ら、捨て、仕舞つたら宜いよ親「否だ、私の飯の種だ」スルト北八は力味出し
 た北「ヤイ、親爺、愚圖く云つてやアがるさ、手前も蛇も海の中へ投げ込む

ぞ親「ナニイ、巫山戯た事を云やアがるな、投げ込んで見る、乃公にも手があ
 るぞツ北「何を吐す、此の野郎……」北八親爺の胸倉を掴む、蛇がニヨロく
 出る、北八キヤツと驚く、彌次郎兵衛は横合より親爺に一つ拳骨をコツーン、
 蛇がヌツと出る、彌次郎兵衛もキヤツと逃げる、蛇は又もや懷裡より這い出す
 北八素早く脇差抜き取り北「此ン畜生ツ」蛇の頭をブン殴る、蛇は脇差へ巻き
 つく北「エ、イ、此奴めが……」蛇を海中へ投げる途端に、脇差と共に放り込
 む、見るく蛇は渦巻く波に巻き込まれて見へなくなつたが、脇差は竹光作り
 だから、ポカリく浮いて流れる、北八面目ない顔して怨めしさうに眺めて居
 る、船中一同大笑い船「ヤア、之れで安心した、併しお前さんの脇差は氣の毒
 だ」スルト親爺は負けぬ氣になつて親「アハ、ハ、ハ、乃公は此の年になるが、
 脇差の流れるのは始めて見た……北「エ、イ、手前等田舎者に分るかい、チト
 物の本でも讀め、奥州衣川で辨慶が立往生をした時、太刀も鎧も流れたさ云

か怯ひくさもする乃公おれじやアねへよ」彌次郎兵衛やじろべゑ元氣げんきを出だしてドシゆく行く、日は暮くれかゝつて道みちは次第しだいに暗くらくなる、彌次郎兵衛やじろべゑ氣味きみの悪わるい事こと夥おひたしい、眉毛まゆげに唾つばを塗ぬり付け、恐おそるく歩いて居ゐると、俄にわかに向むかふへ狐きつねの鳴なく聲こゑ「ケンく」彌次郎兵衛やじろべゑウワー、ソリヤ出でたツ、畜生ちくせうツ、叩たたき殺ころすぞツ、江戸兒えどつこの彌次郎兵衛やじろべゑ様さまを知らねへかツ」力味りきみ返かへつて行く、處ところが北八きたはち、先さきになつて驅かけ出だしたはしたが、狐きつねの出でる話はなしを聞き、化ばかされては大變たいへんと、土手どてに腰こしかけ 彌次郎兵衛やじろべゑの來くるを待まちち受うけて居ゐる處ところへ、向むかふから彌次郎兵衛やじろべゑの姿すがたが見みへたから、ヤレ嬉うれしやと聲こゑを掛かけ、北きた「オイ、彌次さんやじ」彌次郎兵衛やじろべゑ吃驚びっくりして呢じつと見みると、北八きたはちが立たつて居ゐる彌次郎兵衛やじろべゑ「オヤツ、此こ畜生ちくせうツ、巧うまく化ばけて居ゐるやアがる、北八きたはちに其そのまゝだよ、音聲おんせい迄までがソツクリだから驚おどろく、ヨシく今いまに見みる……」思おもいながら左さあられ體てい彌次郎兵衛やじろべゑ「オヤツ、手前てまへナゼ此處こゝに居ゐる北きた何故なぜと云いつて、宿やどを先さきに取とりに行ゆこうと思おもつて此處こゝ迄までは來きたが、悪わるい狐きつねが出でると聞きいたから、氣味きみが悪わるくつて……、待まちち合あは

せて居ゐるんだ……彌次郎兵衛やじろべゑ「糞くそでも喰くらへツ、左様そんなな手てを喰くふのじやアねへぞ北きた「オヤツ、お前めな何を云いつてるのだ、腹はらが減へつたらう、餅もちを買かつて來きたから喰くいねへ、彌次郎兵衛やじろべゑ「馬鹿ばか吐かせツ、馬うまの糞くそが食くへるかツ北きた「ハツハ、彌次さんやじ乃公おれだよ、狐きつねじやアねへよ彌次郎兵衛やじろべゑ「へ、ン、乃公おれだも氣きが強い、ヨクマア斯こんなに化ばけやアがつた、北八きたはち其そのまゝだ……コン畜生ちくせうツ……」グイうと腕首うでくびを搦つかんだ北きた「イタイ、彌次さんやじ……何なにうする……彌次郎兵衛やじろべゑ「痛いたくば、正體せうたい現あらはせ此この野郎やろう……」突いきなり然なり北八きたはちを突つき飛とばし、押おし倒たはして馬うま乗まのりとなり、手拭てぬぐいで縛しばり上げる、北八きたはちも可笑をかしくなつてワザと縛しばらせる彌次郎兵衛やじろべゑ「此こ畜生ちくせうツ、サア歩あるけ」彌次郎兵衛やじろべゑは北八きたはちを縛しばつて赤坂あかさかの驛しゆくに入り込こむ、何處どこの宿やども客きやくが澤山たくさん泊とまつて居ゐる彌次郎兵衛やじろべゑ「オヤツ、北八きたはちは迎むかいを出だして置おくさ云いつたのだが、一向見こうみへない……ハテナ」迂路うろ迂路うろ四邊あたりを見廻みまわして居ゐる北きた「オイ、彌次さんやじ、見みつともない宜いい加減かげんに解といてくれ彌次郎兵衛やじろべゑ「何を吐ぬかす……オヤ、宿やどは何處どこだらう……」北きた乃公おれが此處こゝに居ゐるんだもの

誰が先に宿を取つて置くものかれ彌「此ン畜生、未だ瞞着す積りかつ」横面ポ
カーン北「イターイ……」處へ宿の者が出て来た宿貴公は、お泊りではござ
いませぬか彌「ウム、連の者が先へ来て宿を取つて居る筈だが、知られへかい
北「オイ彌次さん、其の連は乃公だよ彌「エイ、濫太い奴だ、宜い加減に尻
尾を出しやアがれ、オヤツ、犬が居るぞ、白々来い……、オヤツ、犬が来
ても何の變鐵もねへ……サテハ正味の北八かつ北「知れた事よ、先刻にから云
つてるじやアねか彌「ハツハ、サア亭主手前の宅へ泊らう」彌次郎兵衛
始めて北八の縛を解き、二人は宿屋へ入り込む北「ア、痛い、腕がヒリ／＼す
る、横面迄抛つて……彌「アハ、マア怒るな、乃公は狐か化けて居るさ
思いつめて居た……北「馬鹿／＼しい、餘りだ」二人は湯へ入る、居間へ戻る
亭主が出て来た亭「お客様、今夜は私の甥が嫁を貰いました……其の祝いに御酒を差上げます……北「イヨ、大層御馳走だ、イヤ有難い、遠慮なく

頂戴しやう」二人は酒を飲んで居るさ、奥の座敷では三々九度の盃最中に見
へ、諺の聲が聞へる、二人は昵そ耳傾けて居るさ、女中が歩つて来る女「最
ふ、お床を取りませうか彌「ウム、左様してくれ北「オイ姐さん、祝言は済ん
だかい、嫁御は美からう女「ハイ、御夫婦とも揃つて、好い男に、好いお嫁
さんですよ、ホ、丁度お隣りへお寝みなさるので……氣がもめませう北「エツ
隣り……、睡言を聞かされるのか、其奴は大變／＼」二人は床へ這い込む、間
もなく新夫婦も隣りの居間へ来る、元からの馴染と見へ、頼りにキヤツ／＼と
巫山戯出す彌「ア、氣の悪い北「ウム、人の心も知られへで……畜生ツ……
オヤ／＼話聲が止んだやうだ」二人は夢中になつて唐紙の隙間から覗いて居る
さ、思はず唐紙がパツタリと倒れる、二人は轉がり込む、彌次郎兵衛は早くも
逃げ出して、床の中へ藻潜り込んだが、北八冤誤／＼して居る處を引捕へられ
惨散に叱り飛ばされ、平蜘蛛のやうに詫り入つて、漸々許して貰つた、彌次郎

兵衛可笑しくつて堪らないから。

れて聞けばやたらおかしや唐紙さ

共にはづれしあこの掛金

北八も負けぬ氣で夜着の中から首突き出し

婿嫁のれやをむせうにかきさかし

我は面目失いしさて

洒落つゝ二人はグツスリ寢込んで、只鼾の聲のみグウ〜と聞へて居る、間もなく目を覺した時分には、早や阿呆烏が屋根の上で、アホオ〜と啼いて居る

七 豆盗人が入りかけたのだ

旅は憂いもの情いもの、行く先々で失敗の種を撒きながら、彌次郎兵衛北八は漸々宮の驛に歩つて來た、二人は船宿に泊り込み、湯に入つて酒を飲み、宜

い加減に酔つて床へ入つた北、オイ彌次さん、隣りの室に泊つて居る代物を見たい、飛んだ宜い警女だよ彌、ナニ警女だ……、ござなら目はれへだらう、北、ウム、目はれへが、満更捨てたものでもれへ、今湯から上つて來る時、一人の警女が手洗場で迂路〜して居たから、小當りに當つて置たが、ナカ〜野暮でれへよ彌、ドレ〜……」彌次郎兵衛床から這い出して隣室を覗き込み彌、ウム、ナカ〜踏める代物だ、此の儘無事には置かれぬわい北、オイ彌次さん、先口がチャンとあるよ、一番槍の功名は……乃公に限つて居るんだ」さいひつゝ、夜具引被り北、待て〜、乃公が一つ先陣をやつてやらんけりやアならん……」ワザミグウ〜と空駢、夜は次第に更け渡る、何處の寺か鐘の音がゴーン、途端に彌次郎兵衛、ヌツと頭を擡げて見るさ、北八はヨク睡つて居る様子だから彌、占めた〜……、今の間に……」と、彌次郎兵衛起き上り、ソロ〜襖を開けて隣りの間に忍び込む、見るさ二人の警女は、正體もなく寢入

つて居る、彌次郎兵衛ヨク／＼見ると、警女だけに用心深く、荷物の風呂敷包
 みを引抱へて睡て居る彌、オヤ／＼、之じやア勝手が悪い、待てよ……」ソロ
 風呂敷包みに手をかけ、取り退けやうとする途端、不圖目を覺した警女は
 彌次郎兵衛の手首を掴んで女泥棒／＼……誰か来て……」聲立てられて彌
 次郎兵衛吃驚仰天、振り放して狐鼠／＼と我が居間に逃げ歸り、蒲團の中へ藻
 潜り込んで素知らぬ顔「グウツ／＼……」北八は之れを見てクス／＼笑つて居
 る、宿の主人は驚いて飛んで来る亭「ござさん、何した……女、イエ、妾の抱
 いて寝て居る此の包みを今誰か盗まうとしましたの、雨戸でも開いては居ませ
 れか……泥棒が忍び込んだに違ひございませぬ……亭、へーん、一向雨戸も
 開いて居ないが……、オヤツお隣りの襖が開いてある……、オヤ／＼、之
 れは何じや、禪が此處からお隣り迄……、若し此の禪は何方のでございます」
 北八意地悪く起き上り北「オイ彌次さん／＼、此の禪はお前のじやアねへかい

警女の枕元からお前の枕元迄引張つて居るよ、彌次郎兵衛も抜きさしならぬ
 證據を見付けられて極り悪く彌「エツ、情けない事を云ふなツ」、北八に目配せ
 する、亭主も夫れと悟り亭「アハ、ハ、ハ、イヤ最ふ旅さ云ふものは……警女さ
 ん泥棒は分つたが心配ないよ、豆盗人が這入りかけたのだ」亭主は笑いながら
 立ち去る、彌次郎兵衛ツツと禪を引込む、北八可笑しくつて堪らない北「彌次
 さん、一つ出来たよ、聞いておくれ」

警女ごのに思ひ込みしは是も又

戀に目のなき人にこそあれ

彌「エツ……、何さでも勝手に云へツ……」二人は何時の間にか睡つてしまつ
 た、夜が明けて海上七里の渡船に乗る、船の中で彌次郎兵衛、小便の大失敗を
 演じて、漸々桑名へつく、二人はプラー／＼と歩きながら北「何んぞ彌次さん
 何も慰みだから斯うしやうじやアねへか、お前の荷物と乃公の荷物とを一處に

して一人が擔いで半日替りに、旦那家來になるんだ彌ウム、此奴は面白からう、ジャア乃公が先づ旦那にならう北夫れは宜いが、今日は最ふ八ツだかう七ツ代りにしやう、ダガ旦那家來はキチンさして、番狂はせをやつては不可んよ彌ウム、承知く北先づ、お前が旦那だ、サア荷物を出しれへ……」
 北八荷物を擔いで後から行く北「若し旦那……彌何んだ……家來……北宜い天氣でございします彌ウム、風が風いで暖かだ北左様でございします」主従の如く話しつゝ、名尾村に來るさ彌「駕は何うだい、二里半の長町場だよ、彌イヤ、駕は入らぬぞ駕後の親方、乗つて下せへ……北イヤ、旦那はお歩くがお好だ彌コリヤ駕屋、安くては否だ、高く遣れば乗らう駕「オヤく……夫では高くして三百……彌否だよ……駕ハハア、未だ安いさ見へる、三百五十……彌一貫五百ばかりなら乗つてやらう駕「ウワー、一貫五百なんて商買冥利が盡きまさア、五百で如何で……彌夫でも、安いから否だ駕「左

様なら七百……彌イヤく、一貫五百より負らぬく……駕「ジャア、負けて置き、サアお乗んなさい……彌ソレで宜いか、高く乗つてやる代りに、酒手を此方へ出せ、承知か駕「エ、上げますさ彌「ジャア、先へ行つて、一貫四百五十此方へ酒手に差引いて、残りの五十が駕賃……駕「エツ、途方もねへ彌乃公も廢した、アハハ、北イヤ、此奴は旦那が上出來く。
 旅人を乗せる積りで駕かきの
 高い値段に擔がれにけり
 ふたりは笑い興じて富田の建場に來た、此處は焼蛤の名物、兩側には茶店軒を並べ、往來の客を呼びよめる、二人は一軒の茶店に腰かける女「お早うございませ」茶を酌んで出す、彌次郎兵衛旦那らしく、草鞋のまゝで板の間に上り、彌「コリヤ北八、仕度は宜いか北「はいく、宜しうございませ、コレ姐さんお膳を二ツだよ女「ハイく、蛤でお上りなさるか彌「イヤ、箸で食うのだ、

女「ホ、ホ、」女は蛤を焼く彌「オイ、酒は宜いのあるかい、イヤ江戸で
 美味しい物に食い飽いて、道中では馬や駕にもあきはてた、北八之からポツ／＼
 歩いて行かう、草履があらば買つてくれ、履きつけぬ草履で……此の通り豆が
 出た北「イヨ、今日始めて草履をおはきになりましたから、古い赤切が再發
 いたしました……エツへ、時に姐さん蛤は……」女「ハイ、只今上げます……」
 お、大皿に蛤を重ね、飯を二膳持つて来る北「イヨ、色男は違つたものだ
 お前の飯は少ないが乃公の分は山盛じや……ア、美味しい……彌「筒棒奴、
 夫れで娘が惚れたさ思ふかツ……北「ナゼ／＼彌「總て此の街道では、供のもの
 のや家来には飯を山盛にするのだ、ダカラ誰か目にも、乃公は旦那、手前は家
 來と見へるのだ北「エツ、忌々しい……彌「オイ、蛤のお代りだよ女「ハイ
 又出す彌「姐さん、お前の蛤なら美味味からう女「ホ、ホ、御冗談を
 ……」折柄寺の鐘がゴーン北「オヤツ、アリヤ何時じや女「ハイ、最ふ七ツで

……北「ナニセツ、占たく……約束通り、之から乃公が旦那だコリヤ／＼
 彌次郎兵衛、乃公は最ふ馬にも駕にも乗りあいた、之からソロ／＼歩いて行く
 ぞ、草履を買つて来い、此の荷物はその方に渡す……彌「ウワー、現金な男だ、
 マア宜いじやないか北「イヤ、左様はならぬ」二人は其の場を立つて、八幡を
 過ぎ四日市に入り込んで宿に泊つた女「お早ふ様で……今夜は込んで居りま
 すゆへ、お氣の毒ながら奥のお客と御一處になされて下さいませ彌「ヨシ／＼
 何處でも宜い」二人は奥の間に案内しられる彌「御免なさい……」田舎ものら
 しき男が二人居る田「お早ふございます北「ア、草臥た女「お湯にお召しな
 さい北「ジャア、乃公が行こう」北八は湯に入る、間もなく湯から上つて北
 彌次さん、湯に入りねへ彌「ウム、湯も宜いが、大分仇ものがチラつくぜ北「
 ウム、今の奴を風呂場でチヨイと當つて見たが、諾と云つたよ彌「エツ、夫れ
 は眞實か……北「今乃公が湯へ入つて居る處へ、お温うはござりませんかと尋

れに來たから、直に其處で約束が出来たのだ、未だ一人好い年増が居るよ、お前湯に入つて待つて居るが宜い彌「ヨシ、シヤア一つ入つて來やう」彌次郎兵衛眞に受けて湯に行く、處へ一人の商人商「ハイ、焼酎に白酒は要りませぬか北「オット、焼酎を少しくんな……」買い取つて口に含み、プツプ足に吹きかけ北「ヨシ、之れで草臥が休まるだらう」と、横になつて居る、湯の中では彌次郎兵衛、北八の言葉を信じて、女の來るを待つてごもく一向來ない、餘り待つて居た爲め、湯氣に當てられ、氣分が悪くなり、羽目板に凭れてグンニヤリと酔つたやうになつて仕舞つた、居間では北八、彌次郎兵衛の戻りが遅いから北「オヤ、彌次さんは一體何うしたのか知ら……」ノコノコ湯殿を覗いて見ると、彌次郎兵衛がグンニヤリして居るから北「ヤア、彌次さん何うした、コリヤ大變だ……」顔へ水を吹きかける北「オー、彌兵さん、氣を確に持つてツ彌「オ、ウム……、ブルブル……」北「何うした、

彌「アツ、ク、苦しい……オ、北八か……」手前乃公を醋い目に遭した北「ナゼ彌「何故つて……、湯の中で女が來るか……」と思つて、長湯をしたから……」北「アハ、夫れで湯氣に酔つたのか、智恵のねへ話だ彌「手前のお蔭で未だ足がヒヨロ／＼する北「ハツハ、冗談じゃアない」湯殿から連れ出し、身體を拭いてやり、肩に掛けて居間へ戻つて來る、彌次郎は、グニヤ／＼とサモ力なく彌「ア、氣分が悪かつた……、少しは宜くなつた北「アハ、お前も頓間だ、宜い加減に上れば宜いに彌「イヤ、乃公は手前が云つた通り、女が來るか……」と思つて待つて居たんだ、馬鹿／＼しい……」話しながら北八は腹這いになつて、足の指で後ろに寝て居る田舎男の耳を引張る、北八話しに夢中だから一向知らない、田舎男も氣の宜いものさ見へ、其のま、脇へよる北「フン、夫れから何うしたい」又田舎者の頭を足で探し廻り、耳を指で引張る、如何なお人宜しの田舎者も、憤り腹立て、北八の足を引つ捕へ田「ヤ

イツ、最前から黙つて居りやア、此の足で乃公の耳を弄りものにしやアがる」云はれて北八ハツさ心づき北「之れは何うも、御免なさい 田「御免なさいで済むかッ、人の頭を土足にかけて……」スルト彌次郎兵衛は彌「夫れは、お氣の毒だ許してやつておくんない、此のやうに合宿をするのも他生の縁、何うぞ了簡して…… 田「お前さんが左様云ふから、勘辨しやうが餘り人を馬鹿にして居る北「イヤ、生酔いだから……、勘辨して下さい…… 田「ナニ、酒も飲まないのに生酔い云ふ事があるかッ 北「イヤ、私は酒を飲まないが、此の足が生酔いで…… 田「ナニ、足が酒を飲んだ、イヨク馬鹿にして居やアがる 北「お前さん、怒らなくつても宜いよ、乃公の足が酔つた云ふのは、先刻焼酎を吹掛けだから夫れで足が酔つてるのさ」一同大笑いとなつて床の中へ藻潜り込む。

八 大方此の犬等は無筆だらう

かみかぜ伊勢の都の分れ道、彌次郎兵衛北八は、追分の建場より左りの片の町を離れて、スタク神戶の驛に入り込み、茶店で休んで居るさ馬「若し馬に乗つておくんない彌「ウム、戻りなら乗つても宜い馬「エ、上野迄戻る馬じや荷をつけて二百五十下され 北「百五十にしる馬「今日は、棹を持つて来ないから二人は乗れませんぜ彌「夫じやア廢さう…… 馬「ジャア、二人共馬の鞍へ縛りつけて行きませうか 北「劍呑く、煙草も吞まれねへ彌「ジャア北八、代る乗らうか、ノオ馬方、百五十遣らう馬「エ、宜うございます、お乗りなさい」北八が先に乗る 彌「北八、乃公はボツく先へ行くぞ 北「ウム、左様しれへ……」馬はトボく歩き出す、此の時向ふから来た一人の男、馬方を見掛け「バラく走つて来た男「ヤイ、手前は上野の長太じやアねへか、今手前の處へ行つたのだ、宜い處で會つた馬「ヤア、權次様、誠に何うも…… 權「誠に何うもで済むかい、晦日くに戻す約束の金を今に請一文も入れねへさは何うだい

一體何うしてくれらんだい馬「マア權次様、大きい聲をなさらんでも……此方へ来て……」馬士は借金の斷りを見へ、權次と云ふ男を連れて、土手に腰掛け馬「權次様、マア其のお腹立ちは無理ありませんが……、之にはダン……」悠々話し込んで居る、北八待ち兼ねて北「オイ馬方、早くやつてくれ、何うするんだい馬「マア、一寸待つて下され、今大事の話があるんで……」實は權次様、昨年の冬から鼻が病氣で……夫れが爲め斯んなに遅くなつたのでございませう、四五日のうちには必らず此方から……權「イヤ、ヤ不可れへ……、其の云ひ譯は聞き厭いて居るぞ、シヤア此の馬を貰つて行く」馬の轡を取つて引立てやうとする、北八吃驚北「ア、若し、左様な無茶を……乃公迄持つて行かれて堪るもんじやアねへ、ダガ悶着のある馬には乗りたくねへ、降りるよ……」降りかける、馬士は慌て、馬「モシ旦那、降りては此の馬を取られる……、マア乗つて居て……權「イヤ、成らぬ、是非降りて貰うんだ馬「ケド、

折角約定して乗せたものを……今更ら降りて貰つては氣の毒な……サア……乗つて……北「オヤ、又乗るのか……、ヨイトコセー……サア遣つてくれ……」權次は扼氣となつて權「ヤイ、長太、何うするのだ、旦那降りて下され北「ウワー、又降りるか……馬「イヤ、降りるにやア及びません……」二人は争いを始める、北八も權次に喰つてかゝる、馬士は馬の尻をバシーン、引つ叩く、馬は一散に走る、アツと驚く間もなく、北八馬の上よりドシーン、眞逆様に落ちた北「ア、痛い……」馬士は走つて来て馬「モシ旦那、お怪我は……」漸々引起す、權次はドン、馬を追つかける、馬士は之れを見るより、馬「何處い、其の馬渡してなるものか」北八を打つ放つて、之れも一目散、北八腰を擦りながら北「オー、待てツ、乃公を酷い目に遇しやアがった」跛足引きく走り出す北「ア、痛い……、斯んな馬鹿くしい事はねへ……」苦しみの中にも口合ひ一つ

借金を負ふたる馬に乗り合せ

ひんすりやドンと落されにけり

先に行つた彌次郎兵衛、馬の騒は少しも知らず、幾等行つても来ないから彌「オヤ、餘り遅いやうだ……」待ち合せて居る處へ、北八はアエギく走つて来る彌「オヤツ、北八何うした北「イヤ、最ふ話も出来ぬ、飛んだ目に遇はされた、實は彌次さん、斯様くだつたよ……彌「アハ、ハ、ハ、満られへ、サア行こう、其處に鎌倉權五郎の古跡があるさ云ふぜ、處で一つ……」

權五郎なられど馬士の一散に

おつかけて行く掛取の海

北「イヤ最ふ、狂歌處の騒じやアねへよ」二人はトボく磯山の町へ着く、スルト後ろより小供をつれた一人の男が歩つて来る男「エ、卒爾ながら貴公方はお江戸のお方でございますか彌「ハイ左様……男「私は、白子の先から貴公

方のお跡を追ふて参りました、道々の御狂歌を承はりました、感心いたしました彌「ナアニ、出放題で……男「イヤ、驚き入りました、先達お江戸の尙左堂俊満先生が當地へお越しになりました彌「ハ、ア成程……イヤ尙左堂俊満はヨク存知で……互いに交際して……彌次郎兵衛知つた顔して口喋り出す男「シテ、貴公の御狂名は……彌「私は、十返舎一九と申しますよ男「ナニ十返舎一九……夫れは御高名は豫て承はつて居ります、私は南瓜の胡麻汁と申します、貴公が十返舎一九大先生とは……サテ、宜い處でお目に掛りました、此の度は御参宮でございますか彌「左様、藤栗毛と申す著述の事について、ワザく出掛けました南「成程、夫れは御妙案でございます、何うか私の宅は雲津でございますから、何卒お越し下さいますやう、お供いたしました……彌「イヤ、思召し有難い……南「誠に、御珍客、近處の社中の者にも知らせませす、是非拙宅で御一泊を……彌「折角のお勧め、シヤア参りませう……

彌次郎兵衛十返舎一九に成り濟して居る、北八は氣が氣でない、北「彌次さん、宜いかい……、大丈夫かい……、彌「ナアニ、當つて碎けるだ、今夜口ハで泊るだけでも徳だい……」平氣でズン／＼尾いて行く、何なく雲津へ着く、南瓜の胡麻汁は二人を自分の宅へ案内する、旅籠屋ではあるが幸いに相客は一人もない、奥の間に通され、厚く兩人を待遇す、彌次郎兵衛北八と顔見合はして、べロリ舌を吐いて居る、處へ膳部が出る、主人は引込む、女中が給仕をする、彌「北八、満更でもれへの……、北「ウム、宜い女だ、併し此處ではお前も大先生だ、チヨツカイをするさ不可ねへよ、我慢をしれへ」話しながら二人は箸を取り、食いかけるさ、皿の中に蒟蒻と味噌、夫れに妙なものが入つてある、彌次郎兵衛低聲で彌「何んさ北八、此の皿にある丸いものは何だらう、北「サア一向分られへ」箸で突くさ石らしい、北「コリヤ、石だよ、彌「ナニ石、石を何うするんだらう、處變れば品變ると云つた處で、石が眞逆食へる譯のものじやアねへ……」

オイ姐さん、之れは何だい、女「ハイ、石でございます、彌「ナニ石、何うして石を食うのだらう、北「イヤ、食べる方法があるんだらう、先刻當所の名物さ云つたのは之れに違いないよ、乃公は齒が宜いから一つ嚙つて見やう……」さ取り上げてガリ／＼嚙る、北「ウワツ、堅い／＼……齒が折れる、矢張り石じや」二人は一向分らない、處へ亭主が出る、亭「何もございませぬが、何うか召し食つて……、イヤ石が冷めはいたしませぬか、コレ／＼温い石とお替へ申せ……」二人はイヨ／＼分らなくなつた、然し尋ねるも残念さ、彌次郎兵衛は知つた振りして、彌「イヤ、珍らしいものを賞翫いたしました、江戸では折々小砂利を煎付けるが、又は煮豆のやうにして食べますが、私も大分好物でございます、南「ナニ、アノ石を召し食りましたか、彌「ハイ／＼……、ナカ／＼美味いもので……、南「メ、滅相な、石を召食るとはお齒の達者な……併し焼ごはなさいませんか、彌「イーエー、南「實は、アノ石は焼石でございますまして、凡て蒟蒻さ云ふ

ものは、水氣の取れぬものでございまして、アノ焼石で叩きなさるご、水氣が
取れて、格別風味が好うございます彌「ハ、ア成程、分りました」兩人は感心
して、ムシヤク食ふ、食事が済むと、近在の狂歌師連中が續々集つて来る
享主得意になつて、狂歌會を開き、彌次郎兵衛と北八に對してイロ／＼の事を
質問する、素より十返舎一九ではないから、到頭化の皮が現はれて仕舞つた、
主人は呆れる、集つた大勢の狂歌師連中は怒り出す「ヤイツ、偽物を投げ出
せ」□「ウム、太い奴だ、殴れ」彌次郎兵衛も喧嘩腰になつた彌
何んだ放り出す、面白い放り出して見る、篋棒奴ツ、乃公が好んで来たんじや
アねへ、乃公等を只の鼠と思つて居やアがるかい」巻舌で啖呵を切り出す北
オイ彌次さん、力味でも始まらねへ、十返舎一九なご云ふから不可ねへ、サ
ア何處かへ行つて泊らう」北八は彌次郎兵衛を連れ出す、彌次郎兵衛は、ブツ
／＼吃く北「ハア、ハア、ハア、到頭尻尾を出して仕舞つた、彌次さん之れは何う

だ
厭はまじ通り一遍旅の耻
掻き捨て、行くあふぎ短冊
彌「アハ、ハ、ハ、違くない、然し最ふ何時だ北「ウム、亥の刻を過ぎて居るよ
彌「道理で、宿屋は何處も起きて居れへ、ア、忌々しいなア……」トボク／＼歩
く、犬がワン／＼吠へ立てる北「エツ此ン畜生、犬迄が馬鹿にしやアがる、オ
ヤツ彌次さん、妙な手付をして……お前術を使つてるのかい、ハテ怪しやなア
……」彌「イヤ北八、犬に吠へられた時は、宙に虎と云ふ文字を書いて見せるさ
犬が逃げるさ聞いて居るから、先刻から書いて居るんだが、根つから逃げない
よ、大方此の犬等は無筆だらう、シツ／＼ツ」漸々犬を追つ拂い、町端れに來
た彌「オヤツ、此奴は困つた、北八焼糞だ、夜通し歩こうじやねへか北「ケド
彌次さん、未だ九ツにはなるめへ、何處かで泊りたいものだ彌「ダツて何處も

起きて居ないじやアねへか……オヤツ向ふにチラ／＼火が見へる……、烟のあ
る處に火あり、火のある處に人間ありだ、サア行こう／＼」二人は火を目當て
にサツサと歩き出す。

九 ヤイツ悪く巫山戯アがるな

北「オヤツ、提灯の火じやアねへか 彌「ナアニ、戸の隙間から洩れる火だよ、
北「成程、家の内で焚火して居るのだ、占めた／＼……」二人はズン／＼歩く
彌「オヤツ、アノ家が歩いて行くやうだぜ 北「ウム、此奴は可笑しい 彌「氣味
が悪いなア、何處の國に家が歩くさ云ふ處があるものかね……、只事じやア
ねへぜ 北「ナアニ、之れも赤坂の泊り位いで狐の所業かも知れねへ、弱味を見
せるさ附け上つて何をするか分られへから、大威張りでサツサと行こう」二人
はワザミ力味返つて行く、近寄つて見るさ 壁車だ、車の中で火を焚いて居る

北「オヤ／＼、馬鹿／＼しい、何の事だい」二人は安心してサツサと行き過ぎ
る、何んしろ草木も眠る丑満の頃であるから、物凄いなさ 夥しい、二人は力
味返つて居るが、根が臆病者だから話聲も震へて居る、二三丁も行つたと思
ふさ、後から大きい男が長脇差を帯して歩つて来る、二人は振り返つて月光り
に打ち眺め 彌「オイ北八、彼奴恐ろしい大きい男だが、泥棒かも知れねへぜ、
北「ウム、分られへ……ア、小便が放りたい」北八立ち止つて小便して居るさ
件の大男も立ち止つて小便する、彌次郎兵衛は聲をかけ 彌「モシ／＼、お前
何處へ行くのだい」機先を制する積りで尋ねるさ、大男は存外優しい聲で、
男「ハイ／＼、私は松坂へ歸るのだが、夜道を只一人で怖くて／＼……、最う
どうしやうかと思つて居る處へ、お前さん等が通りかゝつたから、コリヤ好い
道伴ださ、實は心丈夫になつて…… 北「オヤツ、お前大きい身體をして弱いじ
やねへか、お負けに長い刀を帯して居る癖に…… 男「ハツハ、ハ、之れは拾つ

て来た竹切れじや彌「ウワツ、刀じやアねへのかい、乃等公も實はお前を泥棒
 じやアねへかと思つて、怖くて、飛んだ奴に見込まれたと思つたのだが、
 お前が臆病者で私も安心した北「サア行こう、三人居りやア大丈夫だ男
 イヤ、未だ安心が出来ぬ、此の向うに大變い事があるのじや北「何か、大變い
 さは……男「私は今日、江戸橋迄行つて歸りが遅くなつて、今の先き此の松原
 へ来た處が、向ふに白い大きなものが立つて居て、夫れがフワリ……ア、
 思い出して、怖とする、だから後戻りして連れの來るのを待つて居たのじや、
 彌「エツ、其の白い大きいものが居たのは何處じや……男「ツイ、此の先
 じや……」スルト北八は大きくなつて力味出した北「サアニ、何か出るものか
 彌次さん、襦袢を見て腰を抜かした口に違ひれへ、私が先に行くから尾いて來
 れへ、へ、ン、斯う見へても江戸ッ兒だ、北八さんを知られへか」ズン、歩
 く、二人も後に續く、松原を一丁ほど來るさ、大男は向ふを透して見て、男「ウ

ワ、アレだ、堪らん……」ガタ／＼震へ出す、彌次郎兵衛と北八は
 呢つと向ふを見るさ、白いものが街道一べいに廣がり、或は長くなり、又は消
 へる、大きくなつたり小さくなつたりして居る彌「オヤツ、何だらう北「彌次さ
 ん、亡魂に違ひはれへよ男「南無阿彌陀佛……彌「氣味の悪い、引返さう
 ……、何でも白装束だから亡魂には違ひあるまい北「オヤ、青い火が見へ
 る……彌「ウワツ、先へは行かれね……」三人は青くなつて立ち竦んで居る
 さ、向ふより人の足音、歌ふ聲などが聞へる、近づくと見るさ四五人の人
 足だ彌「モシ、お前さん方何方から來なかつた人「私等は、此の近在の者
 だが、津の城下迄行くのだよ彌「へーン、お前方アノ白いものは道の中央で、馬の履
 人「ナニ、白いものさ……アハ、アハ、アノ白いものは道の中央で、馬の履
 や草鞋が燃て居るのじや、其の烟りが月に映つて白く見へるのだよ彌「アハ、
 、、此奴は大笑いだ、イヨ、幽霊の正體見たり枯尾花だ北「アハ、

飛んだ大心配をさせやアがつた。三人は胸撫で仰し、其處を通り抜けて、ズン
松坂に入り込み、木賃宿を叩き起して一夜を明し、月落ら烏啼いて明六ツ
を告げ渡る頃、早くも宿を立ち、中河原、堤、世古も打ち過ぎて、何なく山田
の町へ差しかゝる、彌次郎兵衛と北八は、一人の上方者と途伴になり、町の入
口に来ると、兩側家毎に、御師の名を板にかき付け、用立所と云ふ看板が立ち
並び、袴羽織の武士が何人もなく馳せ違ひ、其の雑沓云はん方もない、一人の
侍は彌次郎兵衛に近より武「お前等、何處へお越し……彌次郎太神宮様へ参り
ます」三人は茶店へ入り込み休む、處へドヤ〜と江戸組の人数が大勢来る、
其のうちの一人彌次郎兵衛を見て、男「オヤツ、お前彌次郎のじやアないかい、
参宮に来たのじやな……」聲掛けられて彌次郎兵衛驚き振り向いて見ると、町
内の米屋太郎兵衛と云つて、彌次郎兵衛が江戸を立つ時、此の米屋の拂をせず
に来たのだ、夫れゆへ彌次郎兵衛は情氣返り彌「オヤツ、太郎兵衛殿か……ヨ

クお出掛けなさいました、然し此處でお目にかゝるさば……面目れへ……太
ナアニ、私も仲間の太々講で、據なく出掛けたのだ、宜い處で會つた、旅へ出
るさ同國のものは懐かしい、奥へ来て一杯呑みなさい彌「へい、有難うござい
ます」彌次郎兵衛酒を飲んで居ると、又後より上方組の講中がドヤ〜と来る
太「彌次さん、私は後より行くから、お前私の駕に乗つて行くが宜い」彌次郎
兵衛喜んで駕にのり、處が駕屋が誤つて、上方組の中へ彌次郎兵衛を擔ぎ込む
彌次郎兵衛駕を出て見ると、皆知らぬ顔ばかりだ彌「オヤツ、可笑しい、モシ
米屋の太郎兵衛様は何處にお出でなさいます男「ナニ、太郎兵衛……左様な名
は知らんよ、お前も根つから見た事のない人じや、誰だつたかな……彌「ソレ
わし、太郎兵衛さんの町内のものじやが……、ハテナ……違つたやうだ、北八
は何うしたか知ら……」と、迂路〜して居る、皆々氣味悪く思つて荷物を片
よせる、スルト二三人の男が男「コレ〜、お前さん見馴れぬ人じやが、一體

誰じや、何をウロくして居る彌「イヤ、私は米屋太郎兵衛さんに合へば分るのじや 男「米屋太郎兵衛なんて云ふ人は居ないよ、早く出て行かんかい、油斷がならぬ△左様だく、投げ出せく……彌「ナニツ、投げ出すさは怪しからん……男「アハ、ハ、ハ、お前言葉は江戸のやうだが……ハ、ア分つた、今の先江戸の太々講と落ち合つたが、其の時お前の乗つた駕が、此方へ紛れ込んだのだらう彌「ウ成程、夫れに違いない、皆な知らぬ顔だと思つた、ジヤア私の行く處は何處だらう 男「ナニ、お前の行き先を誰が知るものか、コリヤ態々仲間へ紛れ込んで、太々講を食い倒しに來たな、ソレツ殴れく……」と、騒ぎ出す、彌次郎兵衛も負けては居ない彌「ヤイツ、悪く巫山戯やアがるな、手前達の太々講を丸切り食い倒した處で知れてらア、餘り安くしやアがるな、江戸ッ兒だツ、乃公一人で太々講を了つて見せてやらう」と、彌次郎兵衛ドツかさ座り込む、スルト御師の手代は驚き手「ナニお前一人で……彌「知れた事だ

金の多少にやアよるめへ、之で頼むだぞツ」二百文紙に包んで出した、手代は笑い出す手「アハ、ハ、ハ、太々講は安くて十五兩は出さんけりやア出来るものかい彌「ナニ、之れで出來れへか、太々講が出來なければ、蜜柑講でも頼みますよ 皆「ハツハ、ハ、ハ、夫れこそベツカコーだ……」彌次郎兵衛は其處を飛び出し、元の筋違ひに出て、妙見町をズン／＼歩きながら彌「オヤ／＼、北八は何處へ行つたのだらう、米屋太郎兵衛さんご御師の方へ行つたのか知ら……夫れさも上方者ご妙見町へ泊つたのではあるまいか……」と、一軒の宿屋に入り込み休んで居るさ、幸い北八も上方者が泊り込んで居るのに出合つた、北「イヨ、彌次さん何處へ行つて居た彌「イヤ、乃公は飛んだ目に遭つたよ……斯様くだったよ」と、失敗つた話をして大笑い、互いに酒肴を命じ、興に入つて飲み据へて居る 北「オィ彌次さん、宜い加減に切り上げて、遊びに出掛けやうじやアねへか彌「ウム宜からう」三人はブラリと出掛ける、妙見町の

かみふるいち、おほやうのきなら、ひつた、いせおんどうさませんいさ、
 上げ古市で、娼家軒を並べ、引立てる伊勢音頭の三味線勇ましく、何の家も
 浮れ、おほやうき、三人は千束屋と云ふ女郎屋に來た、案内されて二階に上つ
 た、スルト上方者は、上時に彌次さん、斯うしやうじやアないか、お前方をお江
 戸の豪い大きな店の番頭衆に仕様じやアないか、彌ウム、宜からう……」彌次
 郎兵衛は番頭に成り澄して居る、上方者は眞面目な顔して女中を呼び上「コレ
 女は何うじや、此のお方は江戸の大家の番頭さんじや、女郎の有りつたけを
 出してくれ、お氣に入ると、百日も二百日も流連をなさる、金に退屈はないの
 だから……宜いかい……兎に角兩換店の御番頭だから……」彌「オイ、左様
 乗せては困るよ、格別私の店は豪い、こそもれへが、間口がヤツと三十三間あつ
 て、佛の数が三萬三千三百三十三人暮した」冗談を云つて居る處へ女郎が來る
 ワア、騒ぎ出す、スルト彌次郎兵衛何か氣に喰はぬ事があるさ見へ、歸るさ
 云ひ出す、女中が止める、彌次郎兵衛イヨ、ツンとして彌「イヤだ、乃公は

是非歸る、女、マア貴公、宜しいでは……彌「エー、留めるなツ……」思々
 しい……北「オイ彌次さん何うだ……、ハ、ア、相方の女郎が何處かへ行
 つたから、怒つてるのだな、彌「何を云つてやアがる、歸る……」處へ相
 方の女郎が歩つて來る、女「オヤツ、お前さんばかり歸らないでも宜いではあり
 ませんが、妾が氣に入らないの……」彌「イヤ、左様でもれへ……、放せ、
 女「妾し、放さないわ……」羽織を脱がせる彌「ヤツ、羽織を何する返せ……」
 云つて居るうちに煙草入も取られる彌「何うあつても、歸る……」女「此の人は
 情の強い人だよ、サア之れもお解きなさい……」帯を解いて裸體にしやうとす
 る、彌次郎兵衛煮染めたやうな禪をして居るから、裸體にされては大變さ、類
 りに争つて居る彌「ワ、最ふ御免だ、勘辨してくれ、女「夫では、歸る
 へ、云はなさいよ、彌「ウム、云はなさい……」スルト仲居は仲「サアサ
 最ふお寢みなされませ、北「ア、ハ、ハ、面白く、彌次さん、斯うもあらうか

す女「オ、臭い……北「アハ、ハ、ハ、彌次さん受け取りねへ……彌「エ、イ、
情けない事を云ふ、乃公のじやアねへよ北「ジヤア、前を捲つて見せねへ……」
彌次郎兵衛の帯解きかける彌「エツ、何をしやアがる」振り放して飛び出す、
皆「アハ、ハ、ハ、」一同大笑い、彌次郎兵衛は面目ないやら腹が立つたら彌「エ
ツ、思々しいツ、北八奴乃公に赤耻をか、しやアがつた北「ダツテ、松に禪
のブラ下つたのも珍らしいよ、彌次さんマア怒らなくつても宜い、之れは何うだ
らう。

禪をわすれてかへる淺間嶽

萬金たまをふる市の町

彌次郎兵衛も思はず吹き出し、機嫌直して妙見町に戻つて来る、其の日は長閑
な天氣であるから、急ぎ内宮外宮を参拜せんものさ、身仕度して立ち出でる、
今しも戻り古市の町に来るさ、見世が澤山並んで居る、昔のお杉お玉の面影を

寫せし女の二上り調子面白可笑しく、メンペラシヤン／＼と、唄ふ歌も一向文
句が分らない、四邊を取り捲く旅人は、皆此の女の顔を目掛けて、錢を投げつ
ける、女は笠で巧に受けて居る、北八之れを見て北「ドレ、乃公が一つ當て、
見やう」パツと投げる當らない上「オイ／＼、お前等が幾等投げても當る氣遣
いはないよ、駄目じや／＼彌「ナアニ乃公が投げて見やう……」パンと投げる
笠で受ける彌「オヤ／＼、此奴は不可ねへ北「アハ、ハ、ハ、之れは當らぬわい
何か仕様があるんだらう、餘り小面憎いじやアねへか」さ、小さい石を拾つて
パツと投げつけるさ、女は撥でハツシと受けさめ、ヤツと投げ歸した奴が、彌
次郎兵衛の顔にパシーン北「アハ、ハ、ハ、彌次さんこら迷惑だ……彌「アイタ
タ、ハ、ハ、ハ、北八覺へて居る……」

飛んだ目にあいの山とや打つけし

石がへしたる事ぞをかしき

一同は其處を立つて地蔵町へ来る、左りには本誓寺と云ふ景色の宜い寺がある
寒風と云ふ名所もある、五知の如來、其の他名所古蹟が澤山ある、牛谷坂道に
来るさ、女乞食がウジ／＼して居る、其處を通り抜けて、宇治橋へ来る、橋の
上から錢を投げるさ、下では網で受けて居る、夫より内宮一の鳥居、四ツ足御
門、さるがしら御門を打ち過ぎ、御本社に來た、之れぞ天照皇大神にて、神代
よりの神鏡、神劔を鎮座し給ふ所である、流石道化の彌次郎兵衛も、此處では
謹み畏みて

日にまして光り照りそふ宮ばしら

ふきいたたまふ伊勢の神風

朝日の宮、豊の宮より始めて、御供屋古戸の宮、高の宮、土の宮、其の他末社
數知れず、風の宮にかゝるさ、道に御衣裳川と云ふのがある、今度は北八が畏
こみて

引すりていく代かあさをたれ玉ふ

御衣裳川のながれひさしき

凡て宮廻りのうちには、自然と感涙肝に銘じて、有難さに彌次郎兵衛北八も眞面
目になつて、無駄口も云はず、洒落も出ず、神妙に禮拜し終つて、元の道に出
で、聽て妙見町に立ち歸り、此處に上方者と別れ、彌次郎兵衛北八の兩人は、
宿屋を晝立ちして外宮へ參詣する、此の外宮は即ち豐受太神宮が祭つてある處
天神七代の始め國常立の尊と申せし御神である、二人は神璽の宮、寶劔の宮
其の外、數多の末社を順拜して、天の岩戸に登つた、スルト何うした事が、彌
次郎兵衛頼りに腹が痛んで苦しみ始める彌ア、痛い／＼……北「オヤツ、彌
次さん何うした彌腹が痛い……北「其奴は困つた、シヤア下へ降りて休みれ
へ」下へ降して丸薬を服用せて介抱する、ナカ／＼痛みは休まない、北八は彌
次郎兵衛を連れ、急ぎ廣小路に行つて、宿を取らうさ、彼方此方を見廻して居

るさ亭「モシ、貴公方お泊りではございませんか……北「オ、亭主、此の連の男が腹が痛いさ云ふのだ、泊めてくれ亭「サア、お這入りなさい女「入らつしやいませ北「サア彌次さん、上りねへ彌「アイタ、アイタ、北「オイ、汚い顔をしないで宜いよ、お前何かの罰が當つたんだぜ彌「イタイ、乃公は罰なんか食つた覺へはねへ、大方今朝の飯が中つたのだらう北「意氣地のねへ、サア奥へ行きねへ彌「アイタ、アイタ、北「北八に介抱されて奥へ通る亭「嚙、御難儀でございませう、幸い私の女房が臨月で、今お醫者を呼びに参りました、貴公も診てお貰いなさい彌「ジャア、御亭主頼む彌次郎兵衛は雪隠へ行く、醫者が来る女「オヤツ、御病人は……お醫者様でございませよ北「今、雪隠じや……オ、オ、彌次さん、お醫者様だよ、早く出て来るが宜いよ彌次郎兵衛雪隠の中から彌「イヤ、まだ出られねへ、お醫者様に何うぞ此方へ……北「オイ、お醫者様に失禮な……雪隠なんかへ……」其のうちに彌次

郎兵衛出る、醫者は鹿爪らしく彌次郎兵衛の脈を診て醫「ハ、ア、貴公は之りや血の道じや、兎角臨月などに起るものじや彌「イエ、私しは孕んだ覺へはございません……醫「ナニ懷妊でない……ハテ面妖な……ウム之りや私の師匠がわる、廣小路の伊賀越屋から呼びに来たが、彼處の病人は臨月じや、大方血の道が起つたのであらう、其の積りで薬を盛るがよいと教へてくれたが、貴公は違つて居るのだな……北「エ、へ……血の道は此處の家内でございませう此の男は違ひまする醫「ヤ成程、之れは私が間違ひじや、併し何なら貴公も夫れにして置かさ、薬を調合するにも一處で面倒がないから宜いが……彌「飛んだ事を……男に血の道があつて堪るものか醫「成程、夫れも左様じや、シテお前は何病じや彌「オヤ、頼りない……私しは先刻から虫が被つて不可ません醫「ハ、ア、大方腹の内て被るのじやる、コレ、女中供の者から薬箱を……女「ハイ、一向お供の方は見へませぬ醫「ウム左様、見へん筈じや

連れて来ないのだ、薬箱は此處に持つて来て居る……」薬を取り出して渡す、
 北「シテお医者様、お薬の煎じやうは醫常の通り、生薑一片入れるのじや、
 北「へー、山葵では……彌「オイ、馬鹿云ふな、へい有難う存じます」其の
 うちに勝手の方騒がしくなり、亭主は迂路へ、亭「コレお鍋へ、早ふ産婆
 を呼んで来い、久介は湯を沸せツ……」と、騒ぎ出す、此方では彌次郎兵衛、
 彌「アイタ……北彌次さん何うした彌「イタイ……醫「ウアー、此奴は
 堪らぬ、病人の側には居られぬ」醫者は逃げ出す、勝手の方へは産婆が来る
 女中のお鍋は狼狽へて、産婆の手を取り、彌次郎兵衛の枕許へ連れて来る、
 婆「之れはしたり、寢て居ては不可ません、サア起きなされ……」彌次郎
 兵衛を引起す彌「アイタ……産「辛抱なされ、コレへ人扱は何うじやな……
 彌「アイタ……産「其處じや……」と、産婆も狼狽へて居る、其の土目
 が悪いのやから助からない、彌次郎兵衛を産婦と間違へて産「サアサ、誰ぞ来

て腰を抱いて早く……」北八呆れて可笑しくもあり北「アハ、ハ、ハ、冗談
 じやアレへ、世の中に斯んな間違ひも珍らしい、一つ何うするか見てやらう」
 北八知らぬ顔して彌次郎兵衛の腰を引き立てる彌「ウワー、北八何うするのだ
 ア、痛い……産「左様に氣の弱い事では不可ん、ウンと力味んで……ウー
 ン……彌「ウワー、此處で力味で堪るものか……痛い……雪隠へ行きたい……
 ……産「今が大事じや、行つてはならん……彌「ケド、此處で力味さ出るわ、
 ウーッ……ソリヤ最ふ頭が出掛けた、アイタ……、夫れを左様に引
 張つては痛い……藻掻くを構はず、婆はグイグイ引張る、彌次郎兵衛堪らな
 くなつて彌「エツ、此の婆奴ツ」横面パシオンと抛り飛ばす、婆は呆れて婆「
 痛いッ、此の血道氣狂い奴……」武者振りついてヤツサモツサと騒動する、勝
 手の方では最ふ赤兒が生れたと見へ、オギヤア……泣く聲がする、産婆は驚
 き産「ソリヤこそ産れた……オヤ……此處じやない……何處じや……」狼

狼へ廻る、彌次郎兵衛は雪隠へ走り込む、亭主は漸々婆を見付け亭「コレ、
婆さん、先刻から尋ねて居るのに最ふ生れた、早く〜」と、婆を引立て
勝手へ行く、俄に笑ひ聲が聞へる亭「目出度い〜、三國一の玉のやうな男の
子が生れた」と、喜びの聲と共に亭主はニコ〜顔で歩つて来る亭「之れはお
客様、お喧ましようございまして恐れ入ります、女房が安産いたしました」云
つて居る處へ彌次郎兵衛は雪隠より出て来る彌「ヤアお目出度い、私も今雪隠
で思い切り安産したら、忘れたやうに腹の痛みが止んだ亭「夫れば、貴公はお
目出度い北「お互いに目出度い〜」之より喜びの酒酌み交し、産婆の間違
いを話し合い、一同は大笑いとなる。

十一 之りや酒じやアねへ小便だ

此處に東の都神田の八丁堀に住む彌次郎兵衛北八と云へる二人連のなまげも

の、神風や伊勢參宮より足曳の大和路を廻り、青丹よし奈良街道を経て、山路
の宇治にかゝり、此處より都に趣かんと急ぎける程に、頓て伏見の京ばしに着
いて候、日も早や西に傾き、往來の人足早く、下り船の人を集る船頭の聲々喧
ましく船「サア、今船が出るぞ〜、乗つた〜、大阪の八軒屋に行くの
じや、早く乗つた〜」彌次郎兵衛北八之れを聞いて彌「ハ、ア、之れが淀川
の夜舟だな、オイ北八、京から先に見物する積りで来たが、寧の事此の舟で大
阪から先にしやうか北「ウム、夫れも宜からう、オイ船頭〜、乗合はあるか
い船「有さも〜、乗る積なら早く乗りなさい、今出すんだよ〜、モシ〜草
鞋を解いて乗つて貰はないと困る、頓間だなア北「エ、イ、何を云つてヤアが
る……彌「オイ北八〜、手前の包みも一處に乃公の風呂敷の中へ入れて置け
北「ウム、宜からう、オイ船頭〜、乃公等は何處へ座るのじや船「ソ、其の
坊様の横へでも割込んで下され彌「へい、御免〜……皆之れは豪い、左様

詰めて来ては困る……」其のうち船頭は舟を出す△「オイ〜お前退いてくれ、乃公の粽の上に腰を卸しては不可んよ□「イヨ、之れは何うも……然し乗合はお互いじや、少々窮屈な位は我慢をして貰はないさ……○「左様も〜、一蓮托生じや、死なば諸共じや 甲「オイ〜、縁喜でもねへ、斯んな河で死ぬる奴があるものか、然しお前さん何處じやい 乙「私は、大阪の道頓堀…… 甲「ナニ道頓堀……、夫れは好い處じや、大阪の人には藝者が多いが、何か一つ遣つては何うです」スルト越後のものさ見へて越「ヨカ〜、乃公もやるべい、サア之から皆でトコトン〜と囃してくれ皆「アハハハハ、越後獅子をやるのか、面白い〜、トコトン〜……」船中は退屈だから、他愛のない事を遣つて興がつて居る、彌次郎兵衛之れを見て彌「アハハハハ、面白い〜□「オイ、お前さん二人は江戸らしいが、何か遣つて貰いたいね彌「夫れは、何でもやるが、琴三味線、鼓……何れにしようさ云つた處で、此處には左

様なものがないから始まれへ 甲「ジヤア、一つ役者の音聲でも遣つては……彌「音聲も、三十や五十は知つて居るが……誰にしやう、源之助が三津五郎か……イヤ高麗屋にしやう……ダガ江戸役者はお前等の上方者にア分るめへ、 丙「オヤ〜、大きい事を云ふぜ、一つ遣つて見てくれ彌「へ、ン、自慢じやアれへが、音聲は江戸でも一番と云はれた男だ、誰でも後ろを唄つてくれる人があつたら、一つ遣つて見せるよ□「オイ〜、後ろさは呼出しの事かい、夫れ位は乃公が遣るよ、口三味線で……チツツンシヤン〜……、之れはお江戸の堺町や葺屋町に名も高き役者音聲……松本幸四郎……チツチン……、何うだい巧いだらう皆「イヨ、待つてましたー日本一……彌「エツヘ、ン、まんなま奪い取つた此の一卷、之れさへありやア出世の手掛り、大願成就忝ない……皆「ウワー、存外下手じや……アハハハハ、皆々大笑い、此の時彌次郎兵衛は彌「時に北八、乃公は大變な事を忘れた、舟に乗る前に小便すりやア

宜かつた……オイ船頭、何處かへ舟をつけてくれ船、何うしなさる、上るのかな彌、イヤ、小便……船、小便なら、舟べりを掴まへて、遣らんせ

彌「ソ、夫れが乃公にやア出来れへのだ、舳舂で堪られへ……ア出る」

……早く何うかしてくれ彌次郎兵衛前を押へて地團太踏んで居る、スルト片脇に十二三の前髪を連れた隠居が乗つて居る、深切らしく彌次郎兵衛に向い、

隠「モシお前さん、私は年寄だから此の通り、シピンを持參で居るから、之れを貸してあげやうか彌、ヤア、夫れは有難い、シヤア貸して貰ほう……」彌次郎兵衛暗がりを探つて、箱火鉢の横手に、急須のあるをシピンと間違へ、手早く取つて、シヤア「その中へ遣り込め彌、ア、之れで助かつたヤレ」

……モシ御隠居、大きに有難ふ……」向ふへソツと遣つて、互いに話し合つて居る、隠居は躑躅して起き直り隠「ア、大分寒ふなつた、コレ長松、起きて火を點さんかい、酒なご飲まなくつては寒くて仕様がな、コレ起きろ」手探

りに彌次郎兵衛の放り込んだ急須を引寄せ隠「オヤツ、長松奴、水を入れて居るな……」云ひつゝ小便は知らず、河の中へザブリと移し、其の儘酒をドブに入れて、火鉢にかけ隠「サア、出来た、モシお江戸の衆、一杯何うじや、北八は起き上つて北「イヨ、之れは何うも……」隠「最ふ爛が出来る……」

サア一つ毒味をして……」盃へ酌いでグイと呑み干し隠「オヤツ、之れは妙な臭がする、酒が悪くなつたのか知ら……、ベツ……」マアお前も呑ま

つしやい」北八に盃を差す北「ヤア、之れは何うも……、オツトツト、」

一杯受けてグツと飲む北「オヤツ、變な臭がする酒じや」思ひながら盃を返す

隠「サア、お連の人、お前も飲みなさい北「オイ彌次さん、飲みねへ……」盃を差されて彌次郎兵衛、最前より可笑しさを堪へて見て居たが、今北八に盃差されて彌「イヤ、乃公は御免だ、ナゼか今宵は酒が飲みたくねへから……」

隠「お前さん、飲けさうな顔だが……北「エ、浴びるほど飲むんですよ、此の男は

おほざけの大酒呑みなんので……、マア飲みれへ、遠慮しれへでも宜いよ、一杯飲みれへ……」隠居は何が考へて居たが、隠「アツ分つた、お前さんシビンと間違へて此の急須の中へ小便を放たつな……、何うも變な臭かすると思つた……ダカラお前は飲まんのだな……」北「エツ、御隠居左様かも知れませんよ、此の男ヨク小便で失策るんだから……、此奴は堪らん……、ム、胸が悪くなつた……、ムカくする、ベツく……」ゲロくくく「隠「ア、胸が……ゲロくくく、ガアくくく」彌「ホ、これはお氣の毒な……然し何か薬でも飲んで見なさい、エ、ツト小便に當つたのは何が宜からう……モシく、お前さん方誰か丸薬でも持つては居ませんか……皆「ハツハ、ハ、ハ、小便の薬はないよ彌「其奴は困つた北「ヤ、彌次さん、苦を一寸捲つてくんな彌「何うする北「小便を……、彌「するの……北「イヤ、吐くのだ隠「エ、イ、汚ない……」隠居は急須を河の中へドブーン、投げ込んで仕舞ひ隠「サアサ、汚ない急須は河の中へ投

り込んだから、此のシビンで燭をして……彌「矢張り、汚れへ……」隠「ケド、未だ一度も使はんのじや……奇麗なものだ……」樽の酒を土瓶に入れて火鉢の上にかける隠「長松、茶碗を出せ、サアく之れこそ眞實の酒じや、ソレお前さんも飲むが宜い」彌次郎兵衛受けて彌「ジャア、頂戴しやう……」隠「アハ、い、現金な人じや彌「北八、一杯やれ北「ウム、今度は間違ひれへかい……受けて飲む北「イヨ、小便の混らぬ酒は又格別だ、へいお返し申しやせう、隠「マア私は宜い、皆乗合の衆に順々に廻して……北「ジャア、お隣りさん……」ダンく廻る、乗合の中に一人の病人がある、看護の老爺は起直り老「ヤア、之れは何うも……病人は吞めませんから、私が二人前頂きませう」酒好きさ見へて、土瓶を受取り、自分が盃に酌いで飲み干し、老「ア、美味しい……甘露く……」彌「オイく親父さん、甘露は宜いが、土瓶を其處へ置かれへで此方へ返してくんれへ老「イヨ、之では何うも……」彌「サア、御隠居……」

「隠」イヤ、私は宜い、お前飲みなさい彌「ヂヤア、最ふ一杯……」彌次郎ナミ
 く酌いで其の儘グイと顔んで忽ち顔を擧め、茶碗を投げ出し彌「エツ、コリ
 ア堪らん……ベツくく……ゲロくく……ガアくく……北「オイ彌次さん
 何うした彌「何うした處か、之りや酒じやアねへ、小便だく……、ゲロく
 く……」スルト老爺は老「ヤア、之れはしたり、飛んだ間違ひを……、私が
 返す時に、此の病人のシピンと取り違へたので……、酒の土瓶はチヤンと此處
 にある、へい返します北「アハハハ、此奴は面白い、大出来く……彌「エ
 イ、何が大出来だい……、之れ位なら、乃公の小便放り込んだ酒を飲む方がマ
 ダ増だ、アノ病人の小便を……エツ胸か……ベツくく……ゲロくく……北
 ハツハハハ、天罰贖面だよ、彌次さん、アノ病人の顔を見ねへ、梅毒と見へて
 頭から首筋の邊がジクく……彌「エツ、夫れを云つてくれるな……、ノ、咽
 喉が裂ける……ク、苦しい……ゲロくく……北「アハハハ、面白いく、兎

角お前は小便が祟る、最ふ酒は飲まないが宜い、禁酒じやなくつて、禁便にし
 れへ、其處で彌次さん一首浮んだよ
 せうべんを人に飲ませし其のむくひ
 己れも飲んで宜いきびしよなり
 此の騒動に船中皆目を覺し大笑ひ、船は牧方を過ぎた頃より雨催ひの空となり
 見るく大粒の雨がポトリく降り出した、乗合客は上を下へ大騒ぎ、
 船頭は急ぎ船を堤に漕ぎよせ、暫らく雨宿りする、此處は大阪と伏見の中央處
 で、上り船も下り船も皆落合つて、其の混雑云はん方もない、稍半時ばかり経
 つと、漸々雨に止み、雲間より月影が現れる、船中のも一同勇み立ち、彌次
 郎兵衛北八も苦を捲つて首突き出し彌「イヨ、雨が歇んだぞ、宜い景色だ……
 ……」眺めて居るうちに彌「北八、乃公は困つた事に雪隠へ行きたくなつた、
 北「エツ、汚ない事ばかり云ふ男だ彌「ダツテ、出もの腫もの所嫌はずだよ、

船に雪隠はねへかい北、左様な處がある位ひなら、小便を飲む氣遣ひはねへよ
一寸土手に上つて遣りねへ彌、ウム、他の船でも大分上つてゐるやうだ、サア早
く上らう北、乃公も、何うやらお相伴をしたくなつた、オイ船頭、一寸上つて
来るが宜いかい……船、用足しなら、早くして下され、私が今飯を食つてしま
うよ、直に船を出すのだから……北、オット合點だ、二人は跣足で陸へ飛び
上る彌、ナント北八、宜い景色だ、何處等邊でやらかさう北、オット、其處は
水溜りがある、モツト此方へ來れへ……成程宜い月夜だ……、糞を垂れながら
月見さは洒落てるわい
一刻を千金づゝの相場なら

三十石のよごがわの月
二人は用を濟し、思はず景色に見惚れて居るさ、土手の下にかゝつて居る船は
ダン／＼漕ぎ出す様子だから、彌次郎兵衛北八は夫れを見て北、オ、待つ

てくれ……今乗るぞツ……混雑の中を押し分けかけ分け、漸々飛び乗つたの
は、大阪八軒屋からの登り船だ、性來周章者の二人は、一向夫れさ氣がつかな
い、殊に船の中は暗いから、間違ひは知らず、以前の船さ心得て、混雑紛れ
に人の荷物を枕にして、コロリと横になる、何なく船は出る、右に棹さし、左
りに綱引き、早くも八幡山崎を後に、淀川堤を打ち過ぎ、夜も明け近き頃、
伏見にこそは逆戻り。

十二 人の顔の店卸をしやがる

昔も影も白く、烏の聲告げ渡るに、一同目を覺し△ソレ、船が着いたぞ、
起きろ／＼と、立ち騒ぐ、彌次郎兵衛北八、大阪八軒屋に着いたと思つて、
風呂敷包みを小脇に抱へ、慌て、岸に飛び上り、船宿に歩つて來る、乗合の人
々もゾロ／＼來る二人は、キヨト／＼四邊を見るとき、船の中で知り合いになつ

た人は一人も見へない北「オヤツ、これは奇體だ彌「ナレド北八、乃公等に酒を呑ませた隠居は何うした北「サア、一向見へねへ、長崎者や越後者も居ないよ、大方此處へ寄られへで立つたさ見へる、マア悠りさ仕度して出掛けやうか彌「ウム、宜からう」元の伏見へ着いた事は知らないから、珍らしさうに四邊を見廻して居る女「モシ、何方もお仕度は何うでございます彌「オイ姐さん、此處へ膳を二つだよ、早く頼むぜ」間もなく膳が出る、飲に八は豆腐の平をつけて出す、之れは伏見の船宿の定めだ、二人はムシク飯を喰い「彌「北八、今日は斯うしやう、之から長町の分銅河内屋さ云ふ宿へ行つて泊つた上、直に芝居でも見やう北「ウム、乃公は早く新町さやらへ行つて見たい彌「イヤ夫れも宜からう、アハハハ、オツ熱いッ、舌を焼いた、ペツク〜」横手では四五人の客が△「オイ太兵衛さん、お前虎屋の饅頭は何うしたい太「六兵衛さん、トント河六へ忘れて来たよ六「冗談じやアない、ツイ一走りだ取つて

来るが宜い……、僅か十里の路だ……太「アハハハ、十里の路を引返して饅頭を取りに行つちやア堪られへ……」此の話を聞いて彌次郎兵衛不思議さうに彌「モシお前さん、今云つた虎屋さ云ふのは、大阪の事でせう六「エ、左様ですよ彌「其の饅頭を忘れた河六さ云ふのは何處です六「夫れは何んだ、日本橋北詰東じや……彌「其の日本橋北詰は、此處から何里程あるんだ……六「此處から十里あるよ北「オイ〜彌次さん、宜い加減にしねへ……奴等は勝手な知られへと思つて、乃公等を冷遇して居やアがる、此處から十里あつて堪るものかい、途方もねへ……お江戸の土地でも四里四方だよ……太「お前さん等此處を何處だと思つて居る、此處は伏見だよ、伏見の京橋だよ彌「ナニ、伏見……、オイ北八、手前が云ふ通りだ、此奴等は乃公等を馬鹿にして居やアがるヤイツ、宜い加減な事を云ふが宜い、乃公等は現在夜前伏見から船に乗つて今此處へ着いたのだぞ太「アハハハ、此の人達は桃山の狐に摘まれて居るさう

な、アハ、北「ナニイ乃公等を狐付きたツ、篋棒奴ツ、これでも江戸ッ兒のチャキ〜だぞツ……」力味で居る處へ、戶外からドヤ〜と這入つて来た。四五人の大阪者がある。△「何うした〜、何を争つてるんだい、夫れより乃公は大變な目に遭つた、乃公の風呂敷包みが船の中で無くなつた、何うしても分らない……」云ひつゝ、彌次郎兵衛の側を見るさ、正しく自分の包みが置いてあるから。△「オヤツ、之れは乃公の風呂敷包みじや……」取らんとするさ。彌次郎兵衛は遮ぎり彌「何をするのだ、之れは乃公のかわい……」△「何を吐す、乃公のものに違いないわい」彌次郎兵衛ヒヨイと包みを見るさ、成程自分のさ違つて居るから。彌「ハテ面妖な、オヤ〜〜スルト此處はイヨ〜伏見だな……皆「アハ、馬鹿を云つてるわい北「ヤイ、何が馬鹿だい……此の野郎……」△「此の野郎も絲瓜もあるかい、乃公の包みを盗みくさつて……マア〜別状なくつて何より有難い、免してやるから、トツトミ出て行けツ彌「ウワー

此奴は飛んだ目に遭つた、薩張分られへ、北八何うしたのだらう……北「サア乃公も分られへ……全體夜前は何日だつた彌「ウム、大方二十四五日頃だ、北「今日は、大か小さい、昨日は何の日だつたか彌「サア、此の間何處かで泊つた時、甲子ださ云つたじやアねへか北「ソレ〜、アノ茶飯は甘かつた、彌「平の牛蒡の大きき……珍らしかつたぜ……」之れを聞いて皆々皆「アハ、い、コリヤ何うしても本氣じやアねへ、アハ、腹を抱へて大笑いするなかねんばい。太郎兵衛は暫らく考へて居たが、太「アハ、成程何うも餘り賢い人達ではない、斯んな人に盗みする甲斐性があるものか……分つた、お前等は昨夜伏見から乗つて、雨が降り出して中途で雨宿りして居た時、用足しに土手へ上つたのだらう彌「ウム、夫れ〜違くない太「ソレ見る、其の時船から土手の上つて居た人が澤山あつて今船が出るさ云ふので、皆々慌て、船に乗つた時、お前方は乗り違へたのじや北「ウム成程、ソレ〜夫れに違くない、私も

船に乗つた時暗くつて、此の風呂敷包みを乃公のだと思つて枕にしてコロリ寝たのだ、處が今朝見るさ一人も知つた顔がねへから不思議に思つて居た處だ、彌ウム、夫れく、左様云へば最初の船の上り場で見たやうな處だと思つた此奴は大失敗だ、イヤ飛んだ事をやつてのけた北アハ、ハ、ハ、之れで物が薩張り分つて氣持が宜い彌イヤ、分る事は分つたか、乃公等の包は如何したらう太アハ、ハ、ハ、夫れは今頃大阪の八軒屋に行つて、風呂敷ばかりが、ウロくしてお前方を尋ねて居るよ……北忌々しい、飛んだ目に遭つた彌ヤア仕方がねへ、何うなるものかい、金は胴巻にあるから大丈夫だ、包みは手前乃公の着代へばかり、打つ放つてしまへ、へん江月ッ兒だ」負け惜みを云つて居る北ダツテ彌次さん、之からノコく大阪へ行くのもパツさしないよ、スグ京へ行うじやねへかい彌宜からう」彌次郎兵衛と北八は、氣拔けのした顔で船宿を立ち出で、ブラリく京街道に差しかゝり。

伏見出て淀の車がまたあさへ廻りまはつて来たは何事
 北アハ、ハ、ハ、情けれへなア……、馬鹿くしい……」伏見の町を過ぎて墨染の里へ来る、此處は遊女町で軒毎に長簾がかけ渡し、其の中より顔の白い白粉ベタく塗つた女が走り出で、彌次郎の袖を捕へ女お這入り、一寸お遊びなさいな……チヨイト……彌何んだ、廢せく」振り切るさ今度は北八を捕へ女お前さん、チヨットお遊び……、意氣なお方……北何を吐す、斯うだよ……」ベカコの眞似をする女オツ、好ん人じや、此方も否いなア……北勝手にしやアがれ、いやいな三郎義秀も泊られへのだツ、放しやアがれツ……女オ、怖ッ」放して内へ逃げ込む彌アハ、ハ、ハ、此處が跡で聞いた墨染だな。
 すみぞめのお女郎の顔の眞白さは

石灰蔵の鼠ころもか

ふたりは何なく深草の里につく、此處は家毎に焼もの土細工を商ふ家立ち並ぶ
やきもの、牛の細工に買ふ人も

よだれたらして見惚れこそすれ

籐の森に來た。

稻荷山松のふくりにかゝれるは

ふごしのさがり籐の森かな

此處に稻荷の社を伏し拜みつゝ、北何んぞ彌次さん、此處等で一服やらかそじ
やれへか彌ウム、宜からう〜……」二人は葎すかけの茶店へ入る彌「オイ
婆さん、甘酒一杯くん婆「ハイ〜暖めて差し上げます」云ひつゝ婆はジロ
〜彌次郎兵衛の顔を見入つて居る北「オ、彌次さん、此處の婆はお前に氣が
あるさ見へて、アレ變な目付をして見て居るぜ彌「冗談じやアねへ、オイ婆さ

ん早く呉んな……婆「へい、今出來ます」彌次郎兵衛の顔を見てクシ〜泣き
出す彌「オヤツ、此奴は可笑しい、婆さん、お前乃公の顔を見ては泣くが、一
體何うしたんだい、目が悪いのかい婆「妾は、お前さんの顔を見て、悲しくて
〜……彌「ソリヤ、何故いだ婆「オイ〜……北「アハ、ハ、ハ、此奴は
妙だ、婆さん何うしたい婆「イエ貴公、妾は此の間一人の悴を亡くしましたが
其の悴に貴公がヨク似て……其の儘瓜二つさ云ひたいくらいで……オイ〜……
……彌「ハ、ア、乃公に似て居るのだな、夫れで思ひ出して泣くのか……、ジ
ヤアお前の悴も好い男振であつたらう、惜しいことをしたものだ……婆「ソレ
其のドラ聲の物云ふ處から……、お前さんのやうに痘面で……、色が黒ふて……
……、鼻が獅子鼻で……、目の大きい處迄が其の儘じや……オイ〜……、
クシ〜……彌「オヤ〜、スルト私の顔の悪い處ばかりが好く似たものじや
北「アハ、ハ、ハ、悪い處ばかりも氣が強い、好い處は一つもれへ癖に……婆「

オ、夫ればかしじやなひ、アソツレ片髪の禿の處迄がヨク似て……アンなにも似るものかいな……オイ……彌ウワー、人の顔の店卸をしやアが、早く甘酒くんな婆、ホんに、忘れて居ました」二人に酌んで出す、二人は飲みながら北、恐ろしい薄い甘酒、婆、ハイ、薄くもなりましたらう、妾や悲しうて、ツイ涙が其の中へ……彌エツ、涙……汚れへ……涙ばかりならまだしもだが、見りやアお前鼻水を垂らして居るが、夫れも一處に落したんだらう少々鹽ツばいぜ、婆、サア、妾は此の通り三ツ口じやもの、鼻水も唾液も其の中へ……北ウワー、此奴は堪られへ、メツ……、最ふ飲めぬ彌乃公は、皆なツイ飲んで仕舞つた、思々しいなア、顔の店卸をしられた上、鼻水と唾液と涙迄飲まされりやア申分はねへ……、サア行こうく」二人は錢を拂つて、其處を立ち出で、彌次郎兵衛は振り返りながら、くりごこに涙をまぜて水鼻も

す、り込んだるうばが甘酒、斯くて二人は足に任せて辿り行くほごに、ダン、都近くなりて往來殊に賑はしく、人の風俗も自然と温順しくなり、而も衣裳は花やぎたる女の飾いに、二人は幻を抜して唾液タラ、見惚れ行くうちに、早くも大佛前に歩つて来た北、オヤ、大きいお寺だな、アレ山門の上から佛様が覗いて居らア彌ウ、之れが名高い大佛様だよ、成程話に聞いたよりは強勢なもんだ、オヤ、此の石を見ろい、豪い……。大佛の御堂は雲に入れきてや、これは大きなもの、天上、彌、サア、入つて見やう、北八來い」二人は山門の内に入り込み、ブラ、御堂に登つて来た

十三 盲目が物を云ひ啞の耳が聞へる

大佛殿方廣寺の本尊は、盧舎那佛の座像であつて、身の丈け六丈三尺、堂は西向にして、東西二十七間、南北は四十五間あつたのだ、彌次郎兵衛北八は此處に法施して、彼方此方を見物しながら彌北八、ナント話に聞いたよりも豪勢なもんだぜ、アノ斯うしてござる手の平へ、疊が八疊敷けるさうだ北ハ、ア、狸の金玉と同じ事だな彌馬鹿ツ、勿體れへ事を云ふな、アノお鼻の穴から人が傘を指して出入りが出来るさ云ふのだ北ヘーン、ソリヤ人が傘を指して出るんだから宜いが、ヨク鼻の穴から梅毒が吹き出されへものだ彌ヤイ、馬鹿も宜い加減に云へよ、サア後へ廻つて見やう……オヤツお脊中に窓が明いてらア北アレは大方、汐を吹く處だらう彌アハ、鯨じやアあるまいし北オヤ、皆が柱の穴を潜つて居るよ彌イヨ、奇妙……」

北八も柱の穴をくぐり北此奴は面白い、然し乃公は瘦せてるから潜れるが彌次さんは肥へてるから抜けられぬ彌ナアニ、乃公だつて潜れれへ事があるものか……彌次郎兵衛四ツ這いになつて柱の穴の中へ身體を半分程入れかけたが、一向抜けられん、後に戻らうとするさ、脇差の鐔が横腰に支へて痛くて堪らない彌アイタ、コリヤ大變……北オヤツ何うした、抜けられぬかい彌北八、テ、手を引張つてくれ北アハ、此奴は妙だ、彌次郎兵衛の兩手を掴んでグツと引張る彌アイタ……北弱い男だ、チト辛抱しれへ……彌後から、足を引いてくれる北オツト合點……後へ廻つて足をグイ、北エンヤラサー、ウーン彌アイタ、前の方から引出してくれ北冗談じやアねへ彌次さん、乃公一人が前へ廻つたり後へ廻つたりして居ては何時迄遣つても同じ事だ……ウム待て、宜い苦面がある……モシお前さん、氣の毒だが前から引張つておくんなさい、私は後へ廻つて足を引張るか

ら……彌「ウワ……、北八兩方から引張られては出る瀬がねへ……北「ダツテ彌次さん、兩方から引張るぞ、前へ廻つたり後へ廻つたりする世話がなくなつて宜いよ男「左様だ、兩方から身體を引張つて延したら、ツイ出られるかも知れん……北「待て、宜い事がある、酔を一升も買つて来て、お前に飲ませやう彌「ナゼ、北「ハテ、酔を飲む骨が柔くなるぞ云ふじやアねへかい彌「ジヨ冗談ごころの騒じやアねへ、北八早く何うかしてくれ北「待ちなよ……アハ、お前脇差の鐙が横腹へ出て居るじやアないか」さ、手を差し込んで漸々脇差を抜いて取る彌「ア、ア、之れで何うやら痛いのは止んだ……北「サア、之から引張り出さう、モシ、お前さん、前から押し出して下されわしうしろ私「後から足を持つて引張るから……、ヤアウーン、エンサ、エンサ、男「ソレ、出るぞ、モシ、ウンス力味んだ彌「アツ、ウ……、ウーン男「ハツハ、出るぞ……彌「イタイ、北「占め、ツ、エンヤラヤア

ソレ出たぞ……ウーン……」漸々引出した、彌次郎兵衛大汗になり、身體拭き、フウ、苦しき息をつきト「ヤレ、有難い、ヤア皆さん何うもお世話様……私「伊勢で産をしたが、産むよりか生れる身が餘程苦しい……オヤツ衣物がスリ切れて……肋の骨がピリ、ピリする傘さして出るお鼻より柱なる

穴恐ろしや身をすぼめても

これより山門を立ち出で、門前を北へ指してズン、行く、往來殊に賑はしく、實にも都の風俗は、男女共に何處もなく柔和温順にして、馬士、荷持迄も、洗濯布子の糊強きを折目高に衣て、あのおしやんすき艶めきたる言葉も可笑しくふたり二人は目に見るもの珍らしく、興に乗じて歩いて居る折柄、往來、俄に騒がしく、老若、男女が右往左往に走つて行く彌「オヤ、何んだらう、向ふに何かあるぞ……モシ、何んでございます男「喧嘩だ、北「ナニ喧嘩、京の喧

嘩は珍らしい、一つ見物しやう……」足を早めて行つて見ると、一人の肴屋と職人體の男が口争いをして居る魚「コレ、お前の方から突き當りくさつて何を云ふのじや、頭叩き割るぞツ職「ナニイ、お前に叩かれるのに昵として居るか、待つてけつつかれ」手拭を鄭寧に折つて鉢巻する魚「何を吐すぞ、一體手前は何處の者じやい職「乃公かい、堀川姉が小路下る處じやわい魚「名は何ぞ云ふぞい職「喜兵衛と云ふわい魚「年は、何歳じや……職「二十四じやい左様吐す我が家は何處じやい魚「一條猪熊通り東入る處じやい職「彼處に盲目で目の見へん寸伯と云ふ鍼醫があるがな魚「オ、有るが何うした職「乃公の親類じやい……」悠長な喧嘩もあつたものだ、見物は欠伸をしながら男「十兵衛さん、最ふ宜いのかい十「待ちな、今に殴り合ふじやう」スルト職人「魚屋は職「ヤイ、今乃公を阿呆と云つたが、何で阿呆じやい魚「乃公は手前のやうな阿呆じやない賢じやわい……職「我が賢なら乃公も賢じやわい魚「オ、我

は賢か……夫じや喧嘩止めにしやうわい職「ウム、衣物でも破つたら損じやさかい止めてこまそかい魚「オ、遅なつた、ドレ行こう職「待て、乃公も一處に行く、今日は宜い天氣だな……魚「ウム、暖かふて宜い……」後見送つた彌次郎兵衛と北八は北「アツハ、ハ、ハ、ハ、成程上方ものは氣が長い、アンな薄鈍い喧嘩が何處にある彌「アハ、ハ、ハ、ハ、喧嘩に損徳を考へて止ることは大笑いださ、打ち興じて清水の坂に來た、二人は程なく清水寺に入り込み、境内を廻り音羽の瀧を見て本堂に參詣する、本堂は十一面千手觀音が安置してあるのだ、昔沙門延鎮が夢の中に得た靈像であつて、坂上田村鷹の建立したものだ彌次郎兵衛北八は四方の景色を眺めながら、さ見ると片脇の小高い處に机を据へた老僧が、參詣人を目掛けて老「當山觀世音の御影は之れから出ますだ、誠に靈驗あらたかなる事は盲目が物を云ひ啞の耳が聞へる、歩つて來た壁が全快る、一度拜するものは、如何なる無病息災なりさも、忽ち四方極樂淨土へ救

い取られん、其の御誓願じや、誰方も頂いてお歸りなされ、冥加錢は澤山にお
 心持次第、御信心の方はございませぬか……、北「オヤ／＼／＼、ヨクペラ
 口喋る坊主だ、時に彌次さん、アノ傘をさして飛ぶと云ふのは、此の舞臺
 かい老昔から、當山へ立願の方は、佛に誓ふて、是から下へ飛んでも、怪我
 せんのが有難い所じや……、彌「此處から飛んだら身體が粉になるだらう北折
 々は、飛ぶ人がありますけれ老左様じや、大體氣の狂つた人が多いが、此の
 間も若い男と女が飛んだ北「へーん、飛んで何うしました老「落ちた北「落
 ちて、何うしました老「其の女は、罪が深いから佛の罰で目を廻した北「鼻は
 廻さなんだかれ老「イヤ、梅毒さ見へて無かつた北「シテ、氣が付きましたか
 老「死んだ北「死んで、何うしました老「オヤ／＼、諄く聞く人じや、夫れ尋
 りて何うなさるのじや北「イヤ、私は金輪際聞きたいのが癖じや老「其の女中
 は、俄に氣が違ふた北「へーん、氣が違つて何うなりました老「百萬遍を始

めた北「其の後は……老「南無阿彌陀佛……北「夫れから……老「ハテ忙しな
 い、百萬遍じやわい北「其の念佛百萬遍濟む迄待つて居るのか、途方もね
 へ……老「イヤ、聞きかけた事は、根掘り葉掘り尋ねたいが癖じやと云つたじ
 やないか、チト辛抱して聞なさい、夫れが退屈なら、お前も百萬遍手傳ふて
 下んせ北「コリヤ面白からう、彌次さんお前此處へ掛けねへ、サア南無阿彌陀
 佛だ……老「逆もの事に、鉦入れてやらうわい……」さ、夢中に鉦を打ち鳴ら
 す、チン／＼／＼北「アハハハハ、面白うなつたぞ、ナンマイダア／＼……」
 此の時老僧は老「コレ、私は用場へ行つて来るから一寸頼みます北「へエ、宜
 しい」北「八夢中になり、鉦を叩きながら北「ナンマイダ／＼／＼……」チーン
 チン／＼、此の時奥より、番僧が出て来て、ヒヨイさ此の體を見て番「オヤツ
 氣狂い奴ツ……北「氣狂いだから、此の百萬遍……番「エ、イ、何を吐す、
 出て行けツ、此處は御祈禱所じやぞツ」追い立てられて二人は這々の體で坂を、

くだ 下り北「アハ、ハ、ハ、糞坊主奴が飛んだ目に遭しやアがつた」二人はプラ／＼
 ある 歩いて居るさ、早や其の日も七ツ頃さなつた、何處かへ宿を取らうと三條通り
 へ出て来るさ、向ふより小便桶と大根を擔いで居る男、男大根小便しよ／＼……
 ……北「オヤ／＼／＼、唐茄子が笛を吹いて居る見世物は見だが、大根の小便す
 るのは、之れ迄見た事かへ、彌「アハ、ハ、ハ、アレが大根と小便と取りかへる
 んだよ、男、大きな大根と小便しよ／＼」處へ仲間らしき二人の男が通りかゝつ
 た、仲「オイ／＼、二人が小便してやるが、大根三本くれんか、男「マア、小便し
 て見ない事には分らん、サア此方へ來なさい」横町へ連れ込んで、小便桶を下
 し男「サア、此の中へ放て見て下され、仲「ヨシ／＼……」ジヨンジヨロリ
 ー／＼……仲「サア、呉れ男、オヤツ、之れくらいかな……仲「ウム、夫れきり
 だよ、男、之では、三本の價値はない、ヨク身體を振つて……仲「オイ／＼、小
 便を瞞着たり出来るかい、男「ジャア、二本……仲「ナニ二本……、オイ小便屋

おれら 乃公等の小便は少なくて品物が宜いよ、お粥腹と違つて、憚りながら肴や
 肉ばかり喰つてるんだ、男「ケド、餘り少ない……、夫れが氣に入らなければりや
 ア、返す……仲「ナニ、返す……冗談じやアねへ……、夫れへ水を交ぜりやア
 三升ぐらいになるじやアねへか」互いに争つて居る、北八は見兼ねて北「オイ
 ー、乃公が小便しやうから、大根三本渡してやれ、仲「何うも、お前さん氣の
 毒で……北「ナアニ、有り合せて輕少だが……」ヂヨロリン／＼……北「サア
 放たよ、男「モシ、お前さんも何うか序に放て下さいませ……彌「イヤ、乃公は
 此の間迄は一斗二斗は遣つて居るが、近頃は小便づまりで出ないよ、北「アハ、
 ー、遅くなつた、サア行こう／＼……」二人は五條新地へ歩つて來た、女
 立ち出て彌次郎兵衛の袖を引く彌「イヨ、女郎屋だな……ナント北八、今夜
 は此處で泊らうじやアねへか、北「宜からう、荷物はなし、女「サア、お入りなさ
 い……彌「此處は、幾等だ、女「未だ初夜前じやさかい、七奴づゝ……北「待

ちねへ彌次さん、上方の女郎は、値切つて買へさ云ふ事じや、半分は負けさき
れへ彌、四百づゝなら、泊つて行こう女、宜うござんす……」二人は案内され
て二階へ上る、其のうち女郎が二人来る、一人は吉彌、一人は金吾さ云ふ名前
ふたりともこふと太つて居る北「イヨ、暗い行燈だ、サア此方へ寄りな吉「お前さ
ん方、何處でござんすの……彌「サア、頓さ忘れた……金「ホ、ホ、六角の
朝市でヨク此んなお方が見へてじや」

十四

脊中の横町に大きな紋所があらう

彌「マア、左様思つて居りやア間違いはれへ吉「モシ、お酒一つ召し上れ……
彌「ウム、酒が早く飲みたいなア吉「夫では、お着は何にしましよ金「妾は角
のおすもじが宜いわ吉「妾はからん南蠻が宜いわ彌「からんでも家賃でも、早
くしてくんな」問もなく酒が出る、大平が一人前一つ宛出る彌「オヤ、何

だ大平を人別割さば珍らしい、北八強氣だよ北「ウム、四百では安いもんだ」
ふたりは酒も肴も揚代四百の内と思つて、無暗に安い、さ賞める金「サア、一
つ召し上れ……」二人はグイ、グイ飲む、ムシヤ、食ふ、其のうちに酒を止め
蒲團を敷き並べ腰屏風を立て、仕切りをする、處へ此の家の女房が入つて来る
女「ハイ、おつさめを頂きます……」書付けを出す、彌次郎兵衛は之れを見て
彌「何だ、四匁つゝ八匁の揚代は聞へてるが、四匁……カチン南蠻、二匁すし
壹匁八分御酒、五分蠟燭、總計十六匁……、之りや飛んだ話だ、雑用は別に取
るのか、乃公は又酒も肴も揚代の中かと思つた、オイ北八、此の通りだよ……
……北「ドレ、ウワ、高いじやねへかヤイツ、手前は我々を他國者だ
と思つて、酒代を別に取るばかりか……蠟燭代さは何うだ女「ホ、ホ、彌「エ
、面倒だ、ソレ一分持つて行け……不足は負けて置け……」一分投り出す、女
房は不承無性にと取つて行く彌「ア、飛んだ目に遭つた、ノオ北八北「ダガ、

惜しくねへよ、何だか乙に持てさうだ」此の時北八の相方吉彌は「吉、若しお前さん北、何んだく」吉、妾、一寸手水に行つて來ますぞへ」起上つて、北八の着物を着て帯引しめ「吉、お前さんの着物貸して下さいよ、妾、男の振りをして欺してやるの……」北「ウム、ヨク似合つてるよ、奇妙く」女は手拭被つて下へ降りた、北八は寝もやらず待てごもく戻つて來ない北「オヤツ、一體何うしたんだらう、人を馬鹿にして居やアがる」早や七ツの鐘も鳴つて、程なく夜が明けかけたが、夫れでも姿を見せない、北八堪り兼ねてパシ／＼手を叩く下より女房が上つて來る北「オイ、乃公の相方は何うしたい、餘り馬鹿にしてるじやアないか、呼んでくれ……」下へ降りたきり顔出しをしないさは怪しからん……女「ハイ、其の事で下では大騒をして居るんでございます、北「ナゼく」女「アノ吉彌が男の着物を着て走つたので……」北「ナニ、走つた……逃げたのか……、其奴は大變……、乃公の衣物だよ」女「又、何うしてお前さんも衣

物を貸して……」北「イヤ、斯様くだよ、併し着物は返してくれんじやア困る女「ハイ、マア左様云つて見ませう」女房は降りて行く、間もな亭主と二三人の若い男がドヤ／＼上つて來た亭「オイく、吉彌に着物貸したのはお前かい」北「オ、乃公だく」亭「乃公もないものだ、太い野郎だ……」北「ナニ、何んで乃公を左様に吐すのだい」亭「吐したが何うした、手前が吉彌奴に着物貸したばかりに、欠落したわい、サア手前が走らせたのだらう、行先を云へ、北「ト、飛んだ事を、乃公は知らねへ」亭「知らぬ筈がない手前が頼まれたに違いない」北「オヤツ、乃公に云ひがりをするかツ、此の野郎……」男「エ、イ、何を吐す引ズリ降せ……」立ちかゝつて北八の手を取る、彌次郎兵衛、目を覺して、飛び込み來り彌「ヤイ、乃公の連れを何うするのだ」と、亭主を突きつける、スルト若い男は若「ヤア、此奴も同類だ、引縛れツ」相手は小力のある男ばかり、無理矢理兩人を引ズリ降し、柱に縛りつける。彌次郎兵衛は更に

合點が行かない彌「ヤイ、乃公迄縛つて一體何うしたのだ亭「エ、イ、實は斯様く〜だ、彌「エツ、夫れは大變だ、北八、手前も衣物を貸すよ云ふ事があるものか、オイ御亭主、實際私等は何にも知られへのだ、何うか許してくれオイ北八、手前も頼め〜、北「ヨシ来た、南無金びら大權現様、此の災難を免れますやうクシヤ〜、南無奇妙頂來〜、亭「エツ未だ馬鹿々々した事を云ふかつ怒る奴をイロ〜、詫をして、二人は漸々縛を解いて貰い彌「キ、北八、手前のお蔭で飛んだ目に遇つた、北「お前より乃公は此の通り裸體で寒い〜亭「ハツハ、〜、餘り可哀想じや、菰でも被つて行けツ、北「イエ、最ふ結構〜、彌次郎兵衛の合羽を借りて引被り、二人は漸々女郎屋を飛び出した、北八は朝風身に染み、寒くて堪らない北「ア、思へば〜満られへ、何うか古着屋でも見付けて綿入でも一枚欲しいが、彌次さん好い智恵は出ないかれ、寒くてならね〜彌「ジヤア、幸い此處に湯屋があるよ、一寸暖

つて行きねへ北「イヨ、此奴は奇妙〜、彌次さん先へ這入るぞ有難い〜一散に飛び込む男「モシ〜、無暗に入つては不可ませんよ〜と、云はれて見ると湯屋ではない北「エツ、忌々しい、湯屋かと思つた亭「アハ、〜、暖簾に湯の字があるから無理もない、私の宅は濟生湯と云ふ妙振り出しの薬屋じや彌「アハ、〜、此奴は失策つた北「ウワー、又一倍寒くなつた、忌々しい〜、飛び出して行つて見ると、古着屋がある、綿入の着物が釣り下げてあるから北「モシ、此の布子は幾程だれ、安くしてくんね〜亭「へい、三十五匁より買はなしてございませよ北「高い〜、乃公等は江戸の者で古着は商買柄で扱つた事があるんだから、本當の處を云つたら宜い亭主「ハ、ア夫じやア、お前さんも古着屋で〜、北「イヤ、乃公は質商買さ亭「へエ、質と云ふは取るか置くのか〜、彌次郎兵衛横合より口を出し彌「此の男は、置くのが商買さ北「夫れだから、質に置く時の勘定からしてかゝらにやア買はれねへ、此の

布子は何うしても一貫より上は貸すめへから、二朱ばかりに買はなけりやア損
が行く亭ナゼです、後家の質屋へ持つて行つても、一分は黙つて貸すんだよ
互いに争いながら、結句一貫で買取り、北八は着込んで北ア、之れで助
かつた、暖い〜……」二人は門口を出て暖簾を見るさ、虎屋さある
和藤内三貫あまりの古布子

老一貫にもさめこそすれ

北八は大分元氣さなり、ブラ〜行くうち北「オヤ〜素敵な女がチラ〜す
るぜ彌「ハ、ア紫頭巾の野郎共も見へるから、大方宮川町だから北「ウム、
来るぞ〜別嬪が来るよ、乃公も布子を買つてよかつた、萬更裸體の上に、此
の合羽じやア、スレ違つても外聞が悪い」さ、俄に澄し返つて襟カキ合せて居
る、一人の女はスレ違ひさま北八を見て女「オヤツ、初音さん、御覽よ、アノ
人の着物には大きい紋が付いてじやホ、ホ、初「ホんに、阿呆らしい否な人……

……」笑つて通る、彌次郎兵衛心附いてヒヨイミ眺め彌「オヤ〜、北八、手
前の着物を見るい、脊中の横町に大きな紋所があらア北「エツ、何處に〜
……」ヨク見ると、幟を紺に染めたのだから、暗い處では一寸分らないが、日
當りの處で見へる、大きな紋がアリ〜見へる、北「ウワー、コリヤ大變だ
彌「アハ、ハ、ハ、脇の方には鯉の瀧登りが見へるから、此奴幟の古じやな北「
エツ、古着屋奴、飛んだ物を掴まじやアがつか、道理で安いと思つた、忌々し
いなア……」夫より四條通りに出で、有名な狂言場に入り込むドサクサ紛れに
木戸錢を踏み倒して

木戸錢を棒に古手の布子にて

芝居も紺のだいなしにせし

それ夫より祇園の社に参詣する、本社中央には大政所牛頭天王、東の間には
八王子、西の間には稲田姫聖武天皇の御宇、吉備大臣唐土より歸朝の時、播磨

の廣峰に垂跡し給ふを崇め奉つてあると云ふ、二人は茶屋に飛び込み、田樂を注文して、鱈腹喰つた揚句が、又勘定で高い安いの争いとなる。

又しても祇園の茶屋に田樂の

味噌をつけたる身こそ口惜しき

境内を出て元の四條通をブラ／＼行つて居るさ、早や七ツ下りとなつた二人は急いで三條通りに出る向ふから来る女商人、何れも頭に柴薪、又は梯子、連木などを頂き、四五人連れて賣り歩く北「オヤツ、強勢なものを頭へ載せて行くぜ彌」ウム、アノ又尻の振りやうを見る……アハ、ハ、ハ、女「薪買はしやんせかいなア……」女商人は河原へ出て荷を下して休む彌「アハ、ハ、ハ……流石は都じや、何奴も小奇麗な面付をして居るわい、一つ冷かしてやらうか、北」ケド、又お前凹まされるぜ彌「馬鹿云ひれへ、手前じやアあるまい……」さ、彌次郎兵衛煙管を出して女の側により彌「姐さん、一つ火を貸してくんな

ハツハツハ、ハ、ハ、時にお前方は、飛んだ重いものをヨク頭へ載せて歩くものじや女「ホ、ハ、ハ、彌」マア此の位いのは何でもれへが、乃公なんざア二十貫や三十貫の石を頭で振り廻したものだ女「お前さんは、うごん屋の粉引でござんせう……、モシ此の連木買つておくれんかい彌」ナニ連木、ウム買つても宜いが、コリヤ細い、乃公等の處では、何でも材木のやうな四角の摺子木でなくつちヤア間に合はれへ女「ホ、ハ、ハ、四角の連木でお味噌摺るのなら、大方摺鉢も四角でござんせうなア彌」左様さも、乃公の處では穴倉で味噌をする、女「オホ、ハ、ハ、可笑しいお人じや、アノ連木お否なら梯子買つておくれんかいな彌」ハツハ、ハ、ハ、梯子さほ面白い、幾程だ女「今日は、何も宜う賣らんさかい安くしておきますわいな、六匁に負けて……彌」アハ、ハ、ハ、二百許りなら買つてやらう女「モチツト買はんせ彌」否だ、女「お前さん五匁で上げよわいな……彌」ヤツ、負けるか情けない女「安いものじやわいなア彌」幾等

安くつても、梯子買つて何うする家もれへくせに……女宜いわいなア、サア
持つて行なんせ彌、此奴は謝罪る、乃公等も旅のものじや、今宵は三條で泊る
のだから梯子を買つても仕方なれへ女、ナニ云はんず、不用物を値段をつける
事があるかいな……」女共四五人口々に喧ましく饒口り立て、彌次郎兵衛を取
り捲き、ナカ／＼聞き入れない、今は彌次郎兵衛も仕方なく、二百文出して梯
子を買取り、擔いてプラ／＼歩き出す、女はドツと冷笑ふ彌「オイ、北八／＼
擔いでくれ頼む北、冗談じやアねへ、お前持つが宜い彌「ア、ア、飛んだもの
を買はされた……情けなハナア」

いかにせん梯子の親と此のやうな

厄介ものを引受けし身は

十五 女のない國で生れた人であらう

早や其の日も西に落ちて、家ごこに火を點す頃となつた、二人は三條小橋を渡
つて、宿屋に着いた亭、之れはお早にお着きで……シテお荷物は……北「此の
梯子一丁亭「オヤ／＼、之れは何うも妙なお荷物……コレ／＼お蛸や、奥へ御
案内申せ……」二人は奥へ通り酒を呑んで居るうち、興に乗つて狂言を始め
梯子を座敷へ持ち出して、飛んだり跳ねたり、素人狂言に夢中になつて居るう
ち、鴨居にかけた梯子が落ちかゝつて、宿の娘は大怪我をする、亭主は怒る、
醫者が来る、大騒動の末が、醫者の薬禮さ、詮證文一札を出して、何うやら事
が納まつた、翌朝二人は梯子を擔いで宿を立ち出で北「彌次さん何んさ今日は
何方の方へマゴツクのだ彌「イヤ、未だ東山を見物したい處があるが、マア今
日は北野の天神様へ参詣しやう」さ、ダン／＼堀川通りに来る北「オイ彌次
さん、時に思い出した事がある、ソレ伊勢の古市で、上方者さ一處になつたら
う、アリア京のもので、確に千本通り中立賣と云つたが、北野の天満宮へ行

く道ださ云つたじやアないか彌「オ、サ、邊栗屋の與太九郎か北ソレく、
 其奴の處へ尋ねて行つて、酒でも呑んでやらうじやねへか彌「ナアニ、アんな
 者たれが呑ますものかい北「處を此の軍師北八が、計略にかけて呑み倒すのだ
 ……」と、尋ねて漸やく與太九郎の宅へ歩つて來た、二人は梯子を軒先に
 立てかけ彌「へい、御免なせへ」格子戸を開けて入る 與「誰じや…」オ、これ
 はお珍らしい、ヨクお上りなされた彌「ヤア、伊勢ではお世話になりました、
 與「ナニ、私こそ…」サア此方へ…北「ハイ、お久しう…」與「イヨ…」
 之れはく、未だ表にお連れが…北「イヤ、二人きりで誰も居ませんよ、
 與「夫では、アリヤ何んで…」彌「ウム、梯子の事かい…」與「何じや、梯子
 さは…ハテ妙なものな…北「イヤ與太九郎さん、お前の處は中立賣だ
 から、ツイ上る處ださ云つたゆへ、若し高い所なら、梯子掛けて上らうと思つ
 て…、ワザく買つて持つて來た 與「アハハハ、コリヤ可笑しい、時に何

もお愛想がない、お仕度は何うじやな彌「イヤ、今朝宿屋で食つたまゝ、未だ
 午飯はしないので…」與「へーん、ソリヤお楽しみじや、酒なご上げたいが…
 此の邊に酒屋はなし…北「酒屋は、ヂキ隣りじやアねへか 與「イヤ、隣りで
 は小賣りをしないので…、折角のお出で、煙草でも召し上げ…北「イヤ、
 煙草の方は此方から願ひ下げた 與「お前方、モ少し先へ寄つて來るさ宜いに…
 ……」話しばかりして何も出さぬ、北八堪り兼ね、ソツと抜けて隣りの酒屋へ
 飲みに行く、與太九郎話に夢中で一向知らない 與「オヤツ、一人の北八さんは
 ……」彌「ウム、最ふ歸つた 與「エツ、少しも知らなんだ、何時の間に…」彌「
 今、御馳走の出掛けた話の時に…」與「ソレは、惜しい事をしたマダお菓子のお
 話があるものを…」彌「イヤ最ふ、先程から大いに御馳走になりませぬ、お
 蔭で飢じくなつた、ドリヤお暇しやう 與「マア宜しい、チトお話がある…」
 アノ古市でお交際申した時の入費金、一兩であつた、私は算用 違ひをして、

金一分二朱此方から出して置いた、コレ此の通り道中の小遣帳に記してある、僅
 の事だが、お二人分二百四十文お返し下され彌「エツ、お前も今さなつて汚い
 事を云ふ人じや、夫れ位いのと打つ放つて置いたら宜い、左様な事を云つて居
 た日には、此方にも云ふ事があるぜ與「ソリヤア、上げるのがあれば上げる、
 算用は算用じや、マア此方へ取るのが此の通りじや、端錢は負けて二百文だけ
 もら貰つて置こう彌「エ、イ、外聞の悪い、其の時取れば宜いじやアれへか、今さ
 なつて何を云つてるんだい」彌次郎兵衛も承知をしない、互いに争つたが、彌
 次郎兵衛面倒臭い二百文出してやる與「ハ、ハ、ハ、之りや有難い、お前さん
 これ、平野様金閣寺へ行くのであらう、早くお越し……彌「大きにお世話じや」
 彌次郎兵衛面膨らして表へ出る隣りの酒屋より北八ニコく顔して立ち出で
 北「何うだ彌次さん、御馳走は出たかい彌「思々しい、酷い目に遭つた、ダカ
 ラ手前が尋れて来ないで宜いものを……、錢二百文只取られた……北「アハ、

、其の代り梯子を放棄つて行こうじやれへか彌「ナアニ、梯子迄只取られ
 て堪るものか、矢張り擔いで行こう」さ、道を探れて行く程に、田樂の茶屋が
 澤山ある、赤前垂の女中が軒先に出て女「お休みなさい、菜飯おでん上らんか
 いな彌「オイ姐さん、乃公等は天神様へ參詣して歸りにお前の處で休むから、
 此の梯子を此處に置いてくんな……女「ハイ、お預り申します、お早うお
 歸りなされ彌「頼むぜ……」さ、梯子を茶屋に立てかけ、ドン／＼向うへ行く
 彌「何んさ北八、梯子を捨てた智恵は何うだい、重荷を卸したやうだ北「アハ
 、面白くもねへ」夫より右近の馬場に行く、此處には借馬が澤山ある、
 人々が乗つて馬の稽古をして居る北「乃公も、一鞍責めて見やうか、向うに見
 へて居る姐さんに……」さ、人込みの中に三四人の女が見物して居る後ろへ來
 て、北八娘の尻を抓る女「チ、痛いッ、誰じや……嫌らしい……、お丸さん……
 ……此方へお出で……丸「何うしたの……女「誰か、妾のお尻を抓つたよ……」

これまた天神の社内に歸り、東の門より一條通りに入る道を知らず、浮々
と元來し南向の門を出るさ、思はず茶屋の門近くへ歩つて來た、彌次郎兵衛夫
れさ心附いて彌待て、北八、先刻の梯子が矢張り彼處に立てかけてあるよ
困つた、此方の方へ來なけりやア宜かつた、又後へ引返さうか……北成程、
彼處へ休まれへで素通りにしてモシ見付かつて梯子持て行けと云はれたら面目
くれへ……と云つて跡へ戻るも強腹だ、何か宜い智恵がありさうなものだ」と、
立ち留つて思案して居る處へ、右近の馬場の馬一匹、馬丁が引いて來るのをチ
ラリと見た北八は北ウム、有る、好い事がある、アノ馬の向ふ腹の方へ喰
つついて茶屋の前を通らう、馬の蔭になつて居るから見付かる氣遣はれ、彌
ウム、夫れが宜い、手前に似合はれへ大出來だ」と、二人は馬の來るのを待ち
受け、其の馬の蔭になつて立ち並んで行く、丁度馬は梯子の茶屋の前に来るこ
とヒタリ立ち留つて少しも歩かない、二人は通り抜ける事も出來ず、同じく馬と

共に立止る馬「エツ此畜生、日が暮れるわい、ハイ、」鞭で打つても
動かない、聽て馬は「ジャア、小便をやり出した、驚いたのは彌次郎兵衛さ
北八だ、小便の飛沫がかつて膝から下は小便だらけ、彌ウワー情けねへ目に
遇つた北ア、臭い、ソレ彌次さん、お前の方へ流れるよ彌ウワツ、畜
生奴、飛んだ目に遇はせる、之りや堪られへ」と、飛びのく途端に、茶店の門
口に立つて居た女が早くも見付け女「モシ、此方でございます、お梯子を
お預り申して居ますのは……サアお這入りなさいませ……北ソリヤコソ見付
けられた彌此奴は堪らぬ、ソレ逃げる、二人は一目散に驅
け出す、亭主は飛び出し亭「ア、モシ、梯子がございます、オー、
……」呼び立てるを耳にも入れず、二人は眞黒になつて逃げて行く彌「ア、
苦しい……、北八待て、最ふ大丈夫だらう……北ア、苦しい……」二人
は下の森を過ぎ、元の千本通りに出で彌「オイ北八、今宵は鳥原の遊廓を見物

して、安見世があつたら泊らうじやれへか北ウム、宜からうと、示し合して往來のものに道を尋ねて、漸々町を離れて東寺へこそは歩つて来た。手折らんぞ手を出す人ぞ鬼ならん

東寺わたりの花のさかりに

夫より壬生寺に参詣して、此處によし簀を門先に立て、居る怪しい茶見世に引込まれて、其の夜の宿と定め、女を抱いて一寝入り、翌日島原を見物して、朱雀野より丹波街道を横切り、淀の大橋に出で、此處より下り舟に打ち乗り、よし葦茂る浪華の土地へ入り込んで来る。

十六 私的女房を何故喰つたのじや

照や難波の津は海内秀偉の大都會にして、諸國の商船、木津安治の兩川口に舳を並べ、錨を連れて、此處に諸々の荷物をひさぎ、其の華榮なる事は云ふ

ばかりなし、殊更花の春は川船に棹さして、天保山に遊び、櫻の宮引船の茶店に酔を催ふし、夏は大川、松ヶ崎の納涼、難波新地、松の尾登加久に螢をかり、豆茶に腹を肥し、秋は浮む瀬、大津、湯の月、冬は解船町の雪景色、四季折々の眺め多かる中に、何時も盛りの春の如く賑い、道頓堀の芝居は常に顔見世の心地して、群集更に絶へず、實に日本三都の其一つ、商業の地こそ知られける、斯る名譽の地を見遁すも本意なしとて、彌次郎兵衛北八の兩人は伏見の晝船に、途中より飛乗りして、早くも大阪の八軒屋につき、此處より船を上つたば、最ふ黄昏の時であつたが、東西も知らず、南北も辨へぬ兩人は、往來の人に尋ねて、長町を差して行くほごに堺筋通りを南に、ズンと日本橋へ歩つて来た、宿引共は、彼方此方より、二人につき纏い、宿お泊りなさいませ、お安くいたします、精々勉強いたします、早速談極つて、直様長町の七丁目、分銅河内屋と云ふに連れ行かれた宿サアサ、お客様をお供い

たしました番「ヤア、お早いお看きてございます……、お幾人さままでござい
 す……彌乃公等は、同行四十七人だよ番「ナニ四十七人様……、コレ〜お
 三や〜、大勢様じや、西の奥の間を打ち抜いて明けるんだよヨク奇麗に掃除
 をして……、宜いかい、早く〜……、コレ久三、お足を洗いなさるお湯は何
 うじや、温くても大事ない、水なごうめてあげませい……、早く〜……時に
 モシ其の四十七人様はお後ですかい彌「イヤ、其の四十七人は先達、鎌倉へ發
 足、我々は之より泉州堺の天川屋義平の處へ……番「エツ、何の事じや、ス
 ルト矢張りお二人かいな、コレ〜お三や、矢張り狭い處で宜いのだよ三「ハ
 イ〜御案内いたします」二人は足を洗つて奥へ通る、此の分銅河内屋さ云ふ
 は、大阪で名題の宿屋であつて、七八十の室がある、兩人は上り口六疊の間へ
 案内しられる、此處には先客が一人ある番「モシ、御窮屈でございませうが、
 御一處になされて下さいませ」此の旅人は丹後のもので丹「サアサ、此方へ……

……北「へエ、御免なさいませ……彌「若し、私等は三四日も逗留して所々方
 々見物がしたいから……宜しふ頼みますよ番「ハイ〜、畏まりました、先
 づ御ゆつくりさ……」云ひ捨て、立ち去る丹「お前さん等は、何處でございま
 す北「私等は、江戸なんですよ、お前さんは丹「私は、丹波の笹山在でござる
 が、今度高野山へ参りますので……北「へエ、左様ですかい……、宜しく願
 いますよ彌「兎角、旅は道連れ世は情け、お心安ふ頼みますぜ」處へ宿の女が來
 る女「御飯を差し上げます……」三膳持つて來る、食事も何うやら済んだ、處
 へ大痘面の女按摩が可笑な風して這入つて來た女「モツ、お療治は何うでござ
 います、何うぞ揉まして下さいませ彌「オ、按摩かい……お前女だな、北八
 何うだい揉まれへかい北「ウム、此方から揉んでやりてへ……按「ホ、ホ、
 可笑しなお客さんじや、お前さん方はお江戸じやな、妾はお江戸の方が大好な
 のですよ北「オヤ〜、お世辭を云つてらア、お前薩張り目が見へないの

かい、惜しいなア、見へるさ此のうちに一人、飛切上等珍無類の色男が居るから、見せてやりてへのだ按「左様でございませう、妾も見たくつて堪りませんの彌「アハ、ハ、ハ、オイ按摩さん、此の男より乃公の方が好い男だよ、左様して年は何方が若い、當て、見な……、當つたら二人共揉ませやう……按「ホ、ホ、夫れは直に當ります……北「イヨ……此奴は面白い、サア乃公は幾歳位いだ按「ヘエー、お顔は宜ふ道具が揃ふてじや……北「知れたことよ、足らなくつて堪るものか按「お目は大きいでせう……、夫れからお鼻が……、ホ、ホ、北「高いか、低いかれ按「お腹を立てては困りますよ、確に獅子鼻で……、丹「アハ、ハ、ハ、ヨク當つた……彌「乃公は、何うだア按「貴公は、此のお方より年を取つてじや、お年は四十ぐらいで……色が黒ふて、鼻の開いた髯だらけなお顔じや北「イヨ、奇體く、ヨク當るぜ按「ソして、小肥りに肥つて……、目付のギロくさした……彌「イヤ、違つたく、乃公はスツキリさし

いろをどこた色男で……北「エツへ、ハ、ハ、嘘を吐くぜ、オイ按摩さん、お前の勝だ、揉んでやりねへ彌「マア宜い、約束だから仕様がねへ、サア此處へ来て揉んでくんな按「ハイ、夫れへ参りませう……彌「次郎兵衛の後へ廻り、ソロく揉み始める、スルト女の菓子賣りが来る女「宜ふ、お泊りなさいませ、お菓子買ふて下さらんかいな……北「イヨ、ダンくさ来るわく、ナカく好い菓子だぞ、お前乃公等に賣る氣か女「ハイ、買つて下され彌「上方の女中は手があるの……女「手も足もないが、屬魂お前さん方に惚れたのでござんすよ、左様思つて特別に澤山菓子買ふて下されや」箱を出して置いて勝手へ行つて仕舞つた北「アハ、ハ、ハ、ヨクベラく口喋る女だ」云ひつゝ彌「次郎兵衛に目配りして、ソツと五ツ六ツ菓子を取り出して後へ隠す、按摩は手早く取つて袂に入れる、彌「次郎兵衛も北八も一向知らない、何うやら人の足音がするから、北八又も密に二ツ三ツ取つて隠す、按摩も又取つて袖に入れる、處

へ菓子賣りの女は、勝手より茶を持って来る女「サア、お茶を上げませう彌
 ヤア有難い、折角お前が来たものを、満更喰はないさも云はれめへ、ドレ一つ
 貰ほう」菓子箱引よせ彌「之れは、幾等だい女「ハイ、四文づゝで……北「フ
 ム、乃公も一つ喰ほう……丹波のお方も食いねへ……」皆ムシヤ／＼喰ふ、
 スルト北八は眞面目な顔して北「オイ待ねへ／＼、無闇に食つては數が分らな
 くなるよ女「イヤ、宜うございます、何程でもお上りなされ、只でも上げます
 よ……ナアお蛸さん……按「サアサ、お上りなされドレ其方のお方揉みませう
 かいな……彌「オヤツ、最うおしまいか……按「サア貴公、妾の脇へよつて下
 され北「ウム、之れで宜いかい、サア始めてくれ……女「最一つお上りなさい
 な……按「お鍋さん、御馳走なさいよ、此のお方々はお心よしでござんすよ、
 サア貴公お横に……北「ウム、最う肩は仕舞か、強氣に早い……丹「ウワー
 之れは別嬪の口にかゝつて、大層菓子を食つてのけた、幾等だい……女「ハイ

く、お三人様で二百四十八文でございます彌「エツ、飛んだ事を云ふ……、
 左様に喰ふものかい、北八は幾等喰つた北「エ、乃公は之々だ……丹「私は
 四文のを五ツ食つたから……ソレ二十文やるよ彌「ジャア、後は二人で出すの
 か馬鹿／＼しい、菓子より旅籠の方が安い……女「デモ、食へなかつたもの仕
 方が無いではございせんか、オホ、彌「イヤオホ、彌「イヤオホ、彌「處じやれへ、
 飛んだ目に合せた」彌「彌次郎兵衛呟きながら錢を拂ふ、此の時按摩は揉んで
 しまつた彌「按摩さん、幾等だい按「ハイ、お二人でおあし一筋下さいな北「
 ナニ、五十づゝか……コリヤ高い／＼……」之れも是非なく拂つた、按摩「菓子
 子賣りは錢を貰つて出て行く彌「何うも、上方の女にやア油斷がならねへ、併
 し菓子賣り奴が乃公を馬鹿にして居やアがるが、アノト菓子を此處へ取つて置
 いたのを知られさば……エツへ、背後を見るも何もない、北八も自分の
 置いた處を見るも之れもない、處へ女中が茶を持って来る女「御退屈様でござ

いませう」引下る北何うも妙だ。今の分捕りの菓子があるさ、丁度茶が来て宜いに……、何うしたか知らん……丹「アハハハハハ、今の按摩が持つて行つたのだらう、イヤ此處に宜いものがある」さ、後の柳行李を明けて、何か取り出す丹「サアサ、之れは道修町の店で貰つて来た砂糖漬じや、茶の子に一つお上り……北「イヨ、此奴は有難い、彌次さん何うじや、澤山やらかじれへ丹「ウワー、左様に喰つて貰つては困る……」さ、引取つて早く始末する、此の時女中は蒲團を持つて来る、玄「最ふ、お床延べませうか……」さ、床を敷く、今一人の女勝手より枕を持つて来て投げ込んで行く、見るさ今の按摩だから、三人は打ち驚き、彌「オイ姐さん、今此處へ来た女は先刻の按摩だらう、女「ハイ、左様でございます、北何うして目が見へる……女「アレは、目明でございますの……彌「エツ、サテは乃公等の事をヨク當てた筈だ、目が見へるんだもの……馬鹿くしい……北「ジャア、彼奴が……乃公の物した物を物したに違ひ

ない、忌々しい……女「ホ、ホ、ホ、可笑しなこさ、お前さん方の物したものを物してじや、妾も斯んなに貰いました……ホ、ホ、ホ、」袂より澤山菓子を出して見せる女「ホ、ホ、ホ、お寝みなさいませ……北「アハハハハ、大笑いだ……アハハハハ、彌「矢張り先方が、下ツ腹に毛のれへのだ……アハハハハ、處で北八斯うもあらうかい。

ろく／＼に按摩は取らず菓子迄も

ここに目のないゆへに取られた

北「アハハハハ、其の通り……」笑い興じて三人は、枕を並べ、蒲團引つ被つて寝る、處が丹波の男は、間もなく高野、グウ／＼と正體もなく眠つてしまつたが、彌次郎兵衛と北八は何うしても寝られない、眞夜中過に北八はムツクリ頭を上げ北「オイ、彌次さん、お前ゴソ／＼と何をして居るのかい、彌「ナゼか、一向睡られねへから、不圖思い出して、之れを見ろい、足で斯ん

なものをカキ寄せた……」さ、夜具の中から小さい曲物を出して見せる北「オヤツ、夫れは先刻丹波の男が出した砂糖漬じやアねへかい彌「シツ、聲が高い……静にしれへ、柳行李の脇に出てあつたのを、先刻から睨んで置いたのじや北「オイ、一つ寄しれへ彌「待て……」彌次郎兵衛蓋を取り、一つ摘んで口に入れ彌「ムニヤ、ムニヤ……、オヤツ此奴餘程堅人よ、カチ、云つてゐるわ北「ドレ、乃公にも出しれへ……」曲物を引取り、之れも摘んで口に投り込み、グシヤリ……北「ウワー、何だい之れは……、灰らしいよ……、ペツ、ペツ……彌「オヤツ、之りや砂糖漬じやアねへよ、何だか可笑しな臭いがする……」さ、ゲロ、云つて居る、此の物音に丹波の男は不圖目を覺し此の體を見て吃驚仰天、夜具跳ねのけて飛び起き丹「ヤイツ、手前達コリヤ何をすのじや……、私の女房を何故喰つたのじや彌「ナニ、お前の女房……何の事だ、一向分られへ……」丹「何の事じやさは情けない、夫れは私の女房じや

其の曲者の蓋をヨク見るが宜い……」さ、云はれて彌次郎兵衛、件の曲者を行燈の側に持ち行き、蓋の書付を見るさ、秋月妙光信女としてある、彌次郎兵衛アツと尻餅ついて彌「エツ、夫じやア此の曲者の中のもの、お前の女房の骨だなツ北「ナニ骨さは……ウワー大變、道理で胸がムカツク、ペツ、何うしやう……」二人はゲロ、云つて居る。

十七 明日は久し振で百兩に對面

丹波の男は目を剝いて怒り出した丹「ヤイ、手前等の胸が悪くなつたより、オ、乃公の胸の中はタ、堪らんわい、之れは乃公の村の規則で、其の骨を高野山へお納めに持つて行く處だぞ、ソレ夫れほど大切な佛を何故喰いよつた、キ、貴様達はニ、人間じやアあるまい、鬼か畜生に違いない……」さ、怒鳴り立て居たが、果てはオイ、泣き出した、彌次郎兵衛も可笑しいやら腹立たしい

御覽なら、すみよしおきあわぢしまへうごみさきすまあかしおほふねせんどうめしなんばいくつた、何に喰た蚊喰くたもヨク分る、未だく不思議は、此の目鏡をお耳に當てるこ、芝居役者の音聲迄が残らず聞へる此處から芝居を見るも同然、又お鼻をつけるこ、料理屋いろはの飯の匂ひ、ブンくさ召し食つたも同然、只の四文で安いく、千里一目の遠目鏡、サアサ之れじやく、彌次郎兵衛近よつて彌「オイ目鏡屋、新町さやらも近くに見へるかね目見へるく、此のお山の近くにツイ見へるく、彌夫じやア、近くに見へるのじやアねへ、遠くに見へるのじや目ナゼです……彌ハテ、此の高津と新町の間はタツタ一寸三分ほかれへのだもの……目ソリヤお前さん、大阪の繪圖面で見たのであらう、彌ウム、其の通りくアハ、先づお宮へ参らう」三人は神前にぬかづき奉り。

もろくの神に脊比べしたまわば

さこそ高津の宮のたうさき
 これけいだいしだんにしをたにまちどほで、何うやら腹が飢いて来た、三人は居酒屋に立ちより彌「モシ、何かありますかへ亭」ハイく、煎殻に鳥貝、鮮の昆布巻がありますよ北「オヤツ薩張り分られへ、其のうちで、甘味いものな何でも宜い出してくんな亭」ハイく、畏まりました彌酒は三合ばかり頼むよ北「ア、雪隠へ行きたくなつた、オイ亭主雪隠は何處だく……オ、有るく」縁先より向ふに廻つて雪隠へ入る、此方では早や酒肴が出た彌「佐平次さん、サア一杯遣りねへ佐」マア、貴公から……彌「ジャア、お先……、オット……、ア、宜い酒だ、オイ北八、早く出れへかい、酒が無くなるよ、宜い加減に氣張つて置け……」急ぎ立てられて北八、雪隠の中で酒が飲みたくつて堪らない北「オ、合點だ、今出るく」慌て、戸を開け、ズツと出るこ、一向酒屋が見へない、此の雪隠は二軒共同だから、入口が二つある、北八間違へ

て裏手の戸を開け飛び出したのだ、北八不思議に思つてジロく見廻すと、縁側で隠居が一人何かカチ／＼細工をして居たが、北八の姿を眺めてアツと驚き目鏡の上からジロく見て居る、北八もウロ／＼して居る「隠、オイ、お前さん何じや……北、オヤツ、此奴は間違つたらしい、モシ酒屋へは何う行くんで……隠、ハ、ア分つた、お前は表の酒屋の客じやな、此の縁側を左りに取つて行くさ宜いよ北、ハ、ア、スルト又元の雪隠へ逆戻りをせんけりやアならねへな……」北八雪隠の戸を開けやうとするさ、内部では△「エ、ヘン、北、ウワー、南無三寶道が塞つたが、何うしやう／＼……」聲聞きつけて雪隠の中より彌、左様云ふ聲は北八か、乙な方へ出て居るじやアねへか北、オヤツ、彌次さんかい、乃公は戸迷いをして飛んだ目に遭つた、早く通してくんな……」さ、戸を開けにかゝる、彌次郎兵衛内より掛金をかけ彌、マアモ少し待つてくれ、今が氣張つて最中だが、未だ巧く催しさないのだ、少々暇がいるよ……

ア、退屈だ、北八一つ金に恨みでも語らうか、其處で口三味線頼むよ北、エツ飛んだ事を云ふ、早く出てくれ／＼地團駄踏んで居るが、内では一同驚かない、彌次郎兵衛は悠々道成寺の歌、彌戀の手習いツイ見ならいで、誰に見しよさて紅がれつきよぞ、皆な主への心中だて……オ、嬉しく……北、ウワー、氣の永い何の事だい、早く出れへ……」内部では一向返事もしない北、オイ彌次さん、何うだい最ふ出たかい……彌次さん／＼と、無理に戸を開けんと、力に任せてウンと押すと、掛金は外れて、戸は開いた、途端に北八、雪隠の中へ轉げ込む、彌次郎兵衛吃驚、酒屋の方へ戸を開けて出る拍子に、戸は外れてズドンと倒れる、其の上に北八が重りかゝる、戸はバリ／＼壊れる彌、アイタ……」酒屋の亭主は驚いて飛んで来る亭、オヤツ、之りや何うじやお前方何故雪隠の戸を破つた北、イヤ、全體お前の方が悪い、斯んなに兩方へ出口を拵へて置くから不可ない亭、ケド、二人連立つて雪隠へ行くさゆふこさがあるも

のか、馬鹿くしい彌「マア亭主、勘辨してくれ、乃公が悪かつた、ア、痛い
く……」店へ来る案内者の佐平次は待ち兼ねて佐「お前さん方、何うなさ
いました北「何うしたも斯したも……、打身には酒が好いさ云ふ事だ、早く一
杯呑ませてくれ彌「待て北八、此處は尻が悪い、又先へ行つて飲め……」勘定
して漸々立ち出で。

出るさこの遅い早いで争いし

之れ宇治川の雪陣かそも

それ「たにまちどほり安堂寺町より馬場の原に出で、何なく天満橋に歩つて来た、
夫より谷町通を安堂寺町より馬場の原に出で、何なく天満橋に歩つて来た、
橋の上には群集が黒くなり、河中の遊山船を眺めて、船の中と橋の上とで、互
いに何か云ひやつて居る彌「ハ、ア、江月でもヨクあるよ、橋の上と船の喧嘩
は……北「ウム、違いねへ
眞黒になつて腹立つ喧嘩して

阿房よくさ烏めかする
夫れより天満橋を北に渡り、市の側通りを行く、此處は青物の市の立つ處にて
其の繁昌云げん方もない。

青もの、賣買ながら商人に、

尾ひれの見ゆる市の側まち

程なく天満宮の境内に到着した、参詣の男女引も切らず、境内には料理茶屋、
の赤前垂、水茶屋、揚弓場、其他見世物芝居、輕業、曲馬乗等、賑々しく充満
して居る。

何に一つ御不足もなき御繁昌

まことに自由自在天神

境内を悉く順禮して天神橋通りに出るさ、何うした拍子か、彌次郎兵衛の
穿いて居る雪駄の横花緒がプツ、リ切れた彌「ア、失策つた、京のものは油断

かなられへなア、大丈夫一年は請合なんで、賣りくさつて思々しい」呟いて居る。向ふより△「デイ〜、デイ〜」大阪の紙屑買はデイ〜と云つて歩く。江戸では雪駄直しがデイ〜と云ふから、彌次郎兵衛江戸の積りに思つて彌「オイ〜、デイ〜屋、此の雪駄頼むよ屑へエ、之れは片しほかない……片しでは仕様がな、見りやア其の穿いてるのも何うやら花緒が危ない……一處にしなさい……」彌「成程、此奴も今に切れさうじや、ジヤア一處にして幾等だ屑屋は買い取る積りで、捨くり廻し屑之りや、安いなア……彌「ウム、安いに限るよ……」屑「左様だなア、マア四十八文位いじや、彌「エツ、夫りや高い、二十四文にして置け屑「エツへ、ジヤラ〜した事を……冗談じやアない……」彌「イ、ヤ、二十四文にしてくれ……」屑「屑屋は妙な顔して、屑「オヤ〜、賣る人から値段を直切るとは珍らしい」と、笑ひながら二十四文を出して屑「ジヤア、二十四文に買けて買ひませう」二十四文彌次郎兵衛に渡し、尊

駄を荷の中に投げ込んで立ち去ろうとする、彌次郎兵衛慌て、彌「オイ待つた〜、乃公に錢をよこして其の雪駄を何うする屑「今、二十四文で買ったのじや彌「ジヨ冗談じやアねへ、花緒が切れたから直してくれと云ふのだよ……」屑「オヤツ、お前は私を履物直しと思つて居るのだな、ヤイ紙屑買いは渡邊から出るのじやないぞ、馬鹿奴ツ……」彌「チニイ、馬鹿奴とは太い事を云やアが、シヤア何故デイ〜と云つて歩くのだ、デイ〜と云ふのは雪駄直しの事だい……、糞放れ奴ツ……」と力味んで居る、案内者の佐平次は押しこめ佐「モシ、お前さんが粗相じや、江戸では雪駄直しがデイ〜と云つて歩くが、大阪では屑屋がデイ〜と云ふのじや……」屑「屑屋さん、間違いじや〜、勘辨しておくれ屑「ケド人を機多のやうに思つて居やアがる、馬鹿〜しい北「オアイ屑屋〜、間違いだから怒らなくつても宜いよ、其の雪駄を返しれへ屑「否だよ、履物直しと思はれて堪るものかい……」屑「ン〜怒るを漸々宥めて雪駄

を取り返し北「サア、行こう、飛んだ間違いをやらかした」さ、三人は天神橋を南に渡り、横堀通りをノコノコ歩いて居るさ、行手に當つて人が立ち騒いで居る北「オヤツ、何だらう……、ヤア喧嘩だ……ソレ殴り合つて……、傍杖喰つちやア満られへ……早く通り抜けやう……」さ、三人急ぎ人込みの中を潜り通り抜けて居るさ、彌次郎兵衛の足許に何か包んだものが落ちて居る、彌次郎兵衛何心なく開いて見ると、八十八番と書いて、何か判が捺してある札だ、今は左様な事はないが、其の當分座摩神社では富籤があつたものだ、群集に紛れて誰か取り落したものと見へる彌「オヤツ、之りや何んだらう……」佐平次は之れを見て佐「モシ、夫れは富の札ですよ彌「左様だらう、八十八番と書いてある佐「成程、座摩様の富札じや、然も今日つく日だが、今頃は大方振つてしまつた處であらう彌「左様だらう、何うせ落す位いものだから、空つほの札に違いれへ……」さ、其の儘打ち捨てる、北八後よりソツと拾つて裡懐

へ捻じ込み知らぬ顔、聽て三人は座摩神社に來た、今日は富くじを明ける當日であつて、今漸々濟した處と見へ、群集は押し合ひへし合ひ歸つて行く様子だ△「ア、失策つたなア、アノ八十八番は既での事に乃公が買ふ處じやつたのだ夫れをヨク買はなかつたのは、未だ此方へ運が來ないのだ□「左様だ、買つたら百兩取れるものを……残念な事をしたなア……」さ、話して居るを彌次郎兵衛はチラリと聞いてアツと驚き彌「北八聞いたか、今乃公が拾つた札を打ち捨てなかつたら、百兩になるのだつたに……ア、惜しい事をした……、何うじやい後へ引返して見やうか……北「ナニ、今迄有るものかい彌「エツ忌々しい……」三人は神前に來て見ると、富札は最ふ仕舞にて、第一番よりの當り札を一々記して正面に張りつけてある、見るさ一番の富札は、八十八番と筆太に書いてある、彌次郎兵衛餘りの事に地圖太踏み彌「エツ、忌々しいなア……、折角手に入つて居たものを……乃公は最ふ坊主にでもなりたい……北「アハ、

「彌次さん、左様に力を落さなくつても宜いよ、乃公が百兩取るから、お前にも三兩や五兩は貸してやるよ……へ、ン、コレ此の通り……」さ、懐裡より取り出して見せる彌「ヤ、ツ、手前拾つて来たか、出来したく、此方へ寄越せ……北「イヤ、左様はなるめへ、お前の捨てたものを乃公が拾つたのだから、之りや乃公に福が授かつたのじや彌「ケド、必竟乃公が先に見付けて拾つたればこそ手前の手に這入つたのじや北「夫でも、一旦捨てたものだもの」互いに争つて居るさ、佐平次は押しさめ佐「モシ、静になさい、若し捨てた人が聞きつけて出まいものでもない、マア、兄弟同様の間柄じや、半分づつ分配なさい、私にもチトお禮はあるだらうと楽しんで居るのじや……北「ウム、夫れば素よりだ、何しろ善は急げ、金は何處で受取のだい佐「ソレ、其處の世話人の處じや」三人は行つて見るさ。

當日殊の外混雑仕候に付き、當り札のお方は明日四ツ時金子御渡申

べく候以上

月日

世話人

右の引札が出て居る北「ハ、ア、今日の事にはならないのだな、何にもせよ有難い事じや」さ、三人は神前にぬかづき

御神の利生かくべつ有難や

罰にはあらで當る富札

かく詠じて勇み立ち、社内残らず順拜して、表の方に立ち出で北「ナント彌次さん、其の内に捨てた奴が金を受取りに来るかも知れねへぜ佐「ソリヤ、氣遣ない、行つた處で札と取りかへじや、幾等本人でも札がなくなつては仕様がないう無證據じやもの……彌「ウム、奇妙、豪氣に面白くなつたわい北「アハ、明日は久しぶりで百兩に對面……彌「何を云やアがる……久しぶりも可笑しい、今迄生れて對面した事があるか、アハ、三人は勇み喜び、一軒

の茶店に入り込み、前祝の酒くみ交し、微酔機嫌となつて、浮れ出で、案内者佐平次につれられ、難波御堂の穴門より境内を順拜しながら

おふみさまと聞けば女の名にも似て

アラ有難の穴かしくなり

夫より仁徳天皇の社に詣る、之れば俗に博勞の稻荷といふ、博勞稻荷は別に境内にある

博勞の稻荷と云ふもこそわりや

繪馬賣りて喰ふ店も見ゆれば

彌「コウ北八、ナント之から新町さやらへ女郎買に行こうじやねへか北「面白、直に行こう、ノウ佐平次さん佐「へエ、お越しになるのも宜しいが……お前さん方其の姿じやア駄目ですよ……ソリヤ局女郎でもお買いなれば格別店つきじやチト身装が悪い……マア今夜は我慢して、明日百兩の金が取れて後

立派に飾してお越しなさい彌「ウ成程、尤だ、明日否でも應でも百兩の金か手に入るんだ、寧ろ買ふなら太夫と云ふ奴を買つて見たいや北「オヤツ、膽が太くなつて来たの佐「ソリヤ、其の筈でございませよ、明日の晩は九軒の揚屋何處へでもお連れ申ませう……オ、此處が名高い太丸屋ですよ彌「イヨ、豪氣だなア、江戸にも斯んな大きい店は滅多にねへよ、ナンと北八、此處へ今着物を誂へて行こうじやねへか北「ナアニ、今じやアなくつても宜い、サア行こう……彌「ジャア、明日の事にしやう……時に北八、手前は何にするのだ北「着物の事かい、乃公は結城のグツと意氣な縞で三枚ばかり……夫れから羽織は龍門のゴリくする奴の芥子霰なぞが金持らしくて宜からう彌「イヤ、夫では店者らしいから不可ねへ、乃公は縞チリ揃へに、黒羽織、太刀一本チヨイと極めか……八丈は野暮……唐棧は爺めくし、南部縞は最ふ湯屋にでも脱いであるやうになつたし北「ウム、着る段になるさ、ナカく見當られ

へものだ」さ、二人は夢中で着物の話をして歩く、跡から往來のものは△「オ
イお前さん、着るものがなけりやア、矢張り其の後ろに大きな紋のある幟の染
かへしの衣物を着て居る方が柄だよ北「エ、イ、何に吐しやアがる……思々し
い奴等だ、今に見る、明日は何んなもの着ると思やアがる佐「アハ、ハ、ハ、ハ、
マア左様怒りなさるな、お前さん方が左様な衣物を着て居て、縮緬じやの羽二
重のさ云ふから笑ふのだ、時に之から阿彌陀池へ参詣して、砂場の和泉屋をお
目にかけていたいな彌「イヤ、宮も寺も最ふ飽いた、夫より早く新町へ行つて、女
郎買がして見たい、明日の晩迄待つのは堪られへ佐「夫では、斯うしませう、
損料の着物を借りてあげますから、夫れを着て、今夜新町へお越しなさい、金
は後でも大事ない、私が親方の知つてる揚屋へお連れ申さう、何うせ明日は百
兩のお金が取れるのは極つて居るのじや北「此奴は面白い彌「ウム、ジャア直
に歸つて、其の算段をして貰いてへ」二人は有頂天になつて歩く足も地につか

ない、心齋橋を涉つて南へ早や道頓堀へ出る、大阪第一の繁昌場だから、女郎
や藝者がイト艶かしく、行き交ふさまは、賑はしきとも云ふばかりなし
いつさても調子狂はじ三味線の
道頓堀の賑いはそも

十八 醫者が清盛様の脈を見に行くやうに

何んしろ前に島の内あり、後に阪町あり、其の間に狭まれた道頓堀、繁華なこ
さは此の上もない、其の日も早や七ツ下り、大西の芝居は打ち出し、櫓太鼓の
音喧しく、評判じやくの聲木戸口にあふれて、見物も動揺めき立ち、押し
合ふ中を、三人は漸々スリ抜け／＼行く程に、何なく長町の宿に戻つて来た、
佐平次先に立ち佐「サア、お歸じやく……女「お早うございます彌「オイ、
佐平次さん、早く損印の方をね……佐「畏まりました、今直に……北「早く頼